2007

●第４７回関東甲信越静地区造形教育研究大会　東京大会
●第４６回東京都図画工作研究大会　中央大会
●第２５回東京都中学校美術教育研究会　第４ブロック大会

人間形成としての造形美術教育

ー新しい教育課程にどう対応するのかー

報告書

主　催

関東甲信越静地区造形教育連合
東京都図画工作研究会　東京都中学校美術教育研究会

後　援

文部科学省　全国連合小学校長会　全日本中学校長会
全国公立学校教頭会
東京都教育委員会
千代田・中央・文京・台東・豊島・北・板橋各区教育委員会
東京都国公立幼稚園長会　東京都公立小学校長会　東京都中学校校長会
文京区立幼稚園長会　千代田・中央・文京・台東各区公立小学校長会
文京・豊島・北・板橋各区公立中学校長会　日本ＰＴＡ全国協議会
（社）東京都小学校ＰＴＡ協議会　東京都公立中学校ＰＴＡ協議会
文京区立小学校ＰＴＡ連合会　文京区立中学校ＰＴＡ連合会

第４７回関東甲信越静地区造形教育研究大会　東京大会
第４６回東京都図画工作研究大会　中央大会
第２５回東京都中学校美術教育研究会　第４ブロック大会

大会テーマ

「人間形成としての造形美術教育」

― 新しい教育課程にどう対応するのか ―

大会報告書

■ 期　日　平成１９年１１月８日（木）・９日（金）

■ 会　場　全体会・各種会議・講演：文京学院大学・短期大学ホール

● 小学校公開授業・分科会：文京区立青柳小学校　青柳幼稚園
（大会テーマ）「みて、みて！こんなのつくったよ」
―子どもの育ちを大切にする図工をもとめて―

● 中学校公開授業・分科会：文京区立茗台中学校・区民プラザ
（大会テーマ）「つくる喜び・みる喜び」
―未来を心豊かに生きるために―

■ 主　催　関東甲信越静地区造形教育連合
東京都図画工作研究会　東京都中学校美術教育研究会

■ 後　援　文部科学省　全国連合小学校長会　全日本中学校長会　全国公立学校教頭会
東京都教育委員会　千代田・中央・文京・台東・豊島・北・板橋各区教育委員会
東京都国公立幼稚園長会　東京都公立小学校長会　東京都中学校校長会
文京区立幼稚園長会　千代田・中央・文京・台東各区公立小学校長会
文京・豊島・北・板橋各区公立中学校長会　日本ＰＴＡ全国協議会
（社）東京都小学校ＰＴＡ協議会　東京都公立中学校ＰＴＡ協議会
文京区立小学校ＰＴＡ連合会　文京区立中学校ＰＴＡ連合会

第４７回関東甲信越静地区造形教育研究大会　東京大会
第４６回東京都図画工作研究大会　中央大会
第２５回東京都中学校美術教育研究会　第４ブロック大会

大会報告書

目　次

○　あいさつ・祝辞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
○　研究発表・基調提案　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
○　大会宣言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
○　指導講評　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
○　記念講演　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
○　シンポジウム・記念講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
○　公開授業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
　　小学校　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
　　中学校　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
○　分科会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
　　第１分科会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
　　第２分科会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
　　第３分科会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
　　第４分科会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
　　第５分科会①･②　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
　　第６分科会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
　　第７分科会①･②　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
　　第８分科会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
　　第９分科会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
　　第 10 分科会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
　　第 11 分科会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
○　大会役員一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
○　次年度群馬大会の案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
○　大会を振り返って・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82

■ 外と内にむかって

関東甲信越生静地区造形教育連合理事長
東京都図画工作研究会会長
辻　政博

図工を「おまんじゅう」に喩えてみます。

80%の子どもたちは、このおまんじゅうが大好きです。けれども、このおまんじゅうは、世間では20%の人しか必要感を感じていない部分もあるようです。今回の改訂では、図工の時間数は、かろうじて現行を維持しました。私たち、造形美術の関係者は、今まで世間にあまりに疎かったかもしれません。

この「おいしいおまんじゅう」（図工）の意味や価値をもっと世間に伝え、10年後の改訂には、時間数が復活するようになってほしいものです。

また、おまんじゅうの「アンコ」の部分ですが、このアンコも「熟達した職人」たちが徐々に少なくなってきています。まさに世代交代がはじまっています。5年後には、団塊の世代が退職し、新人が人員の構成の多くを占めるでしょう。こうした意味からも、これまで培ってきた造形美術教育のノウハウを伝承していかなければならないと思います。

本研究大会の大きな成果は、多くの若い先生方が、一生懸命に授業研究に取り組んでくれたことです。このことは、当人にとっても図工教育にとっても大きな遺産になっていくでしょう。そして、研究大会を支え、準備してくれた先生方、関係者の皆さんの努力も忘れてはならないでしょう。感謝します。

子どもたちの大好きな「おまんじゅう」（図工）が、さらに、子どもたちの知性や感性を十分育むための存在となるためには、私たちは外に向かって、造形美術教育の意味や価値を積極的に語り、また、内に向かって、研究・研修をおこない授業力を高めていくことが必要です。

そのためには、造形美術教育関係者のさらなる連携と協力が不可欠でしょう。

■ 東京大会のお礼

関ブロ東京大会会長
正留　久巳

新しい学習指導要領の告示を前に、今大会のテーマを「人間形成としての造形美術教育」とし、大会を実施いたしましたところ、多くの方の参加があり、無事終了できましたことに感謝申し上げます。東京大会は新教育課程の告示の内容や、今後の指導の在り方について、より理解を深められることを一つの目標にしていましたが、告示が予測より遅れたために本研究大会ではその課題に深く迫ることできませんでした。しかし、直前に教育課程部会「審議のまとめ」が出され、奥村調査官より直接話を伺うことができ、新教育課程の内容に参加者の意識を焦点化できる機会となったことは、有意義であったと思います。また、中島信也先生の講演は今回の研究テーマを改めて考えさせられる内容であり、クリエイティブな仕事の在り方から学ぶものが多くありました。

各分科会では、研究授業をもとに熱心な意見交流や各県より実践に基づいた報告がなされ研究を深めることができました。開会式でも申し上げましたが、日本の教育の転換期に、造形美術教育の果たすべき役割と機能を再確認し、指導実践の研究を深めることが、将来を担う子ども達の育成に極めて重要であると考えます。教科の特性をとらえ、人間形成への働きを明確にした指導を展開することの大切さを再確認できた大会でもありました。

最後になりましたが、本大会開催につきましては、文部科学省をはじめ、各教育関係諸団体より多くのご指導と厚いご支援をいただきました。ありがとうございました。特に開催地の文京区には様々なご理解とご支援をいただきました。改めて感謝申し上げます。開催地東京都といたしましては、本研究大会を、新たな契機として今後にいかしていきたいと存じます。

■ あいさつ

文京区教育委員会
教育長　根岸 創造

第４７回関東甲信越静地区造形教育研究大会東京大会、第４６回東京都図画工作研究会中央大会、第２５回東京都中学校美術教育研究会第４ブロック大会が、本区を会場として盛大に開催されましたことをお喜び申し上げます。

本大会は「人間形成としての造形美術教育」をテーマに開催されました。現在、子どもたちを取り巻く社会状況は変化の激しいものとなっております。例えば、子どもたちはパソコンやゲームなどバーチャルな環境に身を置くことが多い状況があります。このような中にあって、体を動かし、自分の感性を十分に表現する造形美術教育の充実は大変に意義のあることと考えられます。２１世紀を生きる子どもたちが主体的・創造的に生きる力を身に付けるために本大会の成果が多くの示唆を与えていただけたと考えております。

特に幼稚園、小学校、中学校で行われた研究保育・授業では素材や活動を工夫し、子どもたちの興味・関心を高めた示唆に富んだ授業実践がみられました。どの実践も「こんな作品を作りたい」「おもうような色や形にするにはどうすればいいのだろう？」「こんな楽しい、きれいな作品ができた！」という子どもたちの声が聞こえてきそうな場面を多くみることができました。このような姿が主体的・創造的に生きる姿の基礎となると感じることができました。子どもたちの笑顔に裏打ちされた授業実践に感動するとともに、敬意を表したいと思います。そして、本研究大会での実践・研究成果が新しい時代の造形教育をリードしていくものと感じることができました。

終わりになりましたが、大会の開催にあたり、ご尽力いただきました東京都図画工作研究会、東京都中学校美術教育研究会をはじめ関係機関のみなさまにあらためて感謝申し上げ、私のあいさつとさせていただきます。

■ 東京大会をふりかえって

関東甲信越静地区造形教育研究大会東京大会副会長
東京都中学校美術教育研究会会長
牧 井 直 文

清澄な秋の空気が感じられる11月８日・９日の両日、各県各地区より多数の参加を得て第４７回関東甲信越静地区造形教育研究大会東京大会が開催され、成功裡に終了した。今大会は、第４６回東京都図画工作研究大会中央大会並びに第２５回東京都中学校美術教育研究大会第４ブロック大会が同時開催で進められ、「人間形成としての造形美術教育」をテーマに、具体的な実践発表や授業提案が行われ、講演会などをもとに研究が深められた。

戦後教育のスタートから６０年、いま学校教育は大きな転換期を迎えようとしており、昨年暮れの教育基本法改正に続き、今後を方向付ける法改正が次々に進み、新しい学習指導要領も年度内には告示される見とおしとなった。こうした時期に、学校現場で直接児童・生徒の指導に携わる先生方が一同に会し、造形美術教育のあり方や方向性について話し合い相互に研究を深めたことは、今後の展望を開くよい機会になったと思われる。

改正教育基本法の前文には「豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する。」との内容が新たに加えられた。造形美術教育こそ、その中心的な役割を担うべき教育分野であると思われるが、今日の改革は必ずしもそういう方向に動いているとはいえない。

今大会を契機として、もう一度教科教育の果たすべき役割を見つめ直し、原点に立ち戻って目指すべき方向性を明らかにし、これからの造形美術教育の充実に向け取り組みを進めていかなければならないと考える。

最後に今大会開催に際し、様々なご支援ご尽力をいただいた多くの皆様・関係者各位に心より感謝を申し上げ、挨拶としたい。

■ 第２５回都中美大会実行委員長挨拶

板橋区立上板橋第一中学校長
新保 邦明

この度、ご来賓の方々をはじめ多数の皆様においでいただき、文京区立茗台中学校のご協力のもと、本大会を開催できますことに、心から感謝申し上げます。

さて、本研究大会のテーマは「つくる喜び・みる喜び」です。美術の授業を通して生徒たちに「つくる喜び・みる喜び」を味わわせ、生きる力としての基礎・基本をしっかり身につけさせる、そして、これからの未来を心豊かに生きる生徒を育成する。これは、私たち美術教師の共通の願いであり、目標です。

現代の非常な情報社会の中で、子どもたちにとってもコンピュータ、携帯電話は当たり前の世界になりつつあります。情報が一方的に湯水のようにどんどん入ってきます。そして、本当に手軽に情報を発信することができます。「手軽であること」「すぐ結果が出ること」が子どもたちの感覚では当たり前になりつつあります。一方、美術の表現活動である「描く」「つくる」「鑑賞する」という行為は、大変手間暇が掛かります。時には抵抗感もあります。キーを押してポン、というわけにはいきません。しかし、この手間暇をかける行為の大切さを学ばせ、表現することの喜びを味わわせることが、未来を心豊かに生きる子どもの育成のためには、大変大切だと思います。この大会を一つのきっかけとして授業改善・工夫を続ける中で、ぜひ「つくる喜び・みる喜び」を子どもたちに体験させていきたいものです。

本大会を開催するにあたって、不手際があり、関係者の皆様にはご迷惑・ご心配をおかけしました。実行委員長としてお詫び申し上げます。本日は、お忙しい中おいでいただきありがとうございました。

■ 輝く子どもたち

文京区立小日向台町小学校
沼野 章彦

「さっきの先生の言葉でひらめいた！」「いいこと思いついたよ！」「ああ、いい感じ。」「やったあ！」「先生、見て、見て！」

これは、本大会の公開授業で実際に聞かれた子どもたちの声です。大会の主人公は、図工の授業で輝く子どもたちでした。授業に積極的に取り組み、大会のテーマを実現してくれた青柳小学校の子どもたちに、感謝しています。

「みて、みて！こんなのつくったよ」

この声が、私たちの研究のきっかけであり、目指すところでしたが、本大会を終えて、それが新たな出発点となりました。私たちは図工の授業の中で、子どもたちの思いや喜びを受けとめ、子どもたちの信頼に応えられるように、努力していきたいと思います。

記念講演をしてくださったＣＭディレクターの中島信也様には、コミュニケーションと思いやりの大切さを教えていただき、大変感銘を受けました。シンポジストの原島博様、藤幡正樹様、苅宿俊文様、土佐信道様には、図工の時間に対する心強い応援をいただき、ありがとうございました。

諸行事等で大変お忙しい中、ご都合をつけて本大会に参加してくださった大勢の皆様に、深く感謝いたします。

お忙しい時期に会場校を引き受けてくださり、多大なご理解とご協力をいただいた文京区立青柳小学校の鴇田光俊校長先生をはじめ、全職員の皆様、保護者、地域の皆様に、心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、本大会にご後援とご指導をいただきました文部科学省、東京都教育委員会、文京区・千代田区・中央区・台東区各教育委員会、並びに関係諸機関、団体の皆様に厚く御礼申し上げます。

■　平成１９年１１月９日、子どもたちが輝いた日

文京区立青柳小学校長
鴇田　光俊

平成１９年１１月９日、第４７回関東甲信越静地区造形教育研究大会東京大会、並びに第４６回東京都図画工作研究大会中央大会が、本校を会場に開催されました。当日は、天気にも恵まれ、都内をはじめ、日本の各地から大勢の先生方に、ご来校いただきました。また、本校の保護者や地域の皆様方もたくさん参加してくださいました。

千代田・中央・台東・文京の中央ブロック４区の子どもたちの個性豊かな作品が、所狭しと展示され、いつもの学校とはまるで別世界のような中で、午前中は、本校全１１学級の児童に青柳幼稚園の園児も加わって研究授業が行われました。

この日だけは、学校中が図工の授業の舞台になり、また、授業者も題材もみんな異なる、子どもたちがワクワク・ドキドキするような環境の中で授業が始まりました。

１０時から１１時３５分までの２時間続きの授業でしたが、どの会場でも、子どもたちは目を輝かせ、生き生きと学習に取り組んでいました。

会場校を引き受けるにあたり、不安もありましたが、大会が終了した今の気持ちとしては、本校を会場にしていただいたことに心から感謝しています。また同時に、今大会のためにご尽力くださった関係各位に心から敬意を表する次第です。

いじめや不登校、凶悪な犯罪の低年齢化など、子どもたちの心に関わる問題が顕在化する中で、図画工作教育の果たす役割は、ますます大きくなるものと思います。今大会の成果を踏まえ、それぞれの先生方が、今後さらに子どもたちの豊かな心の育成に向け、ご尽力くださいますようお願い申し上げます。

１１月９日は、本校の子どもたちが光り輝いた日でした。ありがとうございました。

■　大会を終えて

文京区立駕籠町小学校長
古川　邦明

東京大会が盛況の内に無事終了し、おめでとうございます。ひとえに、大会に向け準備してきた皆様の努力と創意が結集した結果であったと思います。また全面的に力を貸してくださいました会場区、文京区の教育委員会、校長会、とりわけ、会場校の青柳小学校鴇田光俊校長先生はじめ職員、ＰＴＡの皆様のご尽力に感謝申し上げます。

大会１日目に行われた記念講演の講師、東北新社専務取締役中島信也先生のお話をうかがい、コマーシャルを作るには、考えたことを表現することによって初めて互いの知的なコミュニケーションが図れること、相手に対する優しさと真心を抜きにして制作は出来ないことをあらためて認識いたしました。

今、小学校では表現力の育成がどの教科でも求められています。その手段として、算数では式、図、グラフなどの数学的な手法を用いて、国語では話す、書くなどの言語活動を通してといった具合ですが、図画工作でも創作活動そのものの楽しさとともに表現力の育成は欠かせません。たった一枚の絵を見ても安らぎや真心といったものを感じさせてくれる表現力の素晴らしさが図画工作の教科にはあり、特に顕著な教科だと思います。

今回の東京大会ではその良さをアピールできる絶好の機会であったと思いますが、文京区の図画工作部の先生方も、会場担当区としての重責を十分認識し、全員が心を一つにして、毎回遅くまで残って教材研究や会場準備に取り組みました。大会テーマの「みて、みて！こんなのつくったよ」に関わる研究授業も数年前より分科会ごとに繰り返し行われてきたものです。大会を通して先生方が大きく飛躍されたこと、区小研図工部の顧問として関われたことを大変嬉しく思っています。

研究発表・基調提案

研究発表・基調提案

人間形成としての造形美術教育
ー新しい教育課程にどう対応するのかー

■ 関ブロ研究局長　墨田区立堤小学校　　南　育子

私たちは、「人間形成としての造形美術教育ー新しい教育　課程にどう対応するのかー」を大会テーマと設定し、研究に取り組むことにしました。大会組織を立ち上げた２年前には、大会を前後した時期に「新学習指導要領」の告示が予想されていました。また、この２年間には、「改正教育基本法」の成立、「教育三法案」、「教育再生会議第二次報告」など、我が国の教育制度やその方向性を　基礎付ける法案や答申が提案され、激動の時代がつづいています。また、世界規模で進んでいる、グローバリズム、高度情報化社会、地方分権、競争原理の導入など、社会構造の変化にともない、教育改革がすすむなかで、造形美術教育にもさまざまな課題が生じています。

一方、図工の時間の子どもの姿をみると、私が子どもの頃の４０年前も今も、ものにふれ、描いては消し、できてくるかたちに夢中になり、からだと画面が一体化する姿は、今も昔もかわりがありません。私たちは、これまでも、子どもの人間形成にかかわる視点から造形美術教育の伸展を図ってきましたが、現在の変革のうねりの中で、「造形美術教育がもつ人間形成としての働き」という原点に再び注目し、その方法や内容、そして、存続について再検討私たちは、しなければならないと考えました。

私たちは、教科教育の視点から、これまでも基礎・基本を徹底しながら、自ら考え、進んで学習する力＝「生きる力」の育成に取り組んできました。これらは、知性と感性の調和のとれた人間形成を期することにほかなりません。

さらに、一人一人の子どもたちが、こころと体を十分働かせ、考え、試行錯誤し、表現する喜びを十分味わいながら、他者や世界とかかわり、自分自身をつくりあげていく過程に、真の意味での豊かな人間形成を重ね合わせ、図画工作教育、美術教育のあるべき姿を検証し、模索し、研究をおこないたいと考えます。

これからの変化の激しい、価値観の多様化した、グローバルな社会を生きる子どもたちにとって、基礎的・基本的な学力の定着の上に、想像力や創造力、そして、他者や文化に対する共感的理解や倫理性をそなえた豊かな、そして、実社会に生かすことのできる「人間力」の形成が必要です

そのためには、造形美術教育がもつ、こころと体を存分に働かせた創造的な学習課程の中にこそ、そうした人間的な資質・能力を育む重要な機会と場があると考えます。

豊かな子どもの育ちをもとめて、「人間形成としての造形美術教育」について研究をおこないます。（２つの実践例省略）

さらに私たちは、テーマ「人間形成としての造形美術教育」を具体的な授業研究に結びつけるために、３つの視点を設定し、研究をすすめることにしました。

１，「主体としての私のはたらき」とは、色やかたちを媒介とした造形活動をとおして、つくりあげられる「私」への着目です。子どもの造形活動の過程を追い、そこに働く資質・能力をよみとり、検証することが大切だと考えます。

2，「共感的なまなざし」とは、造形活動をとおして、生まれてきたさまざま　な子どもの思いが、他者や世界に受容されることによって、確かなものになっていくことを指します。そして、他者からの共感は、新たな自分の成長に大きな力を与えると考えます。

3，「他者や世界（文化）とのつながり」とは、自分を包み込む生活世界や　文化への着眼です。自分のおこなう活動が、現実の世界に深くかかわることに気づいたとき、はじめて子どもの成長と実社会に働く生きた力が生まれるのではないかと考えます。

これまで述べてきた研究テーマや研究の方向性、視点から、さらに具体的な授業研究をおこなうために、各校種の実態を踏まえながら、次のようなアプローチを試みることにしました。

表現活動の中でたびたびみせる「みて、みて！こんなのつくったよ」という子どもたちの表情や内から発せられる言葉には、素直な喜びや発見、自分への期待感があふれています。小学校では、自分にとっての意味を自らつくりあげていく創造的な活動を大切にした授業を研究したいと考えました。そして、研究をおこなうなかで、子どものあるがままをみつめるまなざしで、何がこころの豊かさをもたらし、また、そこでは何がおきているのかという事実を検証し、模索していきたいと考えました。

中学校では、「つくる喜び・みる喜び」という子どもの主体的な活動を支える喜びと創造的であることの喜びを実践から分析し、そこで働かせる力を検証したいと考えました。創造的に自分自身をつくりだす継続的な活動は、他者や社会、文化とつながることで実社会に生かすことのできる力になると考えます。こころと体を存分に働かせ、自分にとっての意味を自らつくりあげていく創造的な表現と鑑賞の活動を大切にした授業研究をおこないたいと考えました。

本大会の前日に「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」が公表されました。人間形成において教科の果たす役割、造形美術教育において子どもがどのような力を働かせ、どのような活動をするのか、私たち自身がもう一度、既成概念を取り払い、検証し、模索し、研究をすすめました。この姿勢は審議のまとめをみるかぎり、これからの造形美術教育の基盤になると考えます。造形美術教育において働く資質・能力から授業を見直し、子どもの色や形のとらえ方、表現を理解し大切にされる授業が求められています。

基調提案の２つの事例や大会で行われた授業からも、子どもの「いいこと思いついた！」「あっ、そうだ！」「やっぱりこうしよう」という気づきの声、つぶやきがたくさん聞こえてきました。「みてみて！」「これはね・・・」とたくさんの子どもたちに声をかけられました。真摯に子どもの声に耳をかたむけ、積極的に活動をみつめることから感じ取った子どもの姿をもとに分科会の提案、協議がもたれました。参観された多くの大人の眼差しが子どもの活動を受け止め、人間形成としての造形美術教育のあるべき姿を考える大会となりました。ありがとうございました。

みて、みて！こんなのつくったよ
～子どもの育ちを大切にする図工をもとめて～

■ 研究局長　文京区立礫川小学校
森田　敏裕

今年度、都図研大会を担当した私たち中央ブロック（千代田区、中央区、台東区、文京区）は少人数のため、研究は研究局員のみならず、一人一人が研究内容にも、大会運営にも大きな責任を負い、都図研役員の方々の大きなバックアップを受けての大会でした。少ない人数だからこそ、全員が自覚をもって大会を創り上げることができたのだと思います。まさに、全員でなんとかした手づくりの図工大会だったと私は自負しています。

研究は各区月一回の定例の研究会を中心に行いました。昨今の教育事情、財政事情、学校事情により、定例以外の区を超えての研究会をもつことが容易ならざる状況にあって、残念なことですが、今までのような各区横断的な研究の有り様は、現実的に無理がありました。各区の普段の研究の積み重ねが生きるように、公開授業及び分科会を各区で分担する形で行いました。各地区の事情もあると思いますが、今後に向けて、よりよい大会のあり方を模索していかなければならないと思います。

公開授業でなによりよかったことは、子どもたちと授業者の表情でした。子どもたちは、自分たちのもっている力を様々な場面で発揮していました。授業では、「みて、みて！こんなのつくったよ」「いいこと考えた」「いいこと思いついた」という声も、素材や友だちなどとのかかわりの中で、教師と子どものかかわりの中で、あるいは友達同士のかかわりの中でたくさん聞くことができました。子どもたちの表現活動を通した自己実現的な喜びの声、教師の共感の声でした。

また、今回は、関ブロ大会も兼ねていましたので各県の方々の発表もあり、おかげさまで分科会も充実した内容になりました。全体的には分科会への参加者が予想したより少なかったのですが、全体会時には多くの方々が続々と駆けつけてくださり、体育館は大勢の方々で埋まりました。

大会では分科会テーマ「つくりだす喜び」「他者や世界との関わり」「日常に生きる図工」「私をつくる（私＝人間形成）」「体と心を働かせた造形活動」「自発的な表現活動の生まれるとき」「連携を考える」を切り口として「子どもの育ちを大切にする図工」を提案しました。これらは、関ブロ大会テーマの「人間形成としての美術造形教育」にもつらなるものでした。

これらからもこれらの視点をもって研究を重ね、授業改善に取り組み、実践を通して、図工教育が子どもの育ち（人間形成）にとって大きな意義があることを多くの人々にわかりやすく、丁寧に伝えて行くことが、私たちが自らに課さなければならない大きな仕事であると思います。

私は、５．６年生の子どもたちに「図工では自分にどんな力がつくと思いますか。」と聞いてみました。技術的なことは少なく、「考える力」「工夫する力」「創造力」「想像力」「いろんな力」などがあげられました。その中に「未来力」というのがありました。皆さんも、子どもに聞いてみてください。大会への参加、ありがとうございました。

つくる喜び・みる喜び
—未来を心豊かに生きるために—

■ 研究局長　板橋区立上板橋第三中学校
畝村　明男

今回、第25回東京都中学校美術教育研究会第4ブロック大会は、第47回関東甲信越静地区造形教育研究大会東京大会、第46回東京都図画工作研究大会中央大会との同時開催という形で行ないました。都中美内第4ブロック（文京・板橋・豊島・北）としては、このように大きな大会の運営には全く不慣れで、なんとか大会をつつがなく終えることができたのも、ひとえに全造連や都図研の方々が、企画当初から多大なるご協力とご援助をくださったからに他なりません。この場をお借りしてお礼申し上げます。また、分科会に於いて研究発表や授業発表でご尽力くださった各都県の先生方にも、心よりお礼申し上げます。

さて、今大会は全造連の大会テーマである『人間形成としての造形美術教育』を受けて、その人間形成の上で美術教育の担っている役割を踏まえ、『つくる喜び・みる喜び』—未来を心豊かに生きるために—　を第4ブロック大会のテーマとし、今年度の研究と発表を行いました。

『つくる喜び・みる喜び』とは、子どもの主体的な思いや考えを引き出し、また多くの作者の意図を伝え、様々な見方・とらえ方・考え方を学ばせること。つまりは、『自分を知る喜び・他者を知る喜び』そして、『様々な見方・考え方ができる喜び』といえます。自己の表現活動のもとにある『ものを見よう』『感じよう』とする心から、『自分を認め、他者をも認める』広い心へ、その心の動きを膨らませることをできるのが、美術のもつ特性であると考えました。いかなる情報化社会にあっても、それをどう判断するのか、どう活用するのか、その基礎基本となるのは、人としての心です。心を伴った幅広いものの見方・考え方が何より重要になります。その力を培い、育てることこそが美術教育の果たすべき役割なのではないでしょうか。

折しも、今回の全体会の中で講演をしていただいたCMディレクターの中島信也氏は、今の世を憂い、コミュニケーションの必要性を語られていたと思います。そして、コミュニケーションとは思いやりであり、その思いやりとは、人の気持ちになって考えること。人の気持ちを想像する力。『想像心』という言葉を使って、その心の育成の必要性について話されたと私は受け取ったのですが、それこそまさに、私たち第4ブロックが取り上げたテーマの元をなす『自分を知る喜び・他者を知る喜び』心を伴った幅広いものの見方・考え方の育成に他ならないことであると自負した次第であります。

そして、各都県からお集まりいただいた先生方から発表された、研究や授業を参観させていただくにつれ、日頃の美術授業の実践は子どもの心の発育になくてはならないものであると、あらためて確信を持つことができました。

最後に、やはり中島信也さんがおっしゃっていた「画面の向こうにいる人の心を少しでも動かしたい。」という思いは、私たち教師が、子どもに対する思いそのもののように思われ、今後の教育活動の励みになるとともに、一層の努力を求められていると感じた本大会でした。

大会宣言

今日、私たちが生きる社会全体が、地球規模で大きな転換期をむかえています。
新自由主義に基づくグローバリズム、高度情報化社会、地方分権、競争原理の導入、成果主義などの社会構造の変化にともない、教育制度そのものが大きな改革を余儀なくされ、私たちが取り組んでいる造形美術教育にもさまざまな課題が新たに生じています。

「改正教育基本法」の成立、「教育三法案」、「教育再生会議第二次報告」など、我が国の教育制度やその方向性を基礎付ける法案や答申が提案され、さらに、平成19年度内には、「新学習指導要領」の告示が予想されます。このような状況の中で、図画工作教育・美術教育のよりよいあり方をもとめて、本大会では、「人間形成としての造形美術教育　ー新しい教育課程にどう対応するのかー」を大会テーマとして設定し、取り組むことにしました。

私たちは、戦後、約６０年にわたり一貫して、子どもの人間形成にかかわる視点から造形美術教育の伸展を図り、その都度、時代が要請する教育課題に対応してきましたが、現在の大きな変革のうねりの中で、そうした歩みそのものの原点、すなわち、「造形美術教育がもつ人間形成としての働き」に再び目をむけ、その方法や内容、そして、存続について再検討しなければならないと考えています。

これまでも、私たちは、教科教育の視点から、基礎・基本を徹底しながら、自ら考え、進んで学習する力＝「生きる力」の育成に取り組んできました。それらは、言わば、知性と感性の調和のとれた人間形成を期することにほかなりません。一人一人の子どもの育ちに寄り添いながら、より一層、こころと知恵を育むことができる造形美術教育のあり方を模索したいと考えます。

子どもたちが、こころと体を十分働かせ、考え、試行錯誤し、表現する喜びを十分味わいながら、他者や世界とかかわり、自分自身をつくりあげていく過程に、真の意味での豊かな人間形成を重ね合わせ、図画工作教育・美術教育のあるべき姿を検証し、模索し、研究をおこないたいと考えます。
また、教師の世代交代が急速に進むなかで、実践的な研修を通じて若い先生方の指導力の向上を図ったり、世代間の交流を図ったりするためにも、こうした研究大会の場が必要と言えるでしょう。

これからの変化の激しい、価値観の多様化した、グローバルな社会を生きる子どもたちにとって、基礎的・基本的な学力の定着の上に、想像力や創造力、そして、他者や文化に対する共感的理解や倫理性をそなえた豊かな、そして、実社会に生かすことのできる「人間力」の形成が必要だと考えます。
そのためには、造形美術教育がもつ、こころと体を存分に働かせた創造的で主体的な学習過程の中にこそ、そうした人間的な資質・能力を育む重要な機会と場があると考えています。いまこそ、造形美術教育に関わるすべての者が総力をあげて、子どもたちのために、そして、この先の学校教育のために人間形成としての造形美術教育の拡充を図る時だと考えます。
また、造形美術教育をさらに発展させるためには、図画工作科・美術科の授業時間数の保障と教科の専門性に長けた専任教諭の配置と育成が必要不可欠と考え、これらの確保と充実を強く要請します。

以上の趣旨から、私たちは大会テーマに基づいた研究を、子どもの豊かな育ちにつなげ、これからの造形美術教育を発展させることを目的とし、全力をあげて取り組むことを、ここに宣言します。

平成19年11月8日
第47回関東甲信越静地区造形教育研究大会　東京大会
第46回東京都図画工作研究大会　中央大会
第25回東京都中学校美術教育研究大会 第４ブロック大会

第４７回　関東甲信越静地区造形教育研究大会　東京大会
「人間形成としての造形美術教育　－新しい教育課程にどう対応するのか－」

■　指導講評
国立教育政策研究所　教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　　奥村高明先生

今日はよろしくお願いします。「人間形成としての造形美術教育　－新しい教育課程にどう対応するのか－」ということで、これから教育課程がどのように改訂になるのかということをお話したいと思います。

はじめに、非常に画期的だと思ったのが、「人間形成」という宣言をしたことです。これは図工や美術からではなく、まず「人間」というところから考えようということだと思います。「つくり出す喜びや意欲」「児童の感覚や行為を大切にする」「領域ではなく能力」「実生活、実社会を視野に入れる」ことが大切だという提案をしていることも、非常に的を射ている研究だと感じました。その上で、教育の方向や指導の改善などについてお話したいと思います。

まず、はじめに、私がいつも見せるもの（ダルメシアンの図）です。人は、一度「わかった」らなかなか戻れないものです。そして、いつも「わかった」ことから見てしまうのです。私たちは子どもだったのに、大人になって「わかって」しまったことが多いのです。美術とか図工といった「わかった」ことから見るのではなく、「人間」から考えようとした点で、すばらしい提案だと思います。それは、つまり「人はそのままは見ていない」ということです。例えばそれを「そのまんま効果」と呼んだとします。幼児教育では、音楽や図工は「表現」と言いますが、音楽と違って、我々が携わっている教科は、小学校では「図画工作」、中学校では「美術」と「技術」と呼びます。そして高校では「美術」とか「工芸」と呼ばれます。つまり、「美術」＝「図画工作」ではなく、図工の立場から美術をみるのはおかしいし、美術の立場から図工を語るのもおかしいのです。今回の教育改革でも、この点は変わりません。

第２に、「教育の方向」という点です。先日審議のまとめがでましたが、世間では「ゆとり教育」というものが、新しい学力観以来続いている「生きる力」という意味で使われていたり、単に「授業時数」という意味であったりします。「生きる力」ということからであれば、「ゆとり教育」は変わらないし、「授業時数」という点から考えるのであれば変わります。このような「ゆとり教育」という言葉は、むしろ混乱を生むと考えられます。そこで、今回、学校教育法３０条２項で、「学力」とは「①基礎的な知識・技能を習得すること」、「②これを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等」、「③学習意欲」であるとしました。つまり、「生きる力」を法律として条文化したということです。この①②③が教科の上に立つ、ということです。この力を身につける

ために各教科がある、と法律で明文化することになったのです。つまり、今回の改訂を一言で言うと、「生きる力」は変わらないが、その手立てである学習指導要領などが変わるということです。１１月７日の審議のまとめでは、図画工作や美術などは、現在の授業時数を前提に、これまで以上の充実を図ることとしています。

その中のポイントの一つとして、「習得・活用・探究」ということが言われています。「全国学力調査」も含めて説明すると、これまでは、「習得」しました、次に「探究（活用）」させましょう、という感じでしたが、まず教科の中できちんと「習得」したり、それをもとにいろいろな力を「活用」する力をつける。それを総合的な学習の時間などで「探究」的に活用していったり、あるいは図工や美術のように、そもそも「探究」的な性格を持つ教科の中でしっかりと学んでいこうというのが、大きなポイントです。そのためには、子どもたちがどんな力を使ってどんな活動をしているのかを掴まないと、学習指導や改善はできないでしょう。その点から考えると、先ほどの発表の中で、子どものどんな力が発揮されているのかをビデオなどでとらえようとしていたのは、非常によいと思います。

全国学力・学習状況調査は、【A「知識」に関する問題】と【B「活用」に関する問題】に分かれています。【A】とは、漢字の書き取りなどではなく、（「ごんぎつね」を例に出し）「なぜ？」「どこからそう読み取れた？」といった、具体的に子どもを活用するところに重点が置かれています。では【B】はというと、今までは、与えられた条件の中から考える問題ばかりだったのを、多様な条件の中から必要な条件を見つける力を問う問題へと変わり、その正答率は低いものでした。そのような力がまだ育っていないということですね。大切なのは、序列化して競争することではありません。授業の中で子どもたち一人ひとりにどう返すかということを第一に。そのための学力調査であるのです。

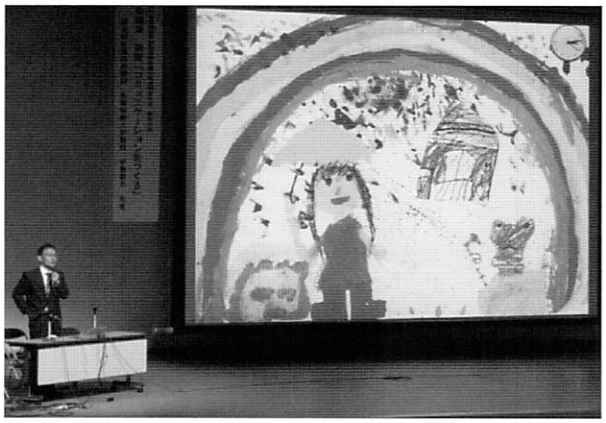
さて、次に図画工作・美術についてです。これは年度内改訂を目指していますが、主な意見としては、「感性や喜びを大切にしてほしい」「資質や能力を整理してほしい」「伝統と文化を大切にしてほしい」というものがあります。それを受けた結果、理念は変わらないが、手立てを改善していくということになりました。領域等が大きく変わるのではなく、これまで先生方が目指してきた「つくる喜び」などを大事にしていきたいということです。

例えば「造形遊び」「絵や立体をつくる」「鑑賞」において、「形や色をとらえる」「イメージをもつ」といった共通事項がありますが、中学校の美術においても「絵や彫刻など」「デザイン・工芸など」「鑑賞」の中に共通事項があります。ここからさらに小・中の共通事項をもつということで連携を図るというのが一点、つまり学習指導要領の構造として、「目標」と「内容」のうちの「内容」が「A表現」「B鑑賞」だけだったものに、「共通事項」が加わるということです。「B鑑賞」においては、理念、すなわち「表現と鑑賞は一体的に」「必要があれば時間をとって」という点は変わらず、その内容の充実を図るということになります。

そして「A表現」については、小学校から説明すると、「造形遊び」「絵・立体・工作」というのがありますが、この「表現」には、表したいこと、例えば○○○を描きましょう、という領域と、材料をもとに人やもの、ことなどに働きかける領域との二つの側面があります。これは平成元年の考え方です。解説書に書いてあることですね。これをもう少しわかりやすくするということ、つまり今回の改訂では、「造形遊び」「絵・立体・工作」とう領域ではなく「材料をもとにした造形遊び」「表したいことを絵・立体・工作で表現する」のように「発想・構想」や「技能」を整理して示しましょうということ、つまり、資質や能力から考えようとしています。 この「発想・構想」は中学校に

なると「感じて、考えながら思いのままに表す」という面と「目的・技能」を考えてつくるという面とになります。つまり、中学校では「感じ、考えたことを絵・彫刻などに表す」「目的・技能をデザイン・工芸などに表す」「技能」という領域になると審議のまとめで述べられています。そして、全体として、小学校と中学校の共通事項を大切にするということを考えて改訂を進めています。

ところで、ピカソは自分の感覚に忠実に描いたといわれています。（婦人像を見せながら）これは、いろいろな方向から見たものをひとつにしているんですよね。決して好き勝手に動かしているのではないということです。つまり、福笑いのようなものではないのです。「今日はピカソになろう。目や鼻を好きなところに描いていいですよ」というのはおかしいということですね。作家のスタイルではなく、作家のやろうとしていたこと、考えたことから考えるというのが、美術から学ぶうえでの大きなポイントです。



「子どもといろいろな関係」という面で見ていくと、色々と具体的なことがわかってきます。その一つが子どもの動きでしょう。例えば、筆の動きはその子自身の動きになるのです。また、これは音楽の授業の例なのですが、はじめは遊んでいた子どもが、周りの子どもとのかかわりの中で、自然と３拍子をとりながら演奏することができていました。一方で、教師が示しためあてが「強弱を考えながら」になっていたため、３拍子が２拍子になってしまっていた子がいました。もし、めあてが「特徴をとらえて」だったら、そうはならなかったと思われます。私たちの「めあて」の出し方が、子どもの学習や評価に影響することを忘れてはならないでしょう。

子どもの言葉というのも、すごく大事にしたいことの一つです。これは作品とか感想とかつぶやきですね。作品の評価は何の教育の成果にもつながりませんが、作品からの評価はつながりを持つと思います。多くの作品展は、作品が貼られただけだと思うのですが、そこで先生なり子どもたちなりがギャラリートークをしているでしょうか。そういうことをすることで保護者とか社会に働きかけていくことができるのです。ギャラリートークを保護者とやってみてください。保護者が子どもの絵をしっかりとらえることができます。

次に、指導の改善という点から少しお話したいと思います。例えば、私たちの前提を問い直すというのはとても大切だと思います。「できない、描けない」は誰が決めたのでしょうか？　子どもがそう考えてしまう前提となっていることをこそ、問い直すべきです。よく、今の子は描けないという声が聞かれますが、例として棒人間を描かせてみると、２年生でもきちんと対象を「芯」を捉えて描けている。調べていくと、幼児ぐらいから芯をとらえるということはできていて、それは大学生ぐらいまで変わらないそうです。

子どもの姿から題材をつくるということもできると思います。美術館で子どもの様子を見ていると、低学年が同じポーズをしてみて作品を理解したり、１年生を連れていった４年生が、気がついたら１年生にギャラリートークをしていたりするのです。子どもはできるのです。鑑賞は好きだが、それをみんなの前で話すのは苦手という子がよくいますが、子どもが話したくなるような環境が用

意されているかどうかを見直すべきでしょう。ぜひ、子どもの姿や学びから少しずつ指導を改善していただけたらと思います。廊下に掲示してあった絵から、そのポーズを真似して楽しむようなコーナーを作っている学校もあります。

最後に、最近知った言葉で終わりにしたいと思います。
「とんぼさくら」
先生方、これが何かわかりますか？ 「街のお勧めスポット」を外国人などに案内するとしたら？という問いかけに、小学５年生の男の子が、「とんぼさくら」と答えたのです。夕陽の中を飛ぶとんぼの群れが金色の桜のように見える風景のことだそうです。
おそらく、私たちが思っている以上に子どもたちはずっと深く、伸び伸びと感じて表現しているはずです。それを見つけて授業や指導などを改善していくということが、今回の「理念は変わらず、手立てが変わる」こと、学習指導要領もできるだけわかりやすくしていこうということの背景にありますが、先生方も今日の研究等をもとに工夫していただけたらと思います。

ある伝統工芸に携わるおばあさんが、図工・美術で本当に大事にしなければならないことをおっしゃっていたので、ご紹介します。

母ちゃんは私が見よう見まねで何か作ると、
「よくできたなぁ」って、必ずほめてくれる人だった。
どんなに下手でも、、、、、、絶対に怒らないでほめてくれた。
だから、私、喜んで、いろんなもの作ったの。
今、こんなに幸せなのは、母ちゃんのおかげだわね、だから感謝しているのよ。

あるテレビコマーシャルからです。

命は大切だ。
命を大切に。
そんなこと
何千何万回言われるより
「あなたが大切だ」
誰かがそう言ってくれたら
それだけで生きていける。

あのおばあさんは、ずっとそれをお母さんから言われて育ってきたのです。これが、私たちが大切にしなければいけないこと、教科の本質だと思います。ありがとうございました。

第４６回東京都図画工作研究大会　中央大会
「みて、みて！こんなのつくったよ
～子どもの育ちを大切にする図工をもとめて～」

■　指導講評　　東京都教育庁　指導部義務教育特別支援教育指導課
指導主事　岩﨑　治彦

本日の大会、各分科会のそれぞれの授業で、子どもたちは、とっても素敵な活動を繰り広げていました。子どもたちが生き生きと活動し、持てる素晴らしい力を思いっきり発揮できるよう、「子ども」を見つめ「子ども」から学びながら、各分科会で研究を重ね、提案してくださった授業でした。

ところで、今という時代、子どもや学校を取り巻く状況に危機感を一番感じているのは、学校の先生方ではないでしょうか。

世界経済の構図の大きな変化、食料自給率低下、地球温暖化、少子高齢化、労働人口の減少、情報化の急速な進展など、様々な“危機感”を背景にして、多くの現代的課題が学校教育に突きつけられています。

また、「文化芸術の振興に関する基本的な方針について」（答申）の「大地からの手紙」、「戦後、ものをつくり、ものを売って高度経済成長を果たした日本は、この半世紀を爆走しながら、富の代わりに何を手放し、何を見失ってきたのでしょう。…おなかをすかせた心に尋ねてみましょう。“欲しいものは何ですか？”“それは、この目に見えるものですか？”…」のメッセージのように、プリミティブでヒューマニスティックな視点から突きつけられている課題もあります。

現代の行き詰った諸状況については、すでに２０世紀初頭にマックス・ウェーバーが、「（機械的生産を基盤とした経済中心の競争社会という、強力な秩序界の発展・拡大の）将来、この鉄の檻の中に住むものは誰なのか、……　こうした文化発展の最後に現われる「末人たち」……、“精神なき専門人”“心情なき享楽人”、この無なるものは、人間性のかつて達したことのない段階にまですでに登りつめた、と自惚れるであろう。」と述べています。

さて私たちにとって、何と言っても重要な点は、未来の日本、世界の新たな地平を開く主役が、私たちの目の前の、この素晴らしい子どもたちであるということです。

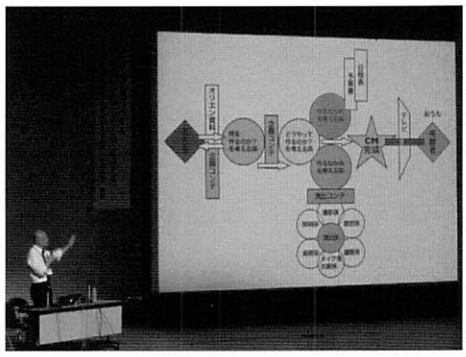
図画工作科教育は学校教育において、子どもたちの創造性の解放・伸長にかかわる、極めて重要な使命を有しています。

図画工作科教育は、人が身の回りの環境と豊かに交流しながら、環境と自身をよりよく更新し続け、新しい意味や価値を創造し、心豊かな生活や人生をつくりあげていくために重要な、基礎形成を為すものです。図画工作科教育のこの素晴らしさを、保護者、地域の方々にアピールするためにも、今回の研究大会を契機として、もっと多くの人々に訴えていってください。

そして図画工作科教育の更なる発展、先生方のご活躍を心からお祈りいたしております。

第４７回　関東甲信越静地区造形教育研究大会　東京大会
記念講演　演題「コミュニケーションをつくる」 テレビコマーシャルの演出をとおして

■　講　師　　文部科学省中央教育審議会「芸術専門部会」委員（２００６）
（株）東北新社専務取締役　多摩美術大学教授　中島信也先生



私は、ＣＭの演出を本業にしています。小学校のときから図工が好きだったのですが、それが今の「つくる」という仕事につながっているように思います。今回の演題である「コミュニケーションをつくる」というのは、自分にとっての目標でもあります。まずは、自己紹介を兼ねて、ＣＭをつくり続けてきた２５年間の断片を見ていただきたいと思います。

＜放送されたＣＭの紹介＞

ＣＭのディレクションとは、「係」の多い仕事です。ＣＭは広告主が各家庭に「何か」を届けるための媒体であるわけですが、これは、広告主、ＣＭプランナー（何を作るのかを考える係）、プロデューサー（作る流れを考える係）、ディレクター（作るなかみを考える係）などの、たくさんの「係」がかかわって完成します。自分の部署であるディレクション部門にも、自分のような演出係のほかに、撮影、照明、美術、メイク、衣装、編集、録音といった様々な「係」が存在しています。自分のようなディレクターは、彼らに一目瞭然でわかる設計図をたてる係であり、現場の演出係でもあるのです。

そもそも、広告というものには必ず制作する上での目的があります。「何かを買ってもらう」、「どこかに来てもらう」、「好きになってもらう、選んでもらうきっかけをつくる（ブランディング）」などの目的です。そのためにたくさんの係の人が色々な仕事をしていますが、その中でも演出家・ディレクターという自分の仕事は、ＣＭを完成させて視聴者に届けることだと言えます。言い方を変えると、「ＣＭを視聴者に届ける」という部分で携わることしかできないのです。

例えば、お茶のテレビコマーシャルをつくりましたが、それもその全てではなく、ＣＭのコンセプトを具体的に「表現」する部分において携わったわけです。そして、ＣＭの「表現」部分の演出係である自分としては、「何かを買ってもらう」、「どこかに来てもらう」、「好きになってもらう」などということ以前に、「きれい！」、「かっこいい！」、「感動！」、「かわいい！」、「笑っちゃう！」、「楽しくなっちゃう！」などのように、自分の担当したＣＭを見た人の「心」を少しでも動かしたいと思っているのです。心が動くと、聞く耳を持つ土壌ができる。ハードディスクレコーダーの開発でＣＭがとばされがちになっていますが、とばされてしまったら言いたいことがどれだけあっても伝わらない。だから、そんな中でも少しでも気にしてもらいたい、少しでも心を動かしてもらえればと願っています。たくさんの「係」の人の力を集め、色々な工夫をこらしてＣＭをつくった結果、ＣＭを見た人の心が少しでも動いたなら、「ＣＭを視聴者に届ける」という自分の仕事は、「コミュニケーション」という名前になるのです。「何かを買ってもらう」、「どこかに来てもらう」、「好きになってもらう」というような大それたことを目標にするのではなく、ＣＭをつくることによって、「伝える側」

と「受け取る側」のあいだに「コミュニケーションをつくる」こと、「広告主」と「視聴者」のあいだに「コミュニケーションをつくる」こと、メッセージの送り手と受け手のあいだに「コミュニケーションをつくる」ことが自分の目標としていることなのです。

＜ＣＭ紹介＞

そして、この「コミュニケーションをつくる」ための「技術」を高める工夫が、ＣＭの世界だけではなく、今の世の中でとても大事なことなのではないかと考えています。というのは、もう少しうまくコミュニケーションがとれてさえいれば起こらずにすんだと思えるような悲しい出来事があまりにも多いからです。この「ちょっと考えればわかる」ということを考えないから、こういうことが起きてしまう。「コミュニケーションをつくる」ための「技術」を、何もこの仕事に携わる人間だけではなく、人類がもっともっと高めていかなくてはならない時代がきているのでしょう。

「コミュニケーションをつくる」ための技術をもっと高めたい。そのために必要なのは、「係」に求められる技術を磨き、「創造力」を高めること。これは当然必要とされる努力ですが、私が大切だと感じているのは、「想像力」の方です。これは夢想や空想とは違い、「こういうふうに言うと、相手はどう思うのかな？」、「この絵を見せると相手はどう感じるのかな？」、「こんなことをしたら相手は傷つくのではないかな？」などのように、自分の行いに対しての相手の気持ちをあれこれと考える「心」のはたらきのことです。ラブレターを出す時のように、クリエイティブの前提となるところには「想像力」を、それも、「パワー・オブ・イマジネーション（想像力）」というよりも『想像心』がものすごく大事になるのです。新しい技術や表現技法を手に入れると、嬉しくてそれを使うことばかりに目がいってしまうものですが、何かを伝えるための力として広告をつくる時、だれかに何かを伝えたいという気持ちがあった時に、技術や表現力だけでは足りないものが必要とされます。それが『想像心』なのです。

そして、世の中で言われているコミュニケーションの欠如というのも、お互いの『想像心』の欠如であるのではないのでしょうか？「コミュニケーションをつくる」ために、今、自分自身を含めて『想像心』を磨く努力が一番大切だと感じています。

＜ＣＭ紹介＞

『想像心』。それは、わかりやすく言うと、「思いやり」につきるのではないかと思います。これは、大人になる前に持てるようになりたい「心」です。学校という場で、子どもたちの『想像心』が大切に扱われることを心から期待しています。小さいときに「思いやりがない」としかられたことがありますが、その意味を大人になったときに理解できるということが大事だと思うのです。ＣＭをつくるというコミュニケーションの世界に来て、思いやりが足りないから伝わらなかったのだと思うことがたくさんあったので、これはやはり、何とか子どもたちに伝えていきたい「心」だと思っていますし、いいコミュニケーションがもっともっととれていって、悲しいことが少なくなっていくような社会を、先生方ともぜひとも一緒につくっていければと思っています。ありがとうございました。

（注）尚、講演は付録のＤＶＤに収録されています。

第４６回東京都図画工作研究大会　中央大会
がんばれ！図工の時間！！フォーラム 共催シンポジウム

がんばれ！図工の時間!!　「はみだす　ときめき」

■ シンポジスト　原島　博氏（東京大学教授）　藤幡 正樹氏（東京芸術大学教授）
苅宿 俊文氏（大東文化大学助教授）　土佐 信道氏（明和電機代表取締役社長）
辻　政博氏（文京区立誠之小学校 都図研会長）
■ コーディネーター　横内 克之（新宿区立花園小学校）

横内：　今日は５人のシンポジストをお迎えして進めていきたいと思います。講師の先生には事前にはみだしや、ときめき、ドキドキ、喜びについてアンケートを取り、ＡＢＣとそれぞれ意味づけをしていただきました。お手元のリーフレットに各先生の写真付のプロフィールも載っておりますので後ほどご覧ください。

では、このテーマを語るにはあまりに短い時間ではありますが始めさせていただきたいと思います。

原島：「はみだすときめき」…というテーマについて考えるとき、今日のシンポジスト５人がどういった出会いがあったかをまず、ご説明したいと思います。

１番古くから知っているのは土佐さんです。六本木のライブハウスで演奏している姿を見て近づきたいと思い、近づけた方です（笑）。

２番目の苅宿さんとは１年前の夏、納涼会でおもしろそうな人だなぁと。その時はここでお会いすることになるとは思ってもいませんでした。

３番目は藤幡さんで、「がんばれ図工の時間」都図研中央大会を行うにあたって手伝っていただきたいと、是非芸大の先生の力が必要だとお声がけをしたのがきっかけです。

そして最後に、都図研中央大会に向けてのかかわりの中で辻先生とお会いしました。

藤幡：　私は東京芸大大学院映像研究科の学生たちには危機感を感じています。どうも自発的でなく、教えられる学問に終始している感が否めません。

原島：　そうですね。自発的な学びが勉強であって、「次何をしたらいいのか？」と問いかけてみたり、「これはどうなっているのだろう？」と自分の中に問題意識をもつことが大切なのだと思います。

苅宿：　私は図工の専門家として発言はできませんが、図工の時間の子供たちには大変熱意を感じます。そしてこの図工の時間を通して様々な問題が浮き彫りとなり、解決されていきます。これからも図工という教科を外部から広報担当として応援していきたいと思います。

今現在３２３５名の「図工の時間を増やしてほしい」という署名が集まっています。もっと多くの方に呼びかけていきたいと思っています。

土佐：　こんにちは。自己紹介を、ということですが、私がなぜ今この場にいるのかと不思議な感じがします。先ほどお話がありました、原島さんとのベルファーレ（ディスコ）での出会いが今日に至っているのだと認識しています。

私の今日の出で立ちを見て、「この人はなぜ電機屋の格好をしているのか？」と感じている人が多いと思います。なぜ電機屋なのか？について話をしたいと思います。

私は実は、幼稚園の頃から大学までの間ずっと真面目に芸術家になろうと思っていました。ただ、どうやら芸術の世界と自分との間にズレが生じてしまったんです。魚というテーマを作っていたところ、どうやって見せようということになり、芸術家としてより父親のスタイルをもらって、電機屋のスタイルで発表したいと考えるようになっていきました。私は末っ

子で、家族の中でいかにウケるか？ということで自分の存在価値を見い出してきました。表現する時ははみ出さず、電機屋ならいいでしょう、ということで電機屋という場でおもいっきりはみ出す…ということで今日に至っています。

１３年経った今も世界各国からオファーがあります。多分作品の中に何か日本的な部分もあって呼ばれるのだと思います。

辻　：　私ははみだすということに憧れはありますが、本当にはみだしては生きていけません。はみだしきれず教員をしています（笑）。秩序を重んじるのが聖職者としての教員で、私はそういった意味での教員にはどうしてもなりたくありませんでした。

ただ、図工の教員というのはそうでない（?）教員もいるのだということを知りました。目の前の子どもたちが大人の秩序をはみだしているんです。こういった中だからこそ私は２７年間教員を続けてこられたのだと思っています。

横内：　はみだす、というお言葉が先ほどから出てきていますが、子どもたちを締め付けず、このはみだすことで新しい世界につなげていくことが大切なのではないか、と思います。この「はみだす」という言葉の位置づけについて皆さんにこれから語っていただきたいと思います。

原島：　やはり、はみだす中にも真面目な部分を含んだところに人は納得するのではないかと思います。

１２年前、コミュニケーション工学・顔学を専門とするところから、日本顔学会を立ち上げました。その研究でわかったことは、人は社会から求められる顔になってしまっていて職業の枠に当てはめ顔を作り上げてしまっている、とういうことでした。そういった中で今までの自分を変えることで何が変わるかということを企画しました。東大の学部長にも選ばれながら『女装をする』ということが許されるかどうかということで、実際その件が新聞にも紹介されてしまいましたが、東大の総長は「いいんじゃないか」と容認してくれました。周囲の反応も同様で、「けしからん」と言えば「古い」と言われるという考えから、理解あることを示そうという雰囲気に満ちていたように思います。こうなってしまうと、はみだすことは当たり前となってしまうわけです。

横内：　芸大で女装というのは特別なことではありませんよね？　藤幡さん、いかがですか？

藤幡：　いえ、芸大は意外と普通なんですよ。えっ？　何だか暴露大会的な流れになっていませんか？

苅宿：　はみ出すことの活力とでも言いましょうか…原島さんがおっしゃったことですが、規範があれば、はみだしていたとしても「いいんじゃないか」と思われるのではないかと思います。今日の先生方の研究発表は新しいものを生み出すということで、この「はみだす」ということがポイントでもあったと思います。先ほどの顔学会のお話にもありましたが、小学校の先生の顔と、図工の先生の顔は明らかに違います。双方はもっと交流を密にしていったほうがいいように思います。

子どもたちははみだしています。先生たちは毎日家でも明日の授業等の準備に追われ、テレビを見る暇もない為、子どもの話とズレてきます。

図工の価値は、いい意味ではみだしているところにあります。はみだし具合のギリギリの部分を感じてみたいという欲求に応えられる教科であると思います。

私は毎年モンゴルに行っていますが、現地の小学校はかなりはみだしています。学校は行けるときに行き、勉強もやれるときにやる、という風に楽しんで学校生活を送っています。でも、日本の子どもたちと比べはみだしているこのモンゴルの子どもたちの方が生き生きとしているように思います。図工の先生がぜひこのはみでた部分を見守っていって欲しいです。

藤幡： 図工の時間は、いじめなどのマイナス面を解消することのできる時間だと思います。作家になった多くの人は淋しさが原動力となって作品を作っていきます。人間はいつかは死にます。この恐怖と淋しさを埋めるのがソーシャルコミュニケーションです。その為の道具として表現することが生まれました。「先生、見て見て」にはこの淋しさも入っているのではないでしょうか。

学校現場は動き回る子どもたちとじかに接するドキドキ・ハラハラ感のあるすごい仕事だと思います。その仕事に携わっている先生方の前でこのように話すことは大変恐れ多いことです。

横内： 先程から『はみだす、はみだす』という言葉が多く出てきますが、このはみだすことを自分で自覚するのは恥ずかしい気持ちがします。はみだすことにはセンスも大事だと思うのです。

辻　： ここの学校はお墓の側に学校があります。お墓の左側が塀で覆われていて“死”を排除しているかのようです。子どもたちはこの衛生的な空間で学校生活を送っていますが、汚れたもの（死が汚れたもの…というのは語弊がありますが）、美しいものが共に共存してこそ生きることの実感があると思うのです。正しいものばかりでなく、悪も踏みつつ、その悪を抽出して出していくことができる教科が図工であると思うんです。

図工の授業の中でマンガと戦争に関するものはダメだとよく言われていますが、これはやり方次第だと思うんです。以前赴任した学校で必ず作品にドラえもんを描く子どもがいました。様子を見ているとどこかおかしいんです。担任もおかしいと気づいていてよくよく聞いていくと親からの虐待があったらしいんです。ドラえもんの世界を描くことで淋しさを消化していたんだろうと思います。その消化がだんだんうまくいくとドラえもんが描かれている面積は作品の中でだんだん小さくなっていくんです。卒業する頃には建物の影にほんの小さく描かれていてほとんどわからないくらいになっていました。

このように、前向きさの強要をするのではなく、形でなくて事実の持つ意味をもう少し考えていったらいいのではないかと思うんです。

土佐： 一つ思うのは、『はみだす』ことは必ずしも常識から外れるということではなくて、ちょっと『ズレてる』おもしろさなのではないかとうことです。今回の大会での校内の展示やこの体育館内の展示・装飾などをみても「ドハーッ」とかなり表現がぶっ飛んでいます。でも、これでいいのか？というところなんです。もっと「ビシーッ」としたところがあってもいいのではないかと感じます。

実は図工の先生のおっしゃっている言葉の意味がよくわからないことが多いんです。言葉で表現すると図工の楽しさが伝わってこないんです。このあたりが図工が世の中に理解してもらえない理由なのではないか？と思います。

原島： この会場見渡しても感じることは『はみだす』ことが方途になっていて賞に入るような作品というのも皆同じ感覚の作品になってしまっているということです。小さいとき私が描いた、そのものを忠実に描いた作品などは今は許されない作品として評価されてしまうと思います。ゴッホやセザンヌが描いた絵のような『当たり前の絵』をもっと認めて欲しいんです。

横内： シビアなところに話がいっていますが、基礎・基本をふまえた学力という言葉はいったい何を指しているのでしょうか？　今進んでいる方向は今までの教育を否定的にとらえていくという流れが強くなってきています。こういった学力をつけていくことでどういった子どもが生まれているのでしょうか？

苅宿： ここで一つ考えるのは、図工を通して先生方はなにをするのかとういうところです。一人の子どもが育っていくのに孤独の中でも集団の中でも学べることがあります。図工の時間は作

品を通して人と分かち合うところが素晴らしいところです。そのように感じられるということが上手く外に伝わっていないと思うんです。上手い、下手ではなく、図工を通してどうしよう…や、もっとこうしたい等一歩先に目を向けていくことができたらいいのではないでしょうか。

横内： では締めくくりに、どんどん若い先生方が教育界に入ってきているので、その先生方にこれからの教育界が若返りを図っていくためのメッセージを送ってあげてください。よろしくお願いします。

土佐： 日本の未来は大丈夫ですよ。世界中どこに行っても“明和電機は“ウケる”んです。日本にあこがれを抱いている人も少なくありません。日本文化は細やかで、そしてかわいいものを作る“心”があります。ものには魂があってどういう気持ちで接し、作っていくか？が重要です。アメリカではキティちゃんがウケています。日本人は今、閉塞感の中にいます。美術の先生はマンガはダメ、マンガは芸術じゃない！とおっしゃる方が多いですが外からは同じです。マンガの中に見られるデザイン力はウケているんです。若い先生にはやりたいことをまずやってほしいです。

辻　： 図工の先生、日本の先生は素晴らしいと言いたいです。世界の中でも数字的にも成果は上がってきていますし、朝７時から夜９時までのハードな勤務に耐えているんです。その中でも図工の先生は汚くてツライ仕事をこなされています。日本のような図工教育を行っている国はどこにもないんです。今、図工の先生がやられていることを、引き継がれたことを、そのまま継続していってほしいと思います。そして先生方には自信と自負を持ってもらいたいと思います。

苅宿： 辻先生が仰っているとおりで、若い先生のもっている感性を信じて自信を持って欲しいと思います。答えは皆さんの中にあると思います。

藤幡： 図工の時間や作文の時間は何かを作る時間です。日々の生活の中で、新しいものを見つけ出しぜひ、『はみだし』てもらいたい。大事なのは物事を絶対視しないことです。科学は自分を客観視するもので、自分を実体化するのは文化、芸術であると思います。知識の広さによってやりがいも生まれます。現場にいらっしゃる先生方にはぜひがんばっていただきたい、そして私も一緒にやっていきたいと思います。

原島： 個人的な話ですが、“夢”はあと１年半で自由の身になることです。１８歳で大学に入ってから今まで、ずっと本校にいます。私は図工が好きで図工をおもしろがっている自分がいます。先程もお話しましたが、自分がいろいろ変身することで自分自身今まで見えなかったものも見えてきて、周囲の目も変わってきました。女装し、別の自分になることで女性の気持ちも見えてきました。子どもの頃から演劇も好きだったんです。自由の身になってからは、『がんばれ！図工の時間、がんばれ演劇の時間』をやっていきたい！と思っています。

横内： 福岡伸一さんによると生物と無生物の差は生命の誤差率だそうです。そして、人間の体は流動的なもので、全ての細胞は日々入れ替わり、情報の伝達には誤差が生じていきます。人間の場合その誤差は小さなものだということです。

まず、一歩自分でほんのちょっとのはみだしをしてください。そこから何かが見えてくると思います。何だか行き先のない話でどこへ向かっていけばいいのかわからないシンポジウムになってしまったところではありますが、今日のシンポジウムはここで終わりにさせていただきたいと思います。

第25回東京都中学校美術教育研究大会 第4ブロック大会
記念講演　演題「パブロからピカソへ－天才少年の自立への闘い－」

■ 講　師　　大髙保二郎先生（早稲田大学教授・バロック美術およびスペイン美術史）

はじめに

この研究大会の基本テーマ「人間形成としての造形美術教育」についてピカソという画家の若い頃の話が何かの参考になればうれしい。感性を磨くことは若い人たちにとって重要である。国語・数学・理科などの重要性が叫ばれているが、私は、美術に救われた経験を持つ。描くこと、観ることは人間形成に大きな役割を果たす。

ピカソの時代

ピカソという天才は、２０世紀を語る上で欠かせない存在である。ピカソの作品には、２０世紀という時代が込められている。ピカソは、１９世紀から２０世紀にかけての芸術の転換期（１９００年）にちょうど２０歳頃の青年であった。彼は、フランス中心の芸術から現代芸術運動に変化する「分水嶺」に立ち会ったことになる。

作品

ピカソはさまざまなジャンルの作品を手がけたが、そのテーマを突き詰めると、「死と愛」の問題に集約される。「アビニョンの娘たち」の後にキュービックな作品が現れるが、これは、マラガの大聖堂に観られる非対称の建築物、スペイン独特の料理「パエリャ」―素材が生のまま生きている料理―などにも共通点があるようだ。調和・洗練とは反対のピカソらしい異種混合は、ピカソ的・スペイン的なものである。

アルタミラの洞窟壁画

スペインの「アルタミラの洞窟壁画」は、先史時代の絵画として最古のものである。ピカソはこの壁画を見て、「私はこのように描くことはできない」と言ったとされる。この壁画は、絵画の原点と言われる。前後左右もなく自由に描かれ、重ね描きも多い。奔放な感覚、本能的な衝動によって描かれたものである。

天才性

ピカソの天才性については、ピカソなりのフィクションがある。例えば、９歳頃の絵は現存しているが、それ以前の絵は残っていない。これは不思議である。彼はそれ以前にも多くの絵を描いたはずであるのに。彼は父親の「鳩」の絵に加筆した。帰宅した父は、その絵を見て、息子の才能に驚き、自分は絵筆を折ったという話が伝わる。この天才神話は、ヴェロッキオとレオナルドの逸話を真似た疑いがある。ピカソは、自らをこうして伝説化した。しかし、彼はその必要がないほどの天才性を発揮している。

父との確執

ピカソの人間形成に大きな影響を与えたのは、父親との確執であった。ルイスというのが父親の姓である。ピカソは母方の姓である。父を描くといつも沈鬱な絵に、母を描くと‘ふくよかな’絵になる。職業画家として挫折した父。ピカソは「ＰＩＣＡＳＳＯという名にはダブルＳがある。」と言ったという。プーサン、マチス、ルソーみなダブルＳの姓を持つ。父親の姓ルイスを避けたピカソには、父親（の失敗）を繰り返したくないという深層心理が働いていたような気がする。ベラスケスもムリーリョも母方の姓を名乗っている。迷信深いピカソがピカソという姓を選んだのには、そうした思いもあったのかも知れない。

青の時代

孤独・憂愁・貧しさは青の時代の特徴である。青の時代の総決算として「人生（ラ・ビィ）」という作品が誕生した。ガウディやそのパトロンで実業家であったグエルの時代と、ピカソの青の時代が重なる。これはブルジョアジーと庶民の対立の時代でもあった。ピカソの親友はサグラダファミリアについて友人に次のように書いている。「魂を救済するためには、サグラダファミリアを地獄に送らなければならない」と。ガウディの建造物は、正義心に満ちた青春時代を送っていた若者にとって、何の役にも立っていないと写ったのだろう。

レゾン・デートル

１９０４年、スペインを離れる。精神的・経済的自立を目指した。ピカソの独立宣言とも言える作品は、「アビニヨンの娘たち」である。これはピカソ２５歳の作品である。ヨーロッパ中心主義的な文明観・価値観に対する異議申し立てという意味合いがあった。「一枚の絵は破壊の集積である」「私は一枚の絵を描く、そして破壊する。しかし、決して何ものも失ってはいない」破壊と再創造、めまぐるしいピカソの変貌、これは決して生やさしいものではない。多くの画家たちは、一つの様式を作り上げるとこれに安住する。しかし、ピカソは果敢にもレゾン・デートル（存在価値）を示し続けた。

ちぎり絵
クロッキー
紙ちぎる・張る
マッチクロッキー
名札に記入

公開授業

分科会テーマ 「つくりだす喜び」
公開授業　　２年　１組

ふわ・くる・ひらり

■ 授業者　竹内 とも子 中央区立明正小学校
栃山 彰子　 中央区立阪本小学校
■ 提案者　三浦 百合子 中央区立泰明小学校

1　題材のねらい

・材料の柔らかさや軽さなどを、全身の感覚を働かせて感じ取る。
・柔らかく軽い材料と、むすんだりつないだりする材料を生かして、思いついたことを楽しく表す。

2　研究討議の内容

（※授業について討議は無かったため授業結果を記載）

①題材について

・　材料の選択や材料との出会い方によって、子ども達の表現しようという意欲や発想の広がりに違いが出るのではないか、という考えのもとに本題材が設定されていた。本題材での柔らかな材料は、子ども達の全身の感覚をはたらかせて材料の特徴を味わう活動を誘発し、意欲の向上や発想の広がりを促すという点で有効であった。
・　多様な鑑賞の機会を、環境設定や学習活動の展開に意図的・計画的に埋め込むことによって、よりよい表現にしようとする造形活動が促された。

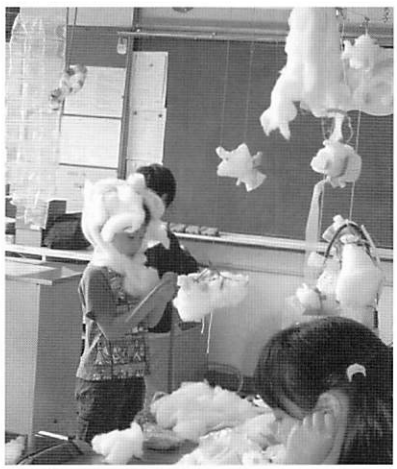
②つくりだす喜びについて

・　つくりだす喜びは、表現したいことが思い付き、その思いを自分自身の力で実現できた時に感じられるものと考えられる。
・　子ども達は、人やものや環境とかかわり合いながらつくりだすと同時に、それらとの関係もつくり直し、新たな表現の可能性を生みだすことに喜びを感じていると推察される。

3　授業者の言葉

①　事前・材料集めについて

子ども達との顔合わせでは、すぐに「図工好き！」「わたしも！」と声がかかり、はじめから楽しいことをしてくれる人という目でみつめられた。もともとつくりだす喜びを感じながら普段の図工の時間を過ごしている子ども達であると感じた。ここでは、大まかな活動内容と、授業までに各自が集めておく材料について、例示しながら話をした。材料集め自体が、材料の特徴を感じ取り、自分の価値判断で選び、何をどうつくろうかと発想を広げ、意欲を高める大切な時間であると考えた。



②　材料との十分なかかわり合いからつくりだす

導入時に、子ども達は材料を見るだけでなく、手で触れたり頬につけたり抱きしめたりしながら十分味わった。ふわふわの材料の心地よさが、子どもたちの材料にかかわりたい、つくりたいという思いを高めていく様子であった。表現過程では、綿を頭にたくさんのせたり髭にしたりして友達

に見せながらつくる様子や、選んだ柔らかな布をひらひらさせながら席に戻っていく様子など、材料の特徴を味わい楽しみながらつくる姿が見られた。触覚を重視して材料を味わったためか、触るための作品も生まれた。『かせきほりじょう（化石掘場）』という題名で、平たくのばした綿の中に、微妙に硬さ・大きさ・形が違うモールや毛糸などを丸めたものを埋め込んで、触って楽しむ作品であった。このように、材料との十分なかかわり合いから発想がふくらんでいくと考えられる。

③鑑賞活動からつくりだす

「かわいいでしょ」
自分の分身のように、大事に育てるように、自分の作品とかかわり合いながらつくっていた。

表現過程では、自分の作品をしばらく見て、「いいこと思いついた！」と新たな発想を広げている場面を何度も目にした。「ぼくのペットだよ」と作品を紐で引っ張りながら教室の中を歩いて楽しく鑑賞し、思い出したように「目を付けよう」などとつくり続ける子どもの姿もあった。子どもたちは、つくりながら見て感じたことから、思い付いたことを試し、つくり続けているのである。

このような子どもたちが自然に行っている鑑賞の機会を、意図的・計画的に環境設定や学習活動の展開にそっと入れることとした。こうした鑑賞活動を通して、子どもが自分自身の力でよりよい表現を目指そうと工夫し、つくり出す喜びを味わえるようになるのではないかと考えた。

ア　鑑賞活動を促す環境設定の工夫～吊ることで新しい見方や表現が促される～

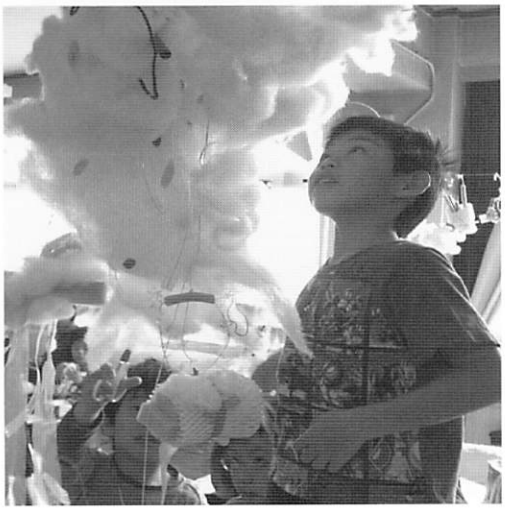
本題材では、表現過程の作品を吊ることができるように環境設定を行った。このことによって、作品を回したり、自分が作品の周りを回ったりして見るなど、さまざまな方向から見る活動が引き起こされていた。また、顔を上げれば遠くの友達の表現活動の様子も見ることができるため、近くまで見に行ったり、つくり方を自分の表現に取り入れたりする活動も促された。

その他に、こんなものをつくろうとはじめに考えて作品をつくり上げることが難しい場合でも、思い付いたものをつくってはどんどんつないで吊っていくような、楽しい表現を促す効果があった。また、吊ることで、立てにくい作品でも形状を維持しやすい利点があった。さらに、「空の国」「ひこうせん」「ふわ子とふわのひらひらデート」など、作品に付けられた題名に見られるように、材料の軽さや吊ったことによる浮遊感が表現に生かされていることも分かった。

以上のことから、吊ることによって見方が変わり、発想の広がりが促されたと考えられる。

イ　表現に生きる鑑賞活動を促す学習展開

事前に、子ども達が材料を集める期間を設定した。薄い布をベールのように重ねて垂らしていた子どもは、その期間に家族とホテルに行った時に見た飾りから、つくりたいものを思い付いたと話してくれた。きっと材料を集めながら何をつくろうかと頭の片隅にあったから、いつもなら見過ごしていたか、きれいだなと思っただけのものが新しい価値をもって見えたのだと考えられる。



ふわふわの「空の国」が見えた！

また、前述のように導入での材料を味わう活動や、子ども達の活動状況に応じて作品を吊ることができるようにしたことなども鑑賞活動を促す学習展開であったと言える。

活動途中では短い時間を区切り、自分の表現を改めて見たり、友達の表現よさをみつけたりする鑑賞の機会を設けた。その際、送風機で風を送り、「くる・ふわ・ひらり」な感じが一層楽しく感じられるよう促したり、いろいろな方

向から見たり、そっと触ってみたりするなど、見る視点をいくつか示した。その後、友達の表現を取り入れながら自分らしい表し方を見つけだす場面が見られた。

このように、つくり方を教えるのではなく、鑑賞の視点をそっと活動計画の中に埋め込んでいく方が、子ども達は見ることを楽しみながら自分自身で表し方をみつけていくと考えられる。

④つくり出す喜びを感じる時とは

授業後、子ども達に、「ふわ・くる・ひらり」の図工が楽しかったか、楽しい・まあまあ楽しい・ふつう・あまり楽しくない・楽しくない、の中から選んで○を付けてもらった。一人が「ふつう」に丸を付け、あとは「楽しい」に○が付いていた。その理由には「どんな時、子ども達が図工を楽しいと感じるのか」ということがよく表れていて、日頃の自分の指導を反省させられた。

・「たのしかったりゆうは、絵だったら絵と決まったものしかつくらないのではなくて、なんでもつくっていいのでたのしかったです。わたしはまたこういうものをやりたいです。」

・「たのしかったのは、のりやセロテープを使わないで図工をするのがむずかしくていいなと思いました。」

・「いろんなものがつくれてよかった。またほかの人のさくひんがよかった。じぶんのもいいなと思った。この『ふわ・くる・ひらり』の図工ができてとってもいい一日だとおもった。」

・「かばさんはしっぱいさくだけど、つくりなおしてすこしにてきたけど、じしんはいっぱい。」

最後の文は「ふつう」と答えた子の感想である。自分が思うようにつくれない時に楽しいと感じなかったようである。しかし、稲妻が光る雲の下に龍の姿(これがカバさん？)を表現している様子は、「じしんはいっぱい」とあるように、自分のイメージ通りに表している自信に満ちていた。

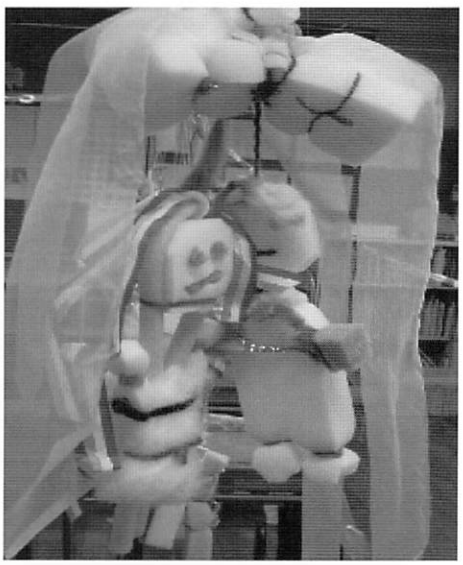
つまり、「自分自身の力でやってみたいことが次々思いついて、材料やつくるものを自由に選べて、自分の思い通りにかたちになっていく」「でも、何か制限があるちょっと難しい感じが面白い」「自分の表現に自信がもてるから、他の人の表現のよさも楽しめる」そんな時が楽しい図工なのだろう。その逆が楽しくない図工なのだろう。図工の時間に大事なことを、子ども達の造形活動と言葉で教えてもらった。何より、私自身が子ども達の活動を見るのが楽しくてたまらなかった。そして彼らが１時間半の授業を自分たちで楽しくつくってくれたようにも感じた。

４　助言指導

○　松本 健義 先生より

自分の作品を両手で撫で、その手で自分の髪を撫でてはまたつくる子どもの様子が興味深かった。造形表現を通して自分の存在を確認し、新しい自分をつくっている姿ではないか。

また、いろいろな色のカラーチューブを曲げて束ね、『虹色の噴水』にしていた子どもは、切って少しずつ残った材料を手に持ったまましばらく考え込んでいたが、モールに刺して『虹の焼鳥』とした。全く同じ材料であっても、その長さだけの違いで用い方は変わり、異なる表現が生みだされたのである。このように材料の特徴を味わうことを通して新たな発想が広がり、新たな表現が生まれる。そして、つくる子ども自身も造形経験を通して新たなものの見方や考え方、造形感覚などを獲得しながら変化し続けていくと考えられる。



「ふわ子とふわのひらひらデート」

分科会テーマ 「つくりだす喜び」
公開授業　　３年　１組

色　いろ　そめーる

■ 授業者　白井　誠　　中央区立常盤小学校
　　緑川　敏夫　中央区立明石小学校
■ 提案者　三浦 百合子　中央区立泰明小学校

見て、見て『そめーる』ができたよ！

１　題材のねらい

染料の染め方に関心をもち、体全体の感覚を働かせて、発想したことをもとに思いのままに表すことの楽しさを味わう。

２　研究討議の内容

①題材について

子どもと他者との相互行為から、子どものもつ力に学ぶことの意味を考えることができた。

②つくりだす喜びについて

子どもたちは、物を作り出すことで他者とのかかわりを新しくつくり直している。友達の変化を自分のことのように感じる場面も見られた。異質なものが組み合わさることで自分の中に可能性が生まれてくるといえる。

３　授業者の言葉

今回の授業では、子どもたちが試す活動を通して、形を表している学びが見られた。折り方を変えてみたり、つけ方を変えてみたりするなど、子どもたちが工夫する時間が十分に確保できた。和紙を中心に準備したが、布の希望も多くあった。ランチョンマットにしてつくったものをプレゼントしたいという子どももいて、作品を通してつくった後のことも考えている姿が見られた。また、和紙の大きさに注目して、自分の希望の大きさをつくり、染める子どもや、色水をはじく和紙を使って色のビーズのようなものをつくっている子どももいた。

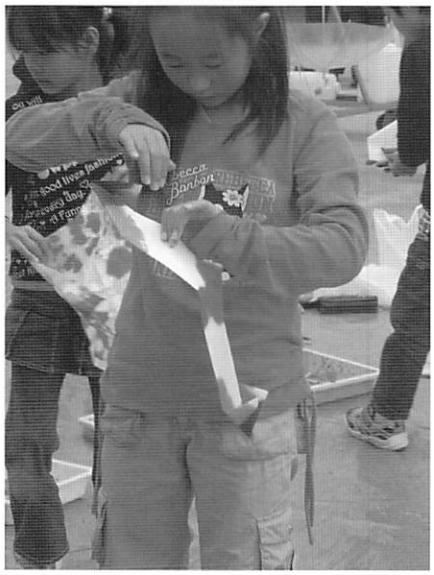
天候にも恵まれ、校庭いっぱいに、さまざまな模様の『そめーる』が出来上がり、いつもと違う空間も味わうことができた。

子どもから「いいこと考えた！」という言葉が多く出てきていた。つくり出す喜びを実感できたと考えられる。また、ＴＴ、学級担任との指導により、自分自身も子どもたちとのかかわり方を学ぶ機会となった。

４　助言指導（松本　健義先生より）

喜んで『そめーる』を干している姿が見られた。手裏剣をつくった子は、２枚重ねでつくったものを解くと、同じものをつくったのにできた模様は異なっていることを不思議に感じていた。

繰り返しつくり変えながら、違うものにつくり変えることで、自分も変わり、友達も変わっていく。この生きた姿からどう学ぶかが大切だといえる。


いろいろな折り方を試してみよう。

分科会テーマ　「他者や世界とのかかわり分科会」

公開授業　　幼稚園児（年長）　１年１組

みんなでつくって！！キラキラトンネル

■　授業者　山﨑　聖美　台東区立田原小学校
吉田　順子　台東区立冨士小学校
■　提案者　餅　　和子　台東区立金曽木小学校

エプロンに光のカケラをはって、ある場所に運ぼう！その場所は…透明な大きな大きなトンネル。キラリンの国にあるキラキラトンネルをみんなも作ってみようよ。光のカケラをみんなで協力して、トンネルにはりつけていくと…できたよ！すてきなトンネルが…このトンネルを通ると、だれでも幸せな気持ちになれる…。

子どもたちは、子ども同士、教師、世界…様々なものと自然にかかわっていく。

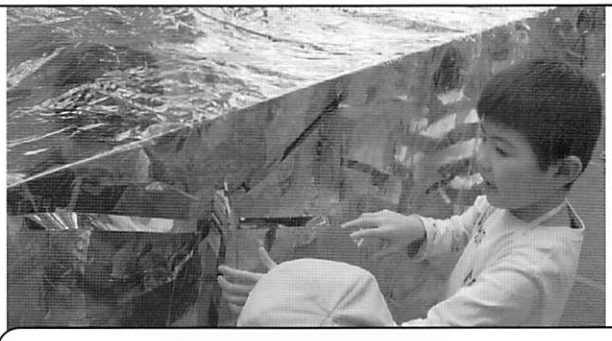
「いい場所みーつけた♪」
「つなげちゃおっと！」
「おもしろくなってきたね。」

「そぉ～～～っと。」
「そっち　おさえてて！」
「できた！！ありがとう。」

子どもたちの心が通い合った時、新しいかたちがうまれる。

「その形すてきだね。」
「そこにこれをたしてみたら
どうかな？」
「うん、なかなかいいね。」

気づき、思いはどんどんふくらんで…



子どもたちは自然に素材、人、場所…様々なものとかかわり、発見したり、つくったりと感動を形にしていた。今回は初めて活動を共にした幼稚園児と１年生の交流であったが、最初の緊張もだんだんとほぐれ、かかわるたびに喜びや自信へとつながり、子どもの思いはどんどんふくらんでいった。そのことが子どもたちの行動や表情からもよみとれた。

分科会テーマ　「他者や世界とのかかわり分科会」
授業研究　　４年１組

夢工場からのおくりもの～ドリーム・ファクトリー～

■　授業者　室　恵理子　台東区立石浜小学校
■　提案者　餅　　和子　台東区立金曽木小学校

授業の様子から

文京区立青柳小学校の４年生と授業をすることになって、せっかくだからうちの（台東区立石浜小学校の）子どもたちとかかわらせたい！と思い、この題材を考えました。

図工室は、どんな夢でもかなえてくれる夢工場という設定。子どもたちは、本名ではなくニックネームで呼び合う夢工場スタッフ。教師は、青柳小夢工場と石浜小夢工場をつなぐ郵便配達人です。

そして手紙を相手に届けるための、どんな願いでもかなえてくれる“ゆめ切手”をデザインするところから、この題材ははじまりました――。

どちらの子どもたちも、会ったこともない見知らぬ誰かに手紙を書くのにドキドキワクワク。そして自分のデザインした切手が貼られた返事が来ると、「相手はどんな子なのかなぁ？」「男の子かな？女の子かな？」と、これまた大興奮でした。もらった手紙を他の子には見せないで、そ―っと机の下のほうで読んでいる子もいました。相手の書いてきた“ほしいもの”をいざ作品にするとなると、どんな風に表現するか悩んでしまう子もいるのではないか？と思いましたが、そんな心配ご無用で、どの子も自分なりに材料を選び、考え、意欲的に制作に取り組んでいました。

この題材の中で、特に気をつかったところは、“ほしいもの”を書かせるところです。ただ“ほしいもの”を書いてもらうと、ゲームのソフトがほしい…など具体的なモノにこだわってしまうので、お金を出せば買えるようなものではなく、作り手側が自由に想像力をはたらかせることができるようなものになるように、言葉をかけました。

授業を終えて一番感じたのは、自分のほしいものを託すよりも、相手のほしいものを作品にする行為のほうが、意欲的に取り組んでいたことです。相手のことを想像しながらほしいものを制作し、プレゼントすることを本当に楽しんでいたように思います。

ある男の子が、“医者になれる未来”というある女の子のほしいものをつくるのに、とっても悩んでいました。ちょっと難しい課題だなぁと私も思っていましたが、最終的に「どんな作品になったのかな？」と見にいくと、白衣を着た女の子の絵が描いてあり、その横に「がんばれ」の文字。それを見た私はほろりと泣きそうになってしまいました。

分科会テーマ　「他者や世界とのかかわり」
公開授業　　５年１組

大地からの贈りもの“土”で…

■　授業者　穐本尚子　　台東区立浅草小学校
　　柿沼美知子　台東区立根岸小学校
■　提案者　餅　和子　　台東区立金曽木小学校

集まった土を授業の最初に観賞した時に、「これが本当に土なの？」「きれい」という呟きが自然と聞こえ、子どもが土に興味をもって見ているのだと、手応えを強く感じた。青柳小の児童や台東区・文京区の教師の協力で、全国各地から土が集まり、赤、オレンジ、灰色、黒といった色とりどりの土を使った授業ができた。これにより子ども達の「土」への関心や意欲が確実に高まった。
土の観賞では、集めた土を子ども達がグラデーションに並べる活動を取り入れた。そこでは「私の色はどの辺かな」「○○君の土の色に似てるよ」と互いに相談しながら並べる様子が見られ、子ども達が積極的にかかわり合いつつ、土の色への意識付けができた。

次に「土パウダー」を長いロール画用紙に手のひらで刷り込み、クラス全員で大きな大地をつくった。土の触り心地を手のひらから、体全体で感じてほしいというねらいで授業に取り入れたのだが、予想以上に子どもが長い時間熱中して取り組んでいた。「隣の友達と大地をつなげよう」という呼びかけで、互いのつなぎ目を埋めようと土を刷り込んでいた。土の色がお互いに混ざり合い、だんだんと土の色が変化する、一つながりの大きな大地が出来上がった。

そして「土絵の具」を使い、「大地に生える、自分だけの大きな木を描こう」という呼びかけで絵を描いた。まずは自分の集めた土で色を試しながら木を描き、土の色を試して描いた。「土を貸し借りしてもいいですよ」という教師の呼びかけで、「○○さん色借りてもいい？」「先生の土を使ってもいいですか？」と土を共有する姿が見られた。

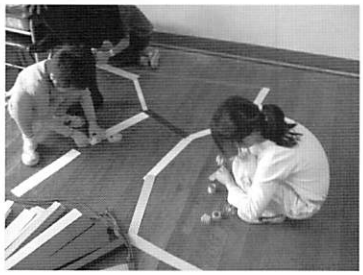
最初はひとりひとりがじっくり考え、これまでに印象的だった木を思い浮かべたり、こんな木があったらいいなと考えたり、校庭の木を見たりしながら描き始めていた。次第に枝や根が隣の友達に近づくと、枝が重なるように描いたり、木と木の間に鳥を描いたりと、互いに相談しながら描く様子が見られた。クラス全員が同じ紙を共有した事、土を共有した事で、自然に友達同士がかかわる環境の設定ができた。

「最初は何とも思ってなかった土が、さらさらきれいになって、こんな風に絵がかけるなんて思わなかった」という感想があった。この授業のねらいである、“子どもにとって「土」がどんなものかを考える”きっかけとなる授業ができたと考える。

分科会テーマ　「日常にいきる図工」
公開授業　　２年　２組

ひらめきざくざく

■　授業者　平良麻由子　文京区立湯島小学校
■　提案者　桐敷　芳子　文京区立根津小学校

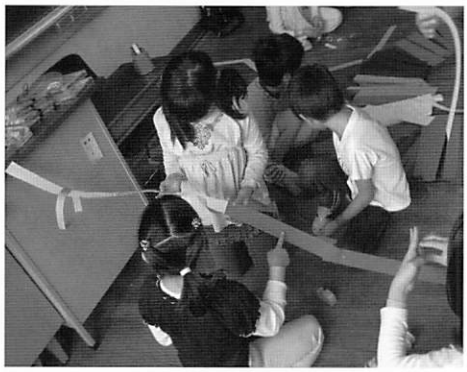


１　題材のねらい

短冊の形に切った細長い色画用紙をもとに、さまざまに発想を広げ、つないだり、貼ったり、並べたりしながら、自分なりのめあてをもって活動する。

２　授業の様子から

○材料を子どもが日頃から使っている色画用紙にしたことで、今までの造形的な体験をいかして活動していた。折る、切る、貼る、つなげる、丸める、束ねるなど簡単な操作で２年生の子どもが「自分ならこうしたい」という思いやめあてを持つことができていた。



○セロハンテープは貼り付けたりはがしたりが容易なので、思いついたことを何度も試しながら活動できていた。

○短冊をヒューサークルのように丸く色の順番に材料置き場に並べた。子どもがその前で色を選んだりを悩んだりしていた。声かけをしなくても自然と子どもが色を意識して活動できた。

○机を班ごとにまとめて教室の中央に材料置き場と活動のスペースを設けた。子どもの活動が机、壁、床、廊下など広がっていた。また、自然とグループになって協力して活動するなど、個人の活動からグループになり、個人作業へと活動の形態も柔軟に変化していた。

○短冊の太さを３種類用意した。細い短冊は紙バネや飾りをつくり、太い短冊では線路や道、穴を空けるなど短冊の太さからの発想も見られた。

○場所の設定を自分たちの教室にしたことで、空き箱やゴミ箱、机や道具のすべてが材料や活動の要素になっていかせていた。

○互いの作品や活動を写真によって鑑賞し振り返りをしたことで教師の見せたい視点を子どもと共有できた。また発表によって、友達の工夫に気付いたり、自分のよさを友達に認めてもらったりできた。

○子どもが自主的に校庭にいる人に向けて、メッセージを書いた短冊を垂らし、自分たちの活動を宣伝していた。

●活動場所が教室と廊下の広い空間だったので、教師の言葉がけをもう少し大きい声で伝えれば他の子も共有できた。

●２時間たっぷりと活動できたが、子どもはまだ活動を続けたがっていた。

分科会テーマ　「日常にいきる図工」
公開授業　　５年　２組

光と影のものがたり

■　授業者　小川　怜奈　文京区立大塚小学校
■　提案者　桐敷　芳子　文京区立根津小学校

１　題材のねらい

光を当てた時の色やものの見え方の変化や違いを自分なりに感じ取り、色の構成などを考えながら進んで活動し、その面白さや楽しさを十分味わう。

２　題材について

「日常に生きる図工」というテーマを受けて、「鑑賞」グループでは、子どもたちの「みる」という活動に焦点をあてた。その手がかりとして今回は、「光」を使うことにした。部屋を暗くし光を当てることで変化する見え方の面白さや美しさを感じ取ってほしいと考えた。くしゃくしゃにしたトレーシングペーパーを吊し、様々な方向から光を当てるとその見え方が劇的に変化する。色つきのトレーシングペーパーを貼り重ねることで、多様な見え方が生じる。こうした材料や、行為、子ども同士のかかわりが、子どもの「みる」活動を絶えず刺激し活性化すると考えた。

さらに、自分たちの活動をとおして、感じたり考えたりしたことを、ワークシートを活用して伝え合うことで一層「みる」ことが深まると考えた。

本題材では、子ども自身が自分の新しいものの見方を発見し、感じたり考えたりしたことを伝え合うなかで、自分を変えていく。そのことが、日常に生きて働くことにつながるのではないかと考えた。

３　授業の様子から

導入で、動くトレーシングペーパーをみて「おぉ！生きているみたい。」とつぶやく子。子どもたちはこの授業にすぅーっと入ってきた。子どもたちは、光を当ててその変化を「みながら」、活動を進めていた。いろいろな光の当て方が、子どもたちから発見された。（懐中電灯を早く動かす。ゆっくり動かす。近くから当てる。遠くで当てる。トレーシングペーパーを懐中電灯に貼る。）また、紙の貼り方もよく工夫されていた。（重ねて貼る。ねじって貼る。浮かせて貼る。まるめて貼る。）このように、貼り方を工夫したり、光の当て方を変えたりすることで、影やかたちが動く面白さや、色が重なったり混ざったりする美しさを感じることができただろう。

グループ活動にするか個人の活動にするかをギリギリまで悩んだが、今回の活動ではグループの活動でよかったと思われる。一人の世界で終わることなく、表現したものを見合う相手、意見を言ったり相談したりする相手がいて、活動がより広がったのがよかった。

みんなで鑑賞タイムでは、活動中にみつけた「ここが面白い！」「ここがすてき！」や、自分たちの作品のチャームポイントなどを、自分たちの言葉で発表した。聞いている子どもたちは、自分たちとは違った光の当て方や紙の貼り方の工夫に、興味津々。質問をしたり感想を言ったりした。

感想の中に「光の当て方で見え方が変わる（動いてみえる）のが面白かった。」とあった。今までになかった新しい見方を発見して、自分を変えていくことにつながるといい。

分科会テーマ　「日常にいきる図工」
公開授業　　６年　１組

光を通して輝く形

■　授業者　平本かおり　文京区立林町小学校
■　提案者　桐敷　芳子　文京区立根津小学校

１　題材のねらい

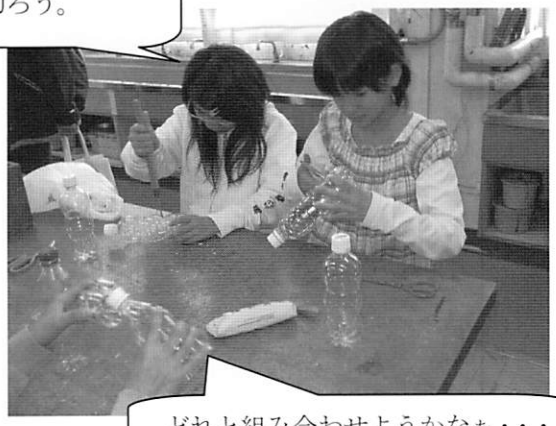
・光を通して輝く形に関心をもち、光の効果やペットボトルの特徴から想像を広げ、つくりたいものを発想し、切り方、組み合わせ方などを工夫して、つくることを楽しむ。
・友だちと見せ合って、考えたり、よさを伝え合ったりする。

光ＢＯＸに入れると・・・

わぁ～、すごい！

切ったり、組み合わせたりしてみよう。

きりで穴を開けて切ろう。



どれと組み合わせようかなぁ・・・

２　授業の様子から

○ペットボトルを細く、長く、回転させながら切っていた。
○切り込みを入れ、曲げて形を変えていた。
○細かく切った物をペットボトルの中に入れていた。
○つくっている途中で、どのように見えるのか、光ＢＯＸにのせて試していた。
○光ＢＯＸにのせた作品を見合いながら、感想を伝え合っていた。

３　研究討議より　～助言者の水島先生から～

「実験的な要素のある活動だった。試行錯誤する行為は大切。自分の試作・行為を位置づける、造形的な創造活動は大事である。授業中、「すげ～！」という言葉を何度も聞いたが、このような言葉は体全体で実感したものの中から出てくるものである。さらに、自己と他者（世界・社会）のつながりに焦点を当てて整理していくとよい。」

自分のアイデアを具体的にして、美しく輝いてみえたとき、自然と喜びが湧き上がってくる。子どもたちの喜びに共感し合えたことに幸せを感じた。（授業者）

分科会テーマ　「自分をつくる」
公開授業　　３年　２組

箱　はこ　ハッピー

■　授業者　森脇　勝美（千代田区立富士見小学校）
　　砂澤　弥生（千代田区立九段小学校）
■　提案者　森脇　勝美（千代田区立富士見小学校）

１　題材のねらい

自分の思いをふくらませながら、材料を選択し、思いを深め試行錯誤しながら、箱の中に「自分の世界」をつくり上げる。

２　授業の様子から

材料とふれあって・・・

「うわー！すごい！」たくさんの素材や材料に出会った子もたちは目を輝かせ、歓声の声を上げていました。

材料体験は経験の差（個人差）が大きいため、子どもたが今まで使ったことのある材料や使ってみたい材料、教師が選んだ魅力的な材料など２０～３０種類集め、前時にっぷり時間をかけ、かかわらせました。

自由に材料とかかわらせる中で、材料体験を広げ、素材感を十分味わいながら、自分の思いと重ね合わせながら、つくりたいイメージをつかませる工夫をしてきました。

「ふわふわの感じが好き！」「キラキラしているから宝物をつくろうかな・・・」子どもたちはわくわくしながら材料を選びました。迷ったあげく、または、取りあえずと材料を何でもかんでも持って行く子はほとんどなく、前時の体験から、家から自分のつくりたいイメージにあった材料を持ってきたり、友だちと材料交換したりする姿も見られました。

「つくるんだノート」

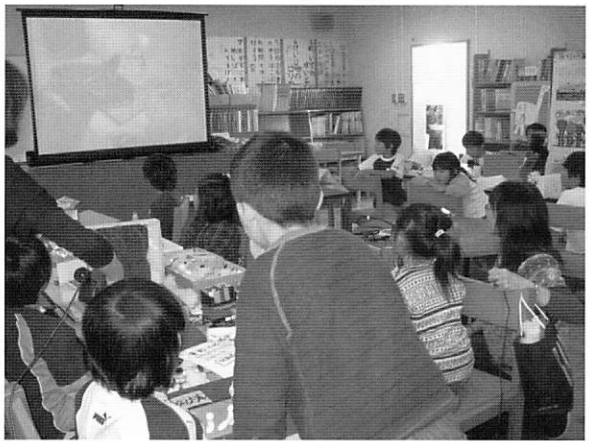
また、箱の中のイメージやつくるためのヒント、自分の趣向に気付かせるため「つくるんだノート」に、自分の好きな色や形、好きな材料（視覚・触覚的な感覚的なこと）など記入させました。初めて出会う子どもたちの個性や趣向を知る上でも、このカードはとても効果的でした。色画用紙を使った色選びや形見つけ、友だちの趣向を知り自分と同じと喜びの声を上げたり、友だちの好みの意外性に驚いたり感心したり、友だちとのよいコミニュケーションも図れました。このノートは、写真にもあるように、つくる過程で自分の活動を振り返ったり、また教師が書いたアドバイスを見てヒントにしたりと（共感的な評価）、子どもたちにとって、心強いカードにもなったようです。

試行錯誤・・・そして成長！

友だちと自由に意見交換しながらつくりあう姿は、とてもほほえましい光景でした。使ったことのない材料も多く、試行錯誤しながら、つくりたいイメージに合わせ材料と格闘している姿もたくさん見受けられました。

この写真の子どもの作品は「綿に付けるた木がきちんと立たない」と何回もボンドで付けては倒れ・・・を繰り返していました。「つくるんだノート」で教師は子どもの悩みはある程度把握しているものの、子どもの力で解決できることは頑張らせたいと見守ることにしました。格闘の末、段ボールに穴を開け固定できた時の、充実感あふれる笑顔「先生！見て見て！」の声も一段と大きく自信に満ちていました。

「自分らしさ・・・友だちらしさ」



「ここのところ、アルミ線でつくたんだよ！曲げるのがすごく大変だったよ」時間が終わりに近づき、子どもたちの「見て見て！」攻撃の声が一段と大きくなり、思い通りにできた作品を見てもらいたい気持ちは頂点に上り詰めました。

大きくプロジェクターに映し出され、自慢げな子、恥ずかしそうな子・・・見てもらいたいところを映し出され、みんな満足感や充実感に満ちた笑顔で一杯でした。

友だちの作品に「かっこいいねー」「きれいな形だね！」とたくさんの声も聞かれ、子ども同士もお互いの作品のよさや面白さをたくさん発見し、友だちの「その子らしさ」にも気付くことができたようでした。

３　授業を終えて

「自分をつくる」というテーマの解釈に悩まされた日々・・・しかし、授業をやり終えた時の、子どもたちが自己表出できた満足そうな笑顔で苦労や苦難も吹き飛んでしましました。一番、試行錯誤し、困難を乗り越え成長したのは、授業者だったのかもしれません。

最後に子どもたちの感想の中から、「たくさんの材料があってとても嬉しかったけれど、選ぶのが迷ってしまった。でも､たくさん触っているうちに材料のことが分かってきてすごく楽しくなったし、図工がもっともっと好きになった！」「材料をたくさん持ってきてくれた先生に感謝します」等々･･･子どもに教えられたり、元気づけられたりすることがたくさんありました。

この授業は材料選びから始まり、たくさん自己決定する機会や場面を増やしたことで、子どもたちは悩んだり試行錯誤したりする場面も多かったように思います。しかし、その分子どもたちは、その都度自分に問いかけたり、振り返ったり、友だちの活動を観察したり意見交換したり、教師に支援を求めたりたくさんの「かかわり」のなかでしっかり自己表出でき「自分らしさ」をつくりあげることができたのではないかと確信しています。

この実践で、子どもの活動や思いを見取る目や力量、共感的な支援や評価、子ども自身を成長させる大切な試行錯誤の場を確保すること等、授業における教師のあり方を学ぶことができました。今後ともそのことを生かし、一人一人の子どもたちが「自己実現の喜び」をしっかり実感できるような授業づくりを目指していきたいと思っています。

分科会テーマ 「体と心を働かせた造形活動」
公開授業　　1年　2組

こなこな とろとろ まぜまぜ

■ 授業者　吉岡 琢真　八王子市立第一小学校
■ 提案者　玉置 一仁　北区立滝野川第二小学校

1　題材のねらい

粉絵の具とのりを指で混ぜて好みの絵の具をつくり、その感触や色味を味わいながら思いついたことを絵などにして表す。

2　授業者の言葉

図工ほど、概念より感覚を、論理より心もちを大切にしている教科もないだろう。それは、今回の研究授業をする過程で強く感じた。図工の研究とは、概念や論理でスカッとできない、またマニュアル化できないものである。こういうと大袈裟だとか、当たり前だとか思われるかもしれないが、私が目の当たりにした実感である。話せば話すほど授業のねらいが揺らいでいく。そして、ここまでやるかというほど環境について具体的で細かい検討をしていく。どれだけ時間を費やしても、検討することがなくならない。ちょっとしたことで、子どもの活動が変わる。子どもの自発性への期待の大きさと、検討の深さは比例するようだ。これでよいという終わりはない。

特に最後まで私の中で揺らいでいたことは、絵の具づくりを一つの題材にするのか、それとも、絵を描く過程の中で絵の具づくりをするのかというねらいである。また、絵を描くとして、それぞれがつくった絵の具から想像して描くのか、共通のテーマから絵を描くのかということである。これは、どのような活動をねらうのが正しいとか間違いであるという問題ではなく、授業者がどのような子ども観をもっているかによってかわるものだ。私の経験と研究過程において上記のようなねらいとなったのである。自分のつくった絵の具でぬり広げてみたい、絵を描きたいと思う子を大事にしたいと思ったからだ。

ただそう思わない子には、絵の具をつくる活動と、絵を描く活動の間に飛躍が必要となったが、この異質な活動を媒介する子どもの想像力はすごかった。私は、子どもが自分でつくった絵の具を真っ白な紙の横にならべて、ためらいながら、考えながら、じっと紙を見つめながら描き始める瞬間に立会い、ぞくぞくした。さらに子どもが自分で描いたものに触発され、イメージが呼び起こされ、次々と新たな世界を生み出していく姿に魅せられた。授業をやってよかったなあと思っている。

「子どものために」「子ども中心に」ということを大切に、研究を進めてきた。講師の岩﨑先生からは、『ともすると研究を進めるうちに、子どもの実態から離れて、大人の人間関係の調整をするため、出来上がった題材がごった煮みたいになる。そのために、どこに子どもの姿があるのか、わからなくなることがありがちだが、今回は、まさに子どものための授業だった。』と講評していただいた。たしかに、研究を進めていくと、一人では思いつかない貴重な意見に出会い、それを自分のものとするのは、難しかった。にもかかわらず、子どものための授業だったと講評いただいたのも、ひとえに、一緒に研究する人に恵まれたからである。

分科会テーマ　「体と心を働かせた造形活動」
公開授業　　６年　２組

みることからはじまるストーリー

■　授業者　田中 明美　品川区立立会小学校
■　提案者　玉置 一仁　北区立滝野川第二小学校

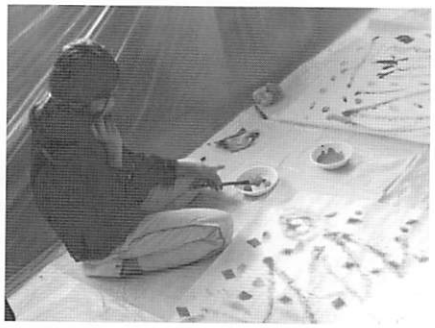
1　題材のねらい

体や目でみたこと・感じたこと等から自分の表したいことを見付け、表したい方法を選び、自分の思いを自分の形や色の物語として表現することを楽しみながら、表現の美しさや面白さに気付き感じ取る。

2　授業者の言葉

今回は、研究局の研究のキーワード『子どもスイッチ』の【みる】と分科会テーマの『体と心を働かせた造形活動』の２つの観点から考え始めた。そして、【みる】ことも、「目でみる」「体でみる」「心でみる」「自分の表現と向き合ってみる」の４つの「みる」をきっかけとした。私は、最近、表現を物語として表すことを心において図工に向き合いたいと考えていたが、ここから自分の物語がはじまることとなったのである。

この題材の提案に、６年生の子どもたちは、最初少し体を固めていた。わかっていたことだが、高学年で体を動かすこと、その上、それを表現に繋げていくことは難しい。私の中でも、どうシンプルに手渡ししたらいいのか迷いがあったのも事実だった。周りの友だちの様子を見ながら考える子。一気にやりたいことへ向かう子。そのうち、一色目の色を選ぶ時、とても嬉しそうに迷う姿が見えてきた。まだ、紙に一色目をのせるまで、周りをキョロキョロしながら進めている。しかし、一色目の色を和紙にのせた瞬間、『子どもスイッチ』が入った子どもが見られ、子どもたちは動き出していった。和紙の上でぐるぐる回って描く子。遠くに下がって自分の和紙をじっと眺める子。子どもの内なる部分で起きていること（心のざわざわする思い）は、体の外での表現と繋がっていく。また、活動は止まっていたとしても、内なる部分で起きていることは止まらず、変化し続けているのである。子どもたちは、表現や自分自身に向き合い、意識して体を動かして表現していた。体を動かすことで心が動き、心が動くことで、体が動く。こうして物語を表し、新しい私を表していたのである。授業が終わって見た子どもたちの顔は、最初に顔合せで出会った時よりいい表情をしていた。私はぎりぎりまで、最初におく体で表す線は、墨で共通にするか、自分の心の色にするか迷っていた。でも、こうして色も子どもたちが選んで進めてみると、大人のわかりやすさではなく、アート的な美しさの面ではなく、子どもの心の色も物語の大事な要素として取り入れてよかったと思っている。高学年で、自分の内面を出していくこと、自分の物語・心を描くことは難しいと思うが、やはり、私は、思い・感情の揺らぎを大切にして、理論ではない、目の前の子どもたちにどう造形への心地よさを手渡しするかを大事に、図工に向き合っていきたいと思う。



公開授業　　１年　１組

想像力をふくらませて、素敵なオリジナルキャラクターを作ろう

■ 授業者　日野市立　日野第二中学校　豊川邦夫
■ 助言者　杉並区立　松の木中学校　田中啓二校長
■ 司会者　目黒区立　第八中学校　松永かおり
■ 記録者　世田谷区立　尾山台中学校　中村みどり

１　題材のねらい

・　美術に苦手意識を持ってしまう生徒にとっても、描くことの楽しさを味わわせ、美術を好きになってもらう。
・　生徒の豊かな想像力を引き出す。

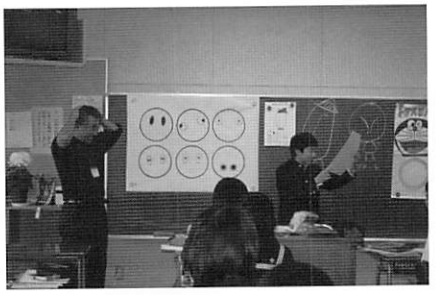
２　研究討議の内容

①題材について

・　短時間題材のメリットという視点からのご意見、また指導案や授業を見た感想など。

②意見および感想

・　一時間という短い時間なのに生徒が時間内で作れて、また互いに見せ合う雰囲気がとても良かった。普段から良い学級づくりが出来ていると感じられた。
・　導入の授業者からのアプローチがユニークで「キャラクター」という点からも生徒たちの興味関心を引きつけていた。また生徒に自信を持たせながら楽しく制作に取り組ませていた。
・　「自分を知る、他者を知る」という大会テーマだが、この授業で行った「顔や表情で性格を表したり、顔や表情から他の人の心を読みとる」ということが「気持ちを伝える」ことに発展できるのではないかと考えた。
・　キャラクターづくりに直接入っていたことがすごい。例示が効果的に表され、指導が良かった。見学していた校長先生も「子供の関心から授業に入る。」ことのすばらしさを指摘されていた。私も是非やってみたい授業だった。
・　導入の段階で、生徒が教員の仕掛けによくついていき「早く描きたいな」と思わせていた。著作権のこともありキャラクターを取り扱うのは難しいが、生徒たちが自らキャラクターを作れるので良かった。また一方で描けなかった生徒もいたが、その生徒に対する支援の方法も教えてほしい。
・　描けない生徒やできない生徒にワークシートや資料などのきっかけをうまく与えていけば、できない生徒も描けるようになり自分で作ったという満足感が出てくるのではないか。線と感情の表現についても伝えていけば、さらに次の課題に広がっていくのではないかと思う。
・　パソコンやアニメーションソフトを使ってキャラクターを作る授業をする先生が今後も出てくるのではないかと思う。パソコンの専門の技術がなくても簡単に出来てしまうソフトがあれば、いっそう発展するのではないだろうか。



３　授業者の言葉

授業者自評　日野市立　日野第二中学校　豊川邦夫先生

・　通常は制作にじっくりと取り組ませる中で生徒の力を引き出したいので一時間で行う題材は行っていないが、テーマに合わせつつ一時間でできる授業内容という理由からこの題材を考えた。

・　この授業は学校で実際にはやったことはないが、小学生を対象にした授業で行ってみたところ児童の反応を見てやれると考えた。選択授業でケント紙を八等分して折りミニ絵本を作らせているが、その際に自分の世界を作らせる手がかりとして、このキャラクターづくりの授業を導入してくと話が広がり展開していくのではないか、という見通しを持つことが出来た。

・　出来あがった作品を見ると生徒の秘めた力を引き出せているようなので、一学期に一作品を作らせたいという中でも、このような短時間題材の機会もあっても良いのかと思えた。

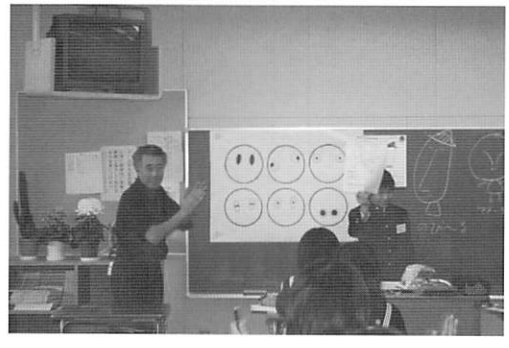
・　授業に当たって、導入の始めからのりの良いクラスであった。

・　上手でないとできないと言うのではなく、自分でもできるという授業にしたかった。

・　授業で全く描けない生徒もいた。せかして追い立てるものでもないので、今回は白紙でもその生徒のペースで良いと判断した。普段は次の授業で描ければよいとする時もあるが、個々に簡単な助言をしつつ、それを生かすかどうかはその生徒に任せるというような指導を取っている。

４　助言指導

①　杉並区立　松の木中学校校長　田中啓二先生から



導入が大変上手でした。子供たちの関心を良く引きつけていたと思います。キャラクターというと、生徒は商品のキャラクターを思うのだけれど「自分でも作れる」のだと理解し、またちょっとした表現の工夫で変化が出てくることを子供が理解できていました。

説明に用いた○△□にパターンに引きずられてしまうのではないかと思ったが、そうではなく二通りの発想が見られました。アイディアスケッチをたくさん描いた生徒が○△□に沿って何種類も描いている一方で、少ししか描けない生徒がオリジナルなものを描いていたようです。また自分のキャラクターを作るだけでなく、名前・性格・ストーリーを考え書かせることによって、授業に厚みが出ていました。

自分の考えが広がっていく、自分の世界ができていくという授業を通して、「美術は自分の世界をつくるもの」ということが分かってもらえたら良いと思いました。

生徒が作品を発表する中で、できあがったキャラクターに自分の欠点をかぶらせて表現していた作品がありました。自分をキャラクターに置き換えて発信できる、物語として発表させることで、表現がより深められていました。また授業をなさった豊川先生の濃いキャラクターをつかんで発想した生徒もいました。筆箱や色鉛筆の箱についているキャラクターをまねすることもあるのかと思いましたが、そうではありませんでした。意外に目の前のものに振り回されずにできていました。現代は多くのキャラクターに囲まれているせいで、かえって一つに絞られずにオリジナルな発想ができてくるのかとも思えました。映像表現や例示以外のキャラクターも用意してもおもしろいのではないかと思えました。

このような一時間題材も考えて授業をつくっていくことも必要だと思いました。

公開授業　　１年　２組

抽象画に挑戦してみよう

■ 授業者　佐々木　正敬　文京区立本郷台中学校　　■ 司会者　小田島　慎治　文京区立第三中学校
■ 助言者　曽根　信行　　杉並区立高井戸中学校　　■ 記録者　茜谷　佳世子　文京区立文林中学校

１　題材のねらい

・　抽象画のさまざまな表現方法に気づかせる。
・　モダンテクニックを理解し、自分の気持ちにあう表現方法を探らせる。
・　事物を描く絵画と違った表現のおもしろさに気づかせ、また、内的な表現の大切さに気づかせる。
・　抽象画、抽象表現に対する興味・関心を喚起する。

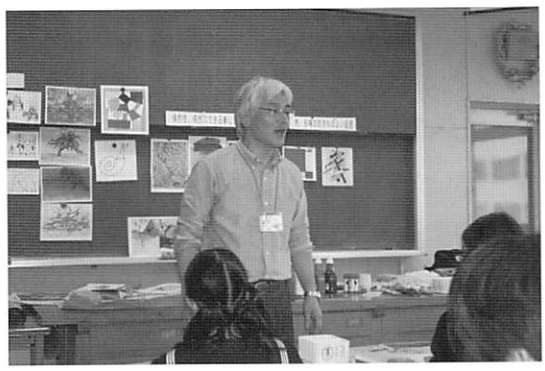
２　研究討議の内容

◎　題材について

・　ほとんどの生徒が、偶然が生み出すテクニック（ぼかし・たらし等）に挑戦していた。紙等を使っての幾何学模様を貼ったりする生徒が出現しなかった点が想定外であった。
・　偶然の効果によって、具象に見える作品があった。過去の経験からの描き方では、あのような作品は生まれなかったであろう。あらためて、抽象画のよさを感じた。
・　何もないところに描くきっかけとして新鮮であった。むしろ１時間だけでよい。完成したという充実感があった。
・　画面をつくる楽しさが伝わった。今回は、抽象の入口だったが、自分の主題をもって描くことに、今後発展してつながっていくのではないか。

３　授業者の言葉

・　モダンテクニックを使って、画面をつくる楽しさを味わわせることを目標とした。
・　抽象画は指導しにくいため指導者はさける傾向があるが、さまざまなせまり方・ためし方を通して抽象を身近なものにさせたい。
・　１時間での完成はやはり厳しかった。２～３時間あれば、生徒はもっとさまざまな技法に挑戦することができた。



４　助言指導

◎　曽根先生から

抽象画の入口が１時間では厳しかったが、オリジナルとしてよかった。抽象画の指導は200分計画が多いが、今回はコンパクトによくまとまっていた。抽象画に理解を示す指導者は少ないが、抽象の世界は「枯山水」のようなものであり、特有の感情をいかに表現するかである。生徒にうまく伝わらないと２度とやらない危険性もある。

学習指導要領の教科の目標に「喜び」が示されているの　は美術だけである。喜び・成就感を味わわせ、資質や能力を育成することが重要である。

公開授業　　１年　３組

アートゲームによる鑑賞

■ 授業者　大島　貴子（豊島区立巣鴨北中学校）　■ 司会者　濱脇みどり　（豊島区立千登世橋中学校）
■ 助言者　佐藤　清副校長（大田区立大森第十中学校）　■ 記録者　渡辺　茂　（豊島区立駒込中学校）

１　題材のねらい

美術における「確かな学力」の基盤になるものは、感動する心や、想像する力の育成であり、今大きな問題になっている心の問題と深く結びついているものと考える。そこで、作品制作の中から主体的に

育まれていくことも大きいが、「構成的グループエンカウンター」と結びつけた鑑賞授業を通して、心を育てていく（生徒理解・心の健康・コミュニケーション能力・自己開示など）の美術教育も可能であと考えている。

授業の中では、制作・表現活動に比べ、鑑賞に当てる時間は少ない。また、鑑賞の授業のイメージとしては、いわゆる芸術作品の文化的意義や歴史的意義、社会的評価を知ることが主であり、教材研究の時間もままならない、ゆとりのない日々の中で、敬遠されがちであったのは事実である。そんな中、短時間で楽しみながら行える鑑賞の授業も研究されている。芸術文化を愛好していくための基礎を、楽しみながら学べ、教師が自己開示することにより、生徒も自分を開き、友達とコミュニケーションをとりながら学習する場面より、生徒理解を深めることも可能である題材として試みたいと思い、設定した。

２　研究討議の内容

①　質疑応答

Q　今日の授業とは別に単体として鑑賞の授業を行ったことがありますか？

A　以前、「人物画」を描いたとき、生徒の作品を鑑賞の材料として鑑賞の授業をやったことがあります。

Q「短時間の鑑賞」ということで、効果的であったのは他にありますか？

A　他にはありません。アートゲームについては今回の授業をやるために考え、自分の学校でも1年生を対象にしてやりました。

Q　この授業でここまで行けばというのは？

A　今回の授業は、理想的な形で行えたと思います。楽しく鑑賞ができ、グループ行動もでき、グループ内でのコミュニケーションも図れていたと思います。

Q「グループエンカウンター」というのは、訓練しなければできないと思いますが。

A「グループエンカウンター」はいろいろな学校で経験し、教育相談の中で知ってとりこになりました。美術の授業で取り入れる機会は多くありませんが、総合的な学習や道徳の授業で活用しています。

②　感想

・ポストカードを使ってのカードゲームをエンカウンターと結びつけた鑑賞の授業という工夫で子どもたちの興味と子たち同士のコミュニケーションを引き出した点が非常に良かった。

・生徒がスムーズに心を開いていて、グループ活動ができていて良かった。

・子たちの「ポストカードを選ぶ」「カードのつながりを探す」などコミュニケーションをとりながらの活動が良かった。

３　授業者の言葉

以前、「短時間で楽しく鑑賞できる授業」を研究していた板橋区の方からカードゲームを教えてもらい、それとグループエンカウンターを結びつけて鑑賞の授業ができないかと考えて、今回この題材を考えました。担任の先生から「あまり反応がないクラスです。」とお聞きしていましたが、この授業では、反応も良く、生徒同士のコミュニケーションも取れており、すごく楽しく授業ができました。子どもたちの感想の中に「美術は苦手だから、美術の授業は嫌いだったけど、この授業は楽しかった。」などの感想があり、やって良かったと思っています。課題としては評価をどうするか？という点です。

４　助言者の言葉

文京区の生徒たちは、豊かであり、反応も良く、自分の感じたことを素直に出していて、いい授業展開だったと思います。美術の時間数は少なく、鑑賞の時間を独立して取りづらいが、ここでは1時間まるまる取り上げ、内容も充実していたので良かったと思います。鑑賞の課題としては、3年間の授業の中で、鑑賞と表現をどう組み立てていき、鑑賞をどう位置づけるか？ということと、授業された大島先生も言われていました評価をどうしていくかだと思います。

公開授業　　２年　１組

二点透視図で「迷路をつくる」

■ 授業者　瀬田宜正　北区立 明桜中学校
■ 助言者　永関和雄　町田市立 町田第三中学校
■ 司会者　小川永祐　北区立 稲付中学校
■ 記録者　吉原知恵子　北区立 堀船中学校

１　題材のねらい

・ 対象に陰影をつけて、立体感をだし、平面の中に空間を作り出していく表現力は、自然に身に付いている生徒もいれば、なかなか困難な生徒も多い。その点透視図は技法を覚えることで表現できるよい点がある。
・ 画用紙の中に立体感や遠近を表現させ、ほぼ全員に同様の完成度を味わわせるためには、透視図のように、ある程度方法を飲み込めば、遠近感を表現できる方法は都合がよい。
・ 画一的で没個性ではあるが、逆に、これまでにないクリヤーな画面を新鮮に感じる生徒もいる。画用紙の中の遠近法の一つとして、二点透視図を学習し、奥行きのある表現に興味を持たせたい。

２　研究討議の内容

①題材について

・ 現在、一点透視を教えている。これから二点透視に入るところなので、とても参考になった。
・ 技術の製図を思い出した。技法や知識があってこそ発想があると思う。美術の基礎基本を教えていただいた。
・ 生徒が終わった後「続きをやりたい」と言っていたので、生徒の知的好奇心を、充分満足させていた。「迷路」は子供の能力に応じてできるので、今後、私の授業にも取り入れたい。
・ 「立体感のある構成」を教えているので、「ここでは三つの線だけしか使わない、垂線と、二つの消失点に向かう２本の横線のみ」という言葉が印象に残っている。（迷路の）題材を限定し、技法もある程度絞った方が、作業の能率が向上するのかと思った。
・ 参考作品が素晴らしく、導入の言葉が良かった。配色も示されていて、限定されているので、その方が効果的で良かったと思う。

②評価について

・ 実際の迷路を作成させるのか、迷路らしく見えるように作成させるのか、その際評価の観点はどうなるのか。
・ デザインを優先させる、従って、実際の迷路よりも美的に構成させるような指導をする。確定的な評価の基準は示しにくいが、構成、彩色、着彩の技術を総合的に評価していく。
・ 【評価の観点】指導案より引用
　① 基本の三本線の描き方を理解できたか
　② 各パーツを描けるか
　③ 基本要素を取り入れて、迷路が描けているか。
　④ 迷路を意識した構成になっているか。

⑤ 作業の手順は指示通りに行えているか。

⑥ 着彩の技術と工夫はできているか。

３　授業者の言葉

Ｔ１　生徒の発想力を過信しないで、ある程度素材を与えてから、段階的に発想する力を導いていきたい。本授業は発想力を重要視するよりも、ほぼ全員が、同様の表現のレベルまで到達できるように、透視図の方法を習得する点に主眼をおいている。

Ｔ２　２時間分を１時間でやれたことは驚いている。机間巡視しながら、全員が終わるまで待って、次の段階へ進むようにしている。全員が同様の「遠近感」を表現できた達成感を味わえるように、授業を完結させたい。この透視図は１学年の３学期に毎年取り入れている。

４　助言指導

①　永関和雄先生から

・　指導案は、作業目標を高く掲げすぎて、計画に無理がある。「公開授業」でやむない側面もあるが、迷路の壁を立てるあたりまでが無難であると思う。

・　この題材は、色彩をつけるにも時間がかかる。８～１２時間の題材である。美術科に与えられた年間 35 時間という時間を考慮すると、やや時間がかかりすぎる教材であるかもしれない。

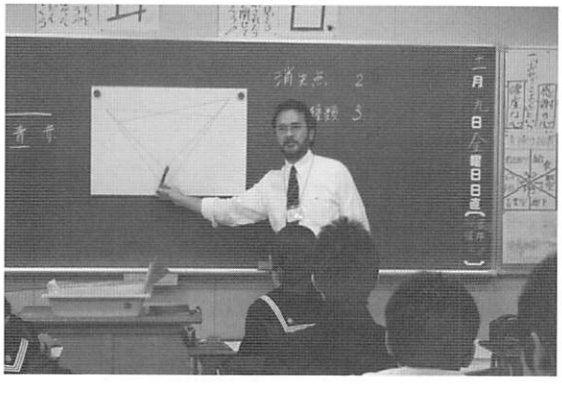
・　必ずしも、色彩を使わなくても、鉛筆のトーンでも表現は可能であるので、時間の短縮を考えるならば、一考の余地があると思う。

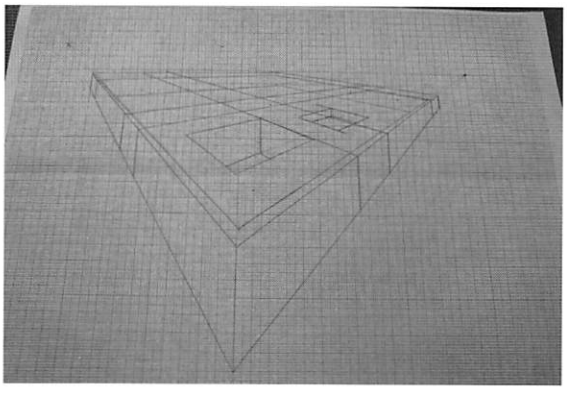
・　三本の線に限定して、表現させるということは、この時期の子ども達の表現欲求を刺激し、知的好奇心を大いに満足させることができたと思う。その点で適切な教材でもある。

・　「穴をあける」製図の指導までは無理があり、じっくり取り組ませることができなかったが、授業としては良かった。緊張感があり、知的好奇心を満足させられた。

・　指導教官が本授業の中で、最も言いたかった「二つの消失点を結ぶと、地平線になる」というまとめの部分は、本来なら、もっと劇的に、時間をかけて味わわせることができれば、さらによい効果を生んだと思われる。

・　子供の発達段階に合う良い内容の授業であった。





公開授業　　２年　２組

アートの後のＡＲＴ

■ 授業者　川村清史　板橋区立高島第三中学校
■ 助言者　中村一哉　府中市立府中第五中学校
■ 司会者　住岡美智子　板橋区立高島第二中学校
■ 記録者　樋口　久　板橋区立志村第三中学校

１　授業者自評

鑑賞に表現を兼ねた複合題材で、コラージュ的要素が強いものである。資料を見て生徒たちがまず感じ取り、作品を選択し、それを表現につなげて自分独自の作品に仕上げていく。全体的に生徒の嗜好や表現傾向が似てしまい、もう少し時間をかけて個性を引き出した方がよいと思う。

２　研究討議の内容

・　まず調べてみよう。次に表現してみようという題材設定のやれる範囲で最善だったと思う。鑑賞や表現をそれぞれどこまでとするのか。最終的に鑑賞にするのか表現にするのかがむずかしいと思う。
・　生徒は、作品からイメージが広がりやすいものを選んでいると思う。「鑑賞」というより絵を仕上げていくことを考えた生徒もいるのではないか。
・　作品をまず見る。次に選ぶ。これも「鑑賞」につながっているのではないかと思う。説明だけの鑑賞の授業ではない授業だったと思う。

３　授業者の言葉

表現活動を通して鑑賞を深めていく。更に、生徒自身が選んだ作品の本来の意味を調べるとより深まっていくと思う。また、お互いに発表し合う機会をつくったり、最初に作品を選んだ時のインパクトを再確認する機会ができるとよいと思う。また、自分で絵を描いていきながら作品をさらに見ていくのも深まっていくのだと思う。

４　助言指導

この授業においては、「鑑賞」というより「表現」でとらえた方がよいと思う。鑑賞においては２～３学年では、知的な理解も求められる。表現に求められるものと鑑賞に求められるものとは違いがある。

今回は作品そのものを土台として表現している。発想することは中学生にとって苦手な部分でもありその訓練は必要である。発想や構想の能力をどうつけていくかが大切である。授業では写真を選んで自分でどのように発想していくかというものだった。選ぶというところからスタートしたのが良かった。教師側が何を求めているのか、どのような写真を提示するのかがポイントになり、それによって造形要素が引き出される。

また、色鉛筆を使わせたり、授業内に生徒同士で作品を見せたのもよかった。

留意点として、著作権の問題がある。これは生徒にきちんと指導する必要があり、よい機会にもなる。

公開授業　　３年　１組

塑造　粘土で葉っぱをつくる

■ 授業者　石井悦夫　　文京区立第一中学校　　■ 司会者　永見久美子　　文京区立第七中学校
■ 助言者　平内 利光　　大田区立馬込東中学校校長　　■ 記録者　春日 弥生　　文京区立第六中学校

１　題材のねらい

・　私たちを取り巻く環境は刻々と変化している。郊外などを見てみると、森がいつのまにか消え、マンションや道路に変わっていたりする。幸い茗台中の所在する文京区は、２３区のなかでは、新宿区の次に木の数が多いと聞く。本題材でテーマを「葉っぱをつくる」としたのは、単に塑造材料としての葉っぱというだけでなく、自然のなかで育まれてきた「いのち」としての木（葉っぱ）に注目させたいからである。普段身近に何気なく見ているさまざまな木、しかも同じ形をしているものは２つとない葉っぱとの感性的触れ合いを通して、葉っぱの美しさや感触の優しさなどを感じながら塑造させる。それによって自然と共存するような誠実な心情をもって制作できることを期待したい。

２　研究討議の内容

Ｑ：シルククレイの粘土を利用していましたが金属板の粘土板の方がよいのですか。

Ａ：のべ棒を使うため台が必要で、今回の研究授業のためその台に生徒の名前を貼り付けるために給食の廃品のお盆を利用しましたので、**普通の粘土板でかまいません。**

Ｑ：来てよかったです。授業時数が削減され中学３年生で完成度の高いものを求めるのは至難の業と思っていますが、石井先生の実践では身近な素材をすぐ教材化されて観察する力や、取り組む姿勢が一気に仕上がっていることが素晴らしいと思いました。３年生のまとめとして、先生のお考えとして完成度の高いものを求めているということでしたが、その他に題材との関連など三年間を見通したものをお考えでしょうか。

Ａ：三年間を見通して絵画的なもの、工芸的なもの、彫塑的なもの、デザイン関係、最終的には鑑賞、その中から一つか二つを選び、授業に取り入れています。一中では彫塑では野菜を制作しています。

Ｑ：完成度を高めるということですが、どうしても時数が足りずにおざなりになるところを、先生は小作品を上手くまとめて意欲的に取り組ませていましたが、１年、２年、３年と段階的な彫塑の題材はありますか。

Ａ：段階的な題材はなく彫塑は１年生だけです。以前はやっていましたが今は時間的な問題もあり、一通り全体的にやっています。完成度の高いものを目指していますが，幼稚なものやマンガ的ではないものにならないよう、妥協しないでやるのはきついです。しかし時間はかかりますが完成度の高いものを目指して取り組んでいます。

３　授業者の言葉

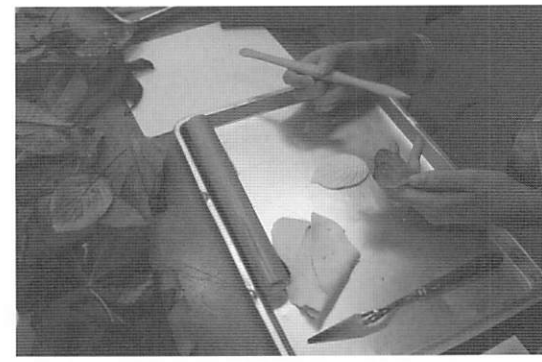
授業準備はしっかりやってきました。授業で使う「葉っぱ」も様々な場所から集めてきたり、また、自分で制作した参考作品も用意してきました。この題材は、粘土で葉っぱを作るのに１時間、

色つけに１時間、の２時間の題材です。授業時数の関係で題材を選ぶのが大変ですが、この題材は短時間教材として、ちょうど良いと思います。内容としては１，２年生の方がふさわしいように思いますが、今回の研究授業で生徒は意欲的に一生懸命に取り組んでくれました。まずまずの授業であったと思います。今、美術の授業時数が少なく細切れのような授業で作品が作りにくいですが、完成度の高い内容の濃いものをと考え授業に取り組んでいます。文京一中の生徒も体を動かすことが好きで、勉強よりも技術や美術の授業に生き生きと取り組んでいます。

４　助言指導

平内利光先生から

楽しい１時間でした。特に先生の準備が素晴らしく生徒の興味関心も高まったと思います。すぐそこにあるものを題材にして、ここまで完成度の高い作業をさせるのは素晴らしいと思います。彫塑は触覚、絵画は視覚と分類されていますが、触覚という小さい頃に体験したことを、このようなことから蘇ったのではないでしょうか。また、先生が準備した苦労は生徒には見ただけでわかり、話も上手なので生徒も親近感を持ったと思います。参考作品がたくさんあり、生徒にはプロの作品を見て「すごいな」という感じを与え準備としては素晴らしかったと思いますが、できれば生徒の作品もあった方がベストではなかったでしょうか。導入では、教科書を少し利用しても良かったのでは。ただそれよりも、この１時間の授業でやることが明確にわかることが大事で、生徒も教室に入ったところで表情が違ったように見え、やる気がおきたのではないでしょうか。展開では、何をするのかがよくわかり、楽しいと感じこれは出来そうだと、興味関心を持てたようです。内容は１，２年向きかもしれませんが、３年生の進路の時期でモヤモヤの解消によかったのではないでしょうか。途中、粘土の上に「葉っぱ」を置いて型にしようとする生徒に「みてやる」の指導は適切でしたが、「みてやる」という観点では観察の時間がもう少しあればよかったと思います。まとめでは、制作したものをお互いに鑑賞しあう指導はよかったです。しかし一番よかったのは、全員が完成させたことが素晴らしかったですね。次回は彩色をする予告でしたが、彩色の後、どうするのかを知りたいです。単発でやるのか、膨らませてやるのか授業をするうえで、また生徒の目標を持たせるためにも大切であると思いました。例えば全員の作ったものを木の心棒につける、葉のように飾るなどしてみると違った角度で鑑賞ができると思います。生徒の居場所は教室の自分の机一つですが、自分の分身である作品が、いろいろな所にあるのはうれしいのではないか、そんなところを考えてもらえば、学校の中、生活の場に美術が広がっていき、他の先生にも見てもらえて認めてもらえるなど、アピールも必要だと思います。



公開授業　　３年　２組

「見えてくる物語」ラスメニーナ／ベラスケス

■ 授業者　高野　朱未　板橋区立赤塚第三中学校　　■ 司会者　倉科　幸雄　板橋区立第五中学校
■ 助言者　大野　雅男　西東京市ひばりが丘中学校校長　　■ 記録者　佐藤　真理　板橋区立志村第二中学校

1　題材のねらい

① 対象をじっくり観察し、描かれている事実を読み取り、発言をたくさんさせる。
② 与えられたヒントや自分の知識・経験を元に、描かれている事実から想像し、自分なりに場面の物語を感じる。
③ 考えていく上で必要な情報や知識を認識し、探求していく気持ちを持つ。

2　授業者自評

・ 普段の鑑賞の授業のかたちをベラスケスにあてはめた。
・ 絵は自由にみて良いこと、四角い絵をあえて四角と認識させることの大事さをわからせたかった。
・ はじめて会う生徒との授業だったので、発言を引き出させたかった。
・ どのクラスでも押さえたい共通の事柄は黒板に掲示し、生徒の発言から広げていく授業のため内容が多く、ラストは駆け足になったところが反省点である。

3　研究協議の内容

感想：信頼関係のない、はじめて会う生徒なのに授業に引き込めていたのがすごいと思った。
　　生徒同士の会話には、もっと見方を深めているものもあった。

Q．板書の意図を教えて欲しい。
A．必ず押さえたいキーワードを色画用紙で掲示していき、最後に出てきた項目が、生徒と一緒に読み取ったこととしている。
Q．どの作品の鑑賞でもキーワードは一緒か。
A．ほとんどが共通で、この作品は室内なので＜空間＞としたが、外なら＜環境＞＜周りの様子＞などに変えているし、生徒の発言次第では造形要素より広いものにも発展させている。
Q．キーワードでいろいろな授業ができる中、なぜ、今日ベラスケスを選んだのか。
A．ピカソがこの作品を基に描いた作品を見てからは、自分が一番感動できたから。

4　助言指導

・ 鑑賞の授業で、生徒に何を考えさせたいのか？「見えてくる物語」という題から、絵の背景まで追求する授業になるだろうと思えるのが良かった。
・ 美術館に行っても１分ぐらいで通り過ぎる１枚の絵を、じっと見るのは美術の授業だけなので、絵を楽しむ方法を提示できているし、キーワードがあることが生徒の発言意欲への良いアプローチとなっていた。

公開授業　　３年　３組

ちぎり絵クロッキー

■ 授業者　土田　貢司　　東久留米市立大門中学校学校
■ 助言者　安藤　聖子　　稲城市立第一中学校
■ 司会者　佐藤　真理子　　板橋区立加賀中学校
■ 記録者　髙﨑　美也子　　杉並区立高井戸中学校

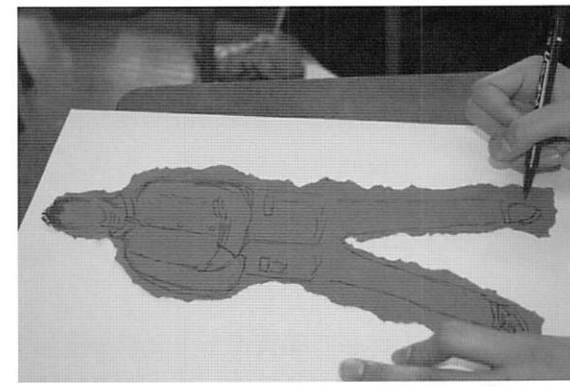
1　題材のねらい

・　授業の中で毎回5分程度の人物クロッキーを行ってきたが、「紙をちぎってクロッキー」をすると楽しいのではないかと思い実践してみた。
・　八つ切り色画用紙を、人物の形にちぎり白の画用紙に貼り、再びペンなどでクロッキーを行う。
・　簡単で、しかも、楽しく生徒たちが真剣に取り組む。50分の中で鑑賞も行うため、クロッキーの時間は7分に設定した。

2　研究討議の内容

見学者からの意見

・　絵の苦手な生徒は、クロッキーをしても大きく描くことができない。しかし、ちぎり絵の場合大きめにちぎっていくこともあり、絵が小さくならなかった。また、ちぎっていくときも、相手の姿をよく見て形を認識しながらしているのがよく分かった。
・　クロッキーやスケッチを授業の中に取り入れて入るが、「嫌い」「かけない」という生徒も多く、継続する事が難しい。今日の授業では、終わったあとの鑑賞の時間に生徒それぞれが満足していることが感じられた。また立ち去りがたく、次のベルが鳴っても見ている生徒がいた。
・　色画用紙をちぎっていくため、大体のバランスが取れる。人間のバランスをきちんととって描く事が生徒にとってそれほど重要なことなのか、と考えるときもある。
クロッキーなど素描の積み重ねは大切である。
・　時間の少ない中で製作させているため、何かと生徒を急がせている。今日の授業のように、生徒自信が達成感を感じる授業が大切だと思った。



3　授業者の言葉

・　この課題に取り組んで特に困難を感じたことはない。楽しく行うことを主眼にしている。

4　助言指導

①　安藤先生から

今日の授業を拝見して感じたのは、鑑賞の後、教室から出て行った生徒がまた戻ってきて、作品を見直すという行動に見られるように、大変達成感のある楽しい授業でした。
クロッキーやスケッチは基礎的表現方法であり、積み重ねが必要ではあるが、具体的にどこまでできればよいなどの具体的な設定はない。また、最近の傾向として、じっくり観察するという姿勢は小学校時代からすでに持っていない生徒が多い。

しかし、昨今、スケッチやデッサンのノウハウ本が多数出版されている状況からも分かるように「かけたらいいなぁ」という気持ちは一般に共通のものではないか。
美術という授業が必修で残されている理由はそのような要求はもちろんのこと、いかにコンピューターを駆使しても、形や色を使いこなすスキルがなくては十分に説得力を持ち得ないということであろう。

分科会

分科会１　　つくりだす喜び

■実践発表１
提案者　木内美香子　香取市立大倉小学校　千葉県
助言者　小林　敏夫　多古町立中村小学校　千葉県

■実践発表２
提案者　三浦百合子　中央区立泰明小学校　東京都
助言者　松本　健義　上越教育大学准教授

■司　会　緑川　敏夫　中央区立明石小学校　東京都
■記録者　常川　英子　中央区立城東小学校　東京都

１　提案１
～児童一人一人が成就感を味わうことのできる描画指導について～

分科会のようす

①テーマについて

絵に対して苦手意識をもち、絵を描きたがらない子や、「描けない」といって活動を途中でやめてしまう子など、意欲に個人差がある中で、子どもたちが、「自由に思いのまま」絵に表すには、低学年の段階において、基礎となる技能の習得が不可欠である。特に、苦手意識をもつ子どもが多くいる水彩絵の具を使った活動においては、適切な題材を選び、ねらいや指導内容を明確にした指導のあり方を探っていった。分科会テーマである『つくりだす喜び』を、自己実現（自分の思いや夢を形や色に実現する）の過程で味わうことのできる楽しさや喜びと捉え、本研究では、創造的な技能（イメージを表す力、基礎的な技能）の育成を目指した。

１年生「いもほりしたよ」

②実践について

創造的な技能を育てるために、池田栄先生の描画指導方法を参考にして、以下の点に留意した。題材の選択、画用紙の選択、水彩絵の具を扱う際の基礎的技術、書き表す順序、人物の動きを捉える手だて、作品全体のイメージを捉える手だて、イメージの振り返りの点である。

１年生では、絵の具の扱いに慣れるために、クッキーやイチゴ、マット遊び・鉄棒遊び、芋ほりの様子などを絵に表した。始めはあまり集中できなかった子どもも、友達の作品を見て、次第に集中力を高めた。

鬼ごっこの様子を表す活動では、体の丸みを表現するために、紙を手でちぎった。体の動きが大きく表れるように工夫して並べさせた。

子どもの思いやねらいに合った題材を選択し、友達の作品を鑑賞させたことで、子どもたちに意欲の高まりや自信が見られるようになった。しかし、画一的な作品になりがちなので、学年の発達段階に応じて表現の選択肢を広げ、自由な思いを引き出すことができる手だてや技法について、研修を進めていきたい。

２　助言１（小林　敏夫先生より）

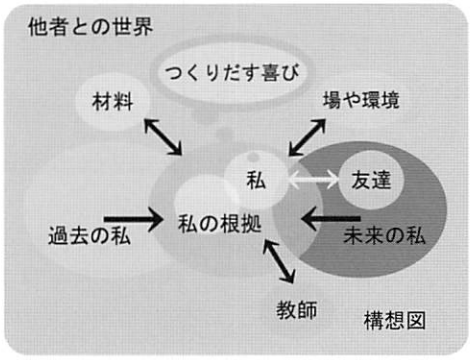
図工のねらいはどこも同じだが、指導方法には地域性が表れるため、表現活動の内容は様々である。香取市の場合、子どもたちの思いが思った通りに絵に表れるような指導の工夫をしている。指導の際に大切にしたいことは、教師の子どもたちへの言葉かけや、成長に応じた指導の工夫である。図工教育を通して、情緒的な面を伸ばし、“野に咲く一輪の花を美しく思う心”を育んでいきたい。

２年生「夏の思い出」

３　提案２
～つくりだす喜びから生きる力を育む～

本研究では、学習のようすを子どもの側から観察・記録し、その場の出来事を分析しながら考察することを通して、学習のねらいや内容の改善を図ってきた。

７月の研究授業『色のおつけもの』では、始めは小さなものを染めていた子どもたちだが、序々に活動が大胆になっていった。「これが一番うまくいったかな」と自己評価をしたり、膝をたたき、にっこりしながら「いいこと考えた！」とつぶやいたり、友達に笑いかけたりする姿から、その子どもらが、『つくりだす喜び』を味わい、材料や友達とかかわることで、今と自分との関係をつくりだしていると捉えることができた。



『つくりだす喜び』は、与えられるものではなく、子ども自らの出会いや発見によっておのずと沸き上がってくるものなのではないだろうか。教師が教える前にまず、子どもから学ぶ姿勢を大切にしていきたい。

３年生「色 いろ そめーる」

４　助言２（松本　健義先生より）

子どもたちが、校庭で自分の染めたものをうれしそうに干す姿は、まるで生きていることの楽しさを教えてくれているようだった。ある男の子は、手裏剣の形に折ったものを染めて広げると、２枚の違う染め物が出来上がることに気づき、そのおもしろさを感じ取っていた。

活動の中で、子どもが幾度となく跳びはねたり、はしゃいだり、軽く弾んだりする瞬間がある。これは、新しく自分の中に働きかけてくるものを受け止めていたといえる。自分がものをつくり変えるだけでなく、材料や友達とのかかわりを通して、自分をもつくり変えている。‘触ってみたい’と思う気持ちが芽生え、自然な姿でつくることができたとき、子どもは言葉にならない世界を表現していく。そして、自分をよりよくする力を身につけていく。

５　研究協議

２年生「ふわ・くる・ふわり」

- 『つくりだす喜び』という共通テーマがあるものの、東京都と千葉県の研究内容にずれがあった。東京都全体の流れが読み取りづらいところもあるが、都図研の研究を参考に、地方でも研究を進めていきたい。
- 造形あそびの題材が増え、過程重視になった反面、保護者や担任に受け入れてもらいにくい面もある。大人が体験できる機会をつくったり、図工だよりで活動の様子を伝えたりして、発信していくことが大切である。
- 『ふわ・くる・ひらり』では、‘つるす’行為と感触を楽しむ行為から、発想を広げていく方法がとても参考になった。親子でやったらもっと楽しかっただろうと期待を持たせる題材であった。
- 中央区から来た転校生が、新しい学校で周りの子どもに新しい発想をもたらしてくれている。豊富な造形体験をしてきたからこそ発揮できる力だと思う。子どもには、何回もチャンスをつくり、繰り返し教え、様々な経験を積ませることが大切である。
- 一つ一つの驚きが、子どもたちの感受性を育てていく。表現から入るのではなく、色々な体験をさせたうえで表現させていきたい。
- 自分・他者・ものという不連続なものが、かかわり合って連続したものになっていくときに、つくりだす喜びを味わうことができる。また、‘よろこび’の在りようも一つだけではない。など

分科会２　他者や世界とのかかわり

■実践発表１
提案者　餅 和子　台東区立金曽木小学校　東京都
助言者　小林貴史　東京造形大学　東京都

■実践発表２
提案者　中塚洋介　長野市立三本柳小学校　長野県
助言者　黒澤増博　塩尻市立桔梗小学校　長野県

■司　会　安部啓齋　台東区立平成学校　東京都
■記録者　保坂亮子　台東区立台東育英小学校　東京都

１　提案１
～台東区図工部研究テーマ「子どもの世界を広げよう」とかかわり合いとの関連について～

子どもの世界には「内面世界（見方や感じ方、イメージ、価値観）」と「外面世界（もの・材料・用具、場所や環境、人）」がある。造形活動において全身の感覚を働かせてそうした外面世界とかかわっていくことは今までの自分にはない新しい意味や価値に出合うことであり、そうした出合いが刺激となって子どもの活動や表現の可能性は豊かに広がっていく。そしてそのことが自己の内面世界をさらに深め広げていくことになる。そうした二つの世界を行き来しながら、子どもは、自分らしさを感じたり新しい自分を創り出したりして表現する喜び、生きる喜びを見いだしていくと考えた。授業における造形活動でのかかわり合いの具体的な場面としては非言語的な場面や伝え合う場面があるが、どちらの場面においても①友達の活動を真似たり参考にする。②材料を見あい交換する。③友達や自分の表現のよさを見つける。④お互いの表現に入り込みつくりつくり替える。等が立ち現れる。教師はこうしたかかわり合いが自然に発生するように内容や方法をディレクトする必要があると考え、本研究では異なるかかわり合いの姿を３つの授業で提案した。

みんなでつくって！！キラキラトンネル（１年生・幼稚園）

３つのかかわり合いを重点においた。①異学年（幼稚園と１年生）…幼稚園と１年の小グループをつくる、材料の数の制限、お互いの作品を見る時間を設定する等の工夫をしたことで材料の交換をしたり発想や活動が広がった。②世界とのかかわり…大きいトンネル、教師の扮装、音楽等の工夫で夢の世界に存分に浸らせた。③教師と子どもとのかかわり…変身したことで子どもにとって身近な存在になった。

夢工場からの贈り物（４年）

顔の見えない相手のためにプレゼントをつくり交換しあうというかかわり合いの授業であり、教師はそれをつなぐ郵便屋さんである。他校と交流することでモチベーションがあがり、相手がどんな人かを考えながらその誰かのために作品をつくるという行為は新鮮だったようだ。また、欲しいものを頼んだら自分の考え以上のものが届けられてうれしいと感じたり、自分以外の発想に触れることができた。

大地からの贈り物“土”で…（６年）

収集した土を使って絵を描いた。様々な地域の土を見て色のバリエーションや美しさを感じとらせた。長いロール紙を四角く設置し、材料の交換や活動を見合ったり表現をつなげたりできるようにした。テーマを“木”にしたことで、根っこをつなげて描くという自然なかかわりが生まれた。また、表現をつなげず自分だけで活動する子もいたが、これは友達の活動を見たからこそ自分らしさを感じ自分の表現にこだわったという、かかわり合いで生じた姿であると捉えた。

成果と課題

この３つの授業を通して、子ども達は、異なる学年や集団と活動することでつくる意欲が高まったり、作品を通して他者理解をしたり、気付き・発見から刺激されて取り組んだことが本人の予想を超えた活動になったり、材料への概念が変わったりといった変容が見られた。それは外面世界とかかわることによって新しく価値あることを掴みとり、自分自身が変わっていくことの気付きとなって、つくりだす喜びや生きる喜びとなると考える。

２　助言１（小林貴史氏）

かかわり合いを我々がどう捉えるのかをしっかり見つめる必要がある。かかわり合いのテーマには異学年交流・普段とは違うかかわり・普段触れない素材と出合う等あるが、大事なことはその先にあることである。そういう場や機会を持った時にどう子どもが営んでいるか、どう授業で変容したかを指導者

が見ていくことが大事なことである。例えば４年生のプレゼントをつくる活動ではプレゼントをもらったりつくったりすることにどういう意味があるのかを考える。プレゼントはなぜもらうのがうれしいのか、それは物理的なものだけでなくプレゼントしてくれる相手から届けられる心や思い・工夫など、ものの中に含まれているプロセスを感じることができるからである。こうした行為を通して喜びを共有できるのである。今日の活動は相手から思われている自分や、自分ってこういう自分なんだなということを感じることのできる授業だった。共有を通して相手を想うと共に自分自身を確認することができるのである。６年の土の授業では、自分が小さかった頃に粘土は土だよと言われてびっくりした体験があるが、こうした一つの気付き・発見を子どもに与えることが大事である。そのことによって子どもの目が開かれていく。

３　提案２
～豊かな感性を育む図画工作のあり方（長野市立三本柳小学校の実践）～

本校では学校教育目標の「仁：思いやりを学ぶ」を育むために図工における造形活動のあり方を追求してきた。遊び・絵本・玩具は美術の出発点であると考え特に高学年ではサブテーマを「思いやりの心を育む造形活動」とし、目的を明確にし、他者や社会とのかかわりを中心にした授業実践をしている。例えば厚さ２㎝の桂材を１年生が遊べるような玩具としてつくる活動（「心をとどけよう～木のぬくもりを生かした玩具づくりを通して～」）がある。「１年生に楽しく遊んでもらいたい」「安全に遊んで欲しい」といった具体的な願いを個々がもって活動したことは、つくることへの意欲となり、実際に自分がつくった玩具で遊んでもらうことは、自分の作品を媒介にして他者や社会に認められることになって成就感・喜びが深まったと考えられる。また、全学年共通の取り組みとして自分の作品や制作の様子を写真に納めた図工アルバム「みて・みて・マイアート」を作成しており、このアルバムの鑑賞を通して子ども同志や子どもと教師・保護者・地域との間にかかわりが生まれ豊かなコミュニケーション活動に発展することを期待している。今後の課題として①将来大人になった時、後付ができるように。②教師が豊かな感性を持ち続けること。③保護者や地域へ図工や造形活動のよさを発信していくこと。等があげられる。

４　助言２（黒澤増博氏）

三本柳小学校の実践には次のような特徴が見られる。①学校目標「思いやりの心」を育成することを図工との接点で研究している。②人とのつながりを大切にした図工展や図工通信・交流会等を行い、学校全体で意欲的にかかわっている。③異学年交流と図工をクロスさせ「思いやり」を育てる場を積極的に設定している。④木を加工した玩具に触れ、木のもつ素材のぬくもりや抵抗感を感じながら共に遊び、自分の生きた言葉を伝えあっている。中学校でもできた作品を使ってコミュニケーションしたいと考え、様々な交流方法を考えたり場を設定したりしている。人間形成として図工・美術などの造形教育は大切である。

５　研究協議

都図研と韓国との交流を実践中。言葉が通じなくてもものづくりを通した文化交流をしたいと考えているが、よい方法があったら教えてほしい。／算数等がひとつの形や答えに集約していくことを目指すのに比べ、図工のよさは自分の活動が想像力やアドバイスでどんどん広がっていくこと。この魅力をもっと発信していきたい。「みてみてマイアート」はそうした図工を発信する上でのよい取り組みだが、具体的にどのように実践しているのか。（→４月に保護者に伝え予算の了承を得てスタートする。）／長野県は専科ではないのに図工を中心にした研究を実践しており、東京も頑張らねばと感じた。／今日の実践ではメンタルを大切にしたり、素材を感じさせたり、どの授業も教師が何を大事にしているのかがよくわかった。６年の授業では、土はすでに日常ではなく他の素材と同じように新鮮だと思う。／地球を覆っている土を自分の手でほじくり返す体験は“土”が子どもの心にすとんと落ちる。土がきれい、何かになるとか教師がまず気付く感性をもつことが大事だと思う。／人とかかわることと素材や世界とかかわることを同等にとらえてよいのか。（→同等に考えてもよいと思う。素材のもつ力が子どもに働きかけてくることは人と人のやりとりに似ている。ただ人と人とのかかわりは相互にやりとりを継続していくことで変容する。）／長野県の実践のように最後は「思いやり」を育てるのが教育の目標ではないだろうか。今日の４年の授業を見て心を通わすような図工の授業のバリエーションや可能性を感じた。子どもの心が荒れてきているが図工で変えていけたらすばらしい。／子どもの思いはいろいろあり「かかわり」や「思いやり」といった耳ざわりのよい言葉で終わらせてはいけないと思う。かかわることによって結局は“自分が見える”ということをおさえることが大事ではないだろうか。／かかわりは異なる価値との交流である。今後の課題として、共感だけでなく、否定・反発という異感交流を考えたかかわり合いを通して、自分で自分を見つめていく力を考えていかなければならない。

分科会３　　日常にいきる図工

■実践発表１
提案者　桐敷　芳子　文京区立根津小学校　東京都
助言者　水島　尚喜　聖心女子大学　東京都

■実践発表２
提案者　森坂実紀人　群馬大学附属小学校　群馬県
助言者　坪田　欣弥　桐生市立昭和小学校　群馬県

■司　会　仙北屋　崇　文京区立汐見小学校　東京都
■記録者　船田　京子　文京区立関口台町小学校　東京都

１　提案１（文京区）

～つくりだす喜びから日常に生きて働く資質や能力を考える～

文京区図工部では、このテーマを、「図工を教える」授業から「図工を通して教える」への授業の目的の変化と捉えた。授業での子どもたちの言葉、「みて、みて、こんなのつくったよ」「いいこと考えた」「もっとやりたい、やってみよう」などに表される、つくる楽しさを味わい、自ら発見し、更に追求していくような子どもたちの力が、図工の時間だけに発揮されることを期待するのではなく、毎日の様々な課題に対しても同様に発揮されることを期待しているからである。

そこで、図工を通して子どもたちに何を教えるのか、どのような力をつけたいのかを、授業実践を検　討しながらつかんでいった。それが **「子どもに育てたい７つの力」** である。これらの力は、図工の授　業で養いたい大切な資質や能力であると同時に、日常で生きて働く力の大事な一部であると考えた。

- ○ 造形を楽しむ力
- ○ 互いに認め合う力

心の開放と自己理解・相互理解

- ○ 自分の目的や主題をもつ力
- ○ 試行錯誤する力
- ○ 考える力

自分らしさや課題を追求・発見する力

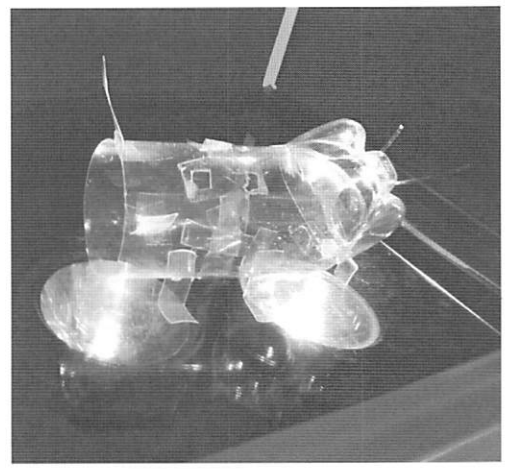
- ○ 創造的に表現する力
- ○ 体全体で感じとる力

造形的な見方、考え方、感覚をもち、表現する力

しかし、授業実践を進めるうちに、全ての力を一度につけられる授業を行うのは難しいと分かった。それぞれの力を育てるには、それぞれに即した内容や方法を選択していく必要があり、その時、子どもの実態をよく見つめ、子どもたちに合った方法で授業を組み立てていくことの大切さも実践を通して理解した。図工を通して教師は、子どもたちの成長を、共感を持って見守る存在でありたいと思う。

今後の課題として、①「育てたい７つの力」の補充・整理
②「育てたい７つの力」のねらいを網羅したカリキュラム編成
③「自分ならどう育てるか」の問いを持って授業に臨む姿勢
の３つを念頭におき、さらに研究・授業実践を続け、深めていきたい。

２　助言１（水島　尚喜教授）



「日常に生きて働く力」、すなわち、教科書や教室の中だけの学力ではない学力が求められているのは、図工科に限らず、教育全体の今日的な傾向である。エデュケーションするアートにおいては、造形・所作を通して人間が人間となっていく。

「７つの力」は、活動している子どもたちの言葉からの実感である。例えば、今日の授業中、「すげ～！」という言葉を何度も聞いたが、このような言葉も体全体で実感したものの中から出てくるものである。さらに、自己と他者（世界・社会）のつながりに焦点を当てて整理していくとよい。

図工は、教師が子どもと共にカリキュラムを精選していくことができる数少ない教科の一つである。構造的・発展的な「先生カリキュラム」ができることを期待している。

３　提案２（群馬県）
～明かりのある空間づくりを通して（５年生の実践）～

図工の授業が楽しいと感じている子どもたちは多いが、遊び感覚だけでは日常に生きて働く力はつかないし、そういった能力が培われる教科として理解されないだろう。また、単にものづくりだけでも日常に繋がらない。そこで、実生活を意識した「ものづくりから空間づくり」へ発展させ、作ったものをどこに飾るかといった、実生活を想定した発想・構想をするように授業を組み立てた。

空間を意識させる具体的な手だてとして

①家の写真を撮って発表し合い、居心地の良い空間を見つける。
②裸電球を使って、明かりの良さについて話し合う。
③実際に②を置き、写真を撮って検証する。

ことを行った。

作品はテラコッタ粘土での「板づくり」を活用し、様々な角度から見て好きな形を作り、焼成した。制作後は家庭での置き場所を色々と試し、発表の場で「暖かい気持ちになれる。」「不思議な感じになる。」など、子どもたちが自分の思いを語った。

この題材を通して、子どもたちは日常の生活を楽しくする美的環境づくりが自分なりにできるようになった。今後、さらに生活空間を見直す題材や、日常にあるデザインをヒントに、自分がやりたい活動をみつける題材を開発していきたい。

４　助言２（坪田　欣弥先生）

いまの子どもたちは、現代社会を反映して、流行に敏感ではあるが、豊かな情操が身に付いているとは言えない。ものや情報があふれている中で、なにを、どのように子どもたちに伝えていくかが重要である。そういったことを踏まえて考えると、次のような疑問が見えてくる。

◆何故ランプシェードなのか
・実生活を意識させたいという教師の思いは理解できるが、例えば狭い家に住んでいる子どもたちには、はたして空間を楽しむ余裕があるのだろうか？
・「空間」というものは大人的感覚で、子どもたちにとって難しくはないだろうか？

◆題材として
・５年生の発達段階を考えたとき、目標設定や素材はこれでよいのだろうか？

しかしながら、技能面では子どもたちが満足しているのでこれで良いし、提案性も良いと思う。この活動が、子どもたちの成長のきっかけとなればすばらしい。

５　研究協議

評価について

・題材を通して、どのような力をつけるかを検討しているが、悩んでいるのは評価の方法。どう捉えていけばよいか。
・授業のねらいを絞っていけば、見えやすくなるのではないか。
・図工科の特性を考えれば、発想・技能は記号的に捉えられる。関心・意欲に関しては、デジカメ・ビデオ等を活用する。
・評価は、教師の支援を高めるためのものだと捉えている。
・評価は、子どもの良い所を見つけるためにする。

新指導要領を含むカリキュラムについて

・図工科におけるカリキュラムの必要性
→自分だけよくても、他の先生にはできない授業では、育てたい力が身に付かない。
・新指導要領の共通事項は以下の３点である。
①段階の位置づけ
②小・中の関連・系統性
③「領域」の整理
・図工の時間（時数）は現状維持。子どもたちのために良い時間にしなければならない。

「日常に生きる力」について

・「育てたい力」を、いろいろな方面から検討し、共通化することが大事だと思う。
・「日常に生きる力」＝世界的な流れである。日常は、日常ではない視点で考えないと見えてこない。視点を変えると楽しくなる。

分科会４　　私をつくる（私をつくる＝人間形成）

■実践発表１
提案者　森脇　勝美　千代田区立富士見小学校　東京都
助言者　岡本　昌己　元八王子教育委員会　東京都

■実践発表２
提案者　佐藤　　彰　伊東市立大池小学校　静岡県
助言者　根木　利和　伊東市立北中学校　静岡県

■司　会　長田　千春　千代田区立番町小学校　東京都
■記録者　高野ゆかり　千代田区立和泉小学校　東京都

１　実践発表１

テーマ　～私をつくる＝人間形成～

千代田区ではこのテーマを「作る過程で様々なこと（人・物・事）と関わり、試行錯誤し、自分との対話をしながら、自分らしさを発見し、困難を乗り越えながら成長すること」と捉えた。その時の達成感や自己肯定感は、次への活動のエネルギーを生み出す。次へつなげるエネルギーの連続を「要求トルネード」と名付け、「私をつくる」過程と考えた。

テーマと関連させて題材を決定するには教師も試行錯誤の連続だったが、すべての創造活動は「その子らしさ」の表出であることを再認識し、題材を決定した。本日の授業「箱　はこ　ハッピー」では、児童が箱の内側に思いを託し、箱や材料を集めたりしながら、自分の“こうしたい”と思う心と向き合い、試行錯誤しながら箱の中に「自分の世界」を作り上げていった。

授業づくりの視点

○様々なことと関わり、自分らしさに気づくことができる場や指導法の工夫
・材料との対話・・・材料体験を広げ、イメージをつかむ
・友だちとの対話・・友だちとの違いに気づく
・自分との対話・・・試行錯誤しながら自分らしさに気づく

○表現活動のよさや自分らしさを振り返ることができる場や支援の工夫
・カードの工夫（教師⇔子ども、子どもどおし、自分の振り返り）
・ビデオカメラに収め、振り返りや鑑賞、評価に役立てる

２　助言１

・いい導入だなと思った。１５分たっぷりかけて子どもたちの心を集中させ導いていく大事な場面だった。
・子どもの造形活動というのは自己表現、自己実現でなくてはならない。図工教育はあくまでも図画工作を通しての教育、人間形成だということを忘れてはいけない。そのために認めてやる、満足感・有用感を与えてやることが生き方の原動力になる。
・「絵を描く」ではなく「絵に表す」、「立体をつくる」ではなく「立体に表す」。「を」と「に」とでは大きな違いだ。何を表すかそこを大切にしなければならない。
・評価の４つの観点のうち、絶対に抜けてはいけないのが発想構想の能力。発想構想の力を育てることなしに図工の授業が成り立つのか。
・先生は「今日はこんなことをしよう」と投げかける。その後は子どもがこんなことやりたいなと思って材料や段取りも自分で考えながら取り組む。それが「自分をつくる」とうことかと思う。
・授業の中では対話がたくさんされていた。（先生と子ども　子どもと子ども）
・子どもたちが関わりあいながら教えあったり自慢しあったり・・自分の世界をつくりながら仲間との関係を深めている。個から集団意識ということも含めた人間形成である。
・図画工作の「図」は私の意図、「画」は私の計画、「工」は私の工夫、「作」は私が作る、ということ
・図工の時間、一番育てたいものは「表したいと思う心」だと思う。

３　実践発表2

テーマ　～発想力が発揮される瞬間～

かかわりの力で進化する「わたしの思い」

図工科では、とかく完成された作品の出来不出来で評価されてしまうことが多くあるが、できあがるまでに**子どもたちは数え切れない成長をしており、その過程での姿こそ、評価されるべき**だと考えている。

そこで「造形活動における自分の思い（発想の力）は、人とのかかわりの中で、深まったり広がったり、確かなものになったりするだろう」という仮説を立てた。

「発想・構想の能力」を発揮する場面には子どもそれぞれに時間差がある。最初に思い付いた発想を最後まで貫いて制作する子や、作りながら発想が広がり始める子、人とのかかわりの中で発想が広がる子など様々である。子どもがどの場面でどんな力を発揮しているか、そしてそれが作品にどんな変化を起こしたのかを追って検証した。

◆第４学年「ひみつのトビラ　ワンダーランドを作ろう」（１０時間）

◆内容　学校のどこかに「ひみつのトビラ」を作り、その中に自分が考えたワンダーランドを作る。

◆２人の児童についての変容のまとめ

「アドバイスカード」や「共同制作」などの「かかわり」によって、自分の思いを進化させていく様子がよく分かった。

◆わかったこと

・ひとりひとりの製作過程におけるつぶやきや活動を見逃さないことこそ、その子の成長を知るということであり、確かな学力を身につけることにつながることが分かった。

・子どもたちは小さな作品や活動の中にも、自らを成長させる力を持っている。そしてそれは人とのかかわり、物とのかかわりによって大きく左右され、進化していくことが分かった。

４　助言２

・「秘密のワンダーランド」というテーマは子どもには大変魅力的なテーマだったのではないか。

・一番大事だと思うのは、人間関係力、コミュニケーション力だと思う。教師との温かい信頼関係がとても大切だ。子どもどうしのかかわりの中でどう育っていくのか。また教師はどう関わったらよいのか。

・教師は子どものよさや、子どもの自尊意識を引き出していく、高めていく指導のしかたを大切にしていくことが大切だと思う。

５　研究協議

○材料について―「いつもこんなにたくさん用意するの？」

・今回特に多いとは思わないが、出し方には工夫が必要だと思う。子どもたちは自分のやりたいことに向かって材料を選んだりするわけだから、先生が用意しても気に入らなければ使わなかったり、自分で持ってきたり、いろいろ試行錯誤する。

・素材体験には個人差がある。いきなり全部出さずに少しずつ増やしながら材料体験をさせる。画用紙一枚で何が出来るかなと投げかけることもある　。

○担任の図工と専科の図工・中学の美術―それぞれのよさ・大変さ

・担任が図工をやると準備は大変。クラスによって出来栄えに差が出ないように気を使う。時間の融通は利く。またクラスの子は何に一番興味を持つのか、よく分かっているのは担任。

・専科の教師は大変多くの子どもたちを見ている。一週間に１回だが、その成長を何年間も続けて見ていくよさもある。

・中学は時数も少ないので自分の得意分野でやることが多い。昔はいい作品をつくらせたいと思ったが、今は子どもが楽しんでいることを大切にしている。中学で必要なのは社会性だと思う。互いに認め合う、みんなで作り上げるという体験も必要なのではないか。

○発想力と表現力のバランス

・発想は豊かなのだが表現がおいつかなかったり、発想は硬いけれど見栄えよく出来たりと、バランスが悪い子がいる。どういう指導をしたらよいか。

・それぞれ能力が違っていい。表現者になる人もいれば、鑑賞者になる人もいていい。図工・美術をきらいにならないで、好きでいてくれればよいと思う。

分科会５-①　体と心を働かせた造形活動

■実践発表１

提案者　玉置　一仁　北区立滝野川第二小学校　東京都
助言者　土佐　信道　明和電機代表取締役社長
　　岩﨑　治彦　東京都教育庁

■司　会　大畑　祐之　板橋区立高島第五小学校　東京都　　■記録者　高橋　香苗　足立区立大谷田小学校　東京都

1.「子どもにアートが生まれるとき　子どもスイッチ～子どもの造形と５つの接点～」

私たち図工教師は、図工の時間に子どもたちから表現が生まれて、作品や子どもたち自身が劇的に変化を遂げる瞬間を日常的に何度も見てきています。それは、まるで子どもの心の中のスイッチが、何かのきっかけでＯＮになり、電流が流れ出したかのようにも見えます。その時、子どもたちには一体何が起きているのか？子どもたちは、どこに向かっているのか？こういった経験は子どもたちに何を与えているのだろう？そういったことに大変興味をひかれました。そこから私たちの研究が始まりました。

子どもが表現するとき、そこには、「子ども」対「もの」という関係が生まれます。「もの」から子どもに刺激が入っていきます。子どもの心の中に何かが「パチッ」とひらめいて、子どもがものに対してアクションを行う瞬間なのです。子どもがものに対して「あ！」と思う瞬間です。「もの」と「子ども」の間にコミュニケーションが生まれる。そして回路を形成していく。こういうグルグル廻っていくやり取りがあると考えます。例えば、活動の途中で、活動がパタッと止まってしまい、考え込んでいる。ところが、何かにきっかけをつかみ、「よし！」と勢い込んで表現を始める。子どものこうした表現の流れが生まれる時には、「子ども」と「何か」が繋がったのだろう、子どもの心の中の回路が動き出したのだろう、と考えたのです。この一連の流れを私たちは「子どもスイッチ」というキーワードでとらえました。

私たちは、この「子どもスイッチ」が入るときには、閃きが生まれたのだと考えます。それは表現の回路が活発に動き出したということなのです。子どもが「もの」や「人」と出会い、感覚の回路を使うときには、子ども自身の体の中の「子どもスイッチ」がどんどんONになっていく時であり、それは自分を取り巻く、さまざまなものとの回路を形成しているときなのだ、と考えているのです。

ここで確認しなければならないことは、私たちが研究してきたことは「子どもスイッチ」であって、「大人スイッチ」ではない、ということです。「こういう指導の結果として子どもがこのように変わった」とか「こういう素材を与えたから、子どもの表現が多様になった」と、考えられがちであるけれども、図工という教科は子どもの視点に立つことが大切なのです。子どもの視点に立って、子どもは「どう見て」「何を感じているのか」を見取らねばならず、今、子どもに何がおきているのかを考えなければならないのです。私たちの願いは、子どもが世界のさまざまなことに自分から繋がりを求め、自分からスイッチをＯＮにできるように育つことなのです。図工は、そんな大切な役割を背負った教科なのだと考えます。

２　＜助言１＞　土佐　信道　明和電機代表取締役社長（アーティスト）

小学校の図工の時間は、ものをつくる時間ではないかと思います。学ぶと言うことは、外からいろんな情報を入れると言うことですが、受け入れることばかりやっていては、パンクしてしまう。どこかで穴を開けて、外に出さなくてはならない。今の子どもは視覚情報、聴覚情報、目から耳から入るものがものすごくあるのですが、それを吐き出す先が、ゲームのような小手先のものしかないことが、非常に危険だと思っています。ものをつくることは、総合力を働かせることが絶対に必要で、絵を描くにしても、技術だけではなく頭の中で物語を作っていたり、数学を使っていたり、力学的に考えていたり、いろんなことをやっていて、総合力なのだと思っています。

図工の時間と言うのは、とっても大事で、そこを塞がれてしまうと、子どもはほんとうにパンパンになってしまうのではないか。また変な方向に吐き出し始めるのではないかと考えてしまいます。「ウゲーッ」って・・。

３　＜助言２＞　岩﨑　治彦　東京都教育庁（指導主事）

いろんなところで「子どものために・・」と、常に「子ども中心に」と言われているのですが、ともするといつの間にか子どもを見失って、実態から離れてしまうときがあります。各区市で、それぞれ研究をされていますが、研究を進めれば進めるほど、だんだん子どもの実態から離れて大人の人間関係の調整をやっていたりする。出来上がった題材がごった煮みたいで、どこに子どもの姿があるのか、わからなくなっている。そういうことも時にあるのです。

研究局が、「子どもスイッチ」「子ども中心に」「子どもの人間形成を目指して」と、その視点で研究を進めてきていることは、すばらしいと思っています。図工の時間に子ども達に何が起きているのかを一番よく知っているのは、先生方です。先生方しかいらっしゃらない。それを、どんどん外にアピールして欲しいと思います。それをお願いいたします。

４　＜研究協議＞

・　この授業を考えるきっかけは、子どもにとって、絵の具が非常に魅力的な素材ではないだろうか、と考えたからです。授業をしていまして、絵の具を、イメージを表す手段として考えて使うことが多いのですけれども、日頃、子どもたちを見ていると、パレットや筆洗バケツの色に心を奪われて、「おいしそう」「これは悪魔のスープだ」などと、イメージを広げる姿に気づきます。子どもが絵の具とたっぷり触れ合って、色や感触を味わう活動は、とても大切なのではないかと考え、この授業をつくりました。今日の授業では、一人一人の子どもが、本当に色作りを楽しんだり、描くことを楽しんだりしていて「子どもスイッチ」がたくさん見られたと思っています。中でも授業をして嬉しかったのは、絵の具が真っ白な紙にならべられて、表現する瞬間とでもいうのでしょうか、色を選んで、ためらいながら考えながら、じっと紙を見つめて描き始める瞬間に立会い、ぞくぞくしました。そういう場に立ち会えて、本当にうれしかったです。（授業者自評　吉岡）

・　今日は授業の初めに「自分の物語を描こう」と言うことでスタートしました。でも、生まれてから今までの絵を物語として描くのではなくて、自分の体と絵の具を使って物語を表そう、ということでスタートしました。一色目の色を選んで和紙に置いた時に「子どもスイッチ」が入った子どもが見られ、だんだんと動き出しました。その後２色３色と絵の具を選んで色を置くと、そこでもスイッチが入ったなと思える瞬間がありました。６年生が自分の物語や自分の心を描くのは、難しいことだと思います。けれども今日の授業を見ていて、子どもたちは、意識して体を動かし、そのことによって心が動き、心が動くことによって、また体が活動する。そのようにして、作品を描いたのだと思います。今日の授業を終えて、子どもたちははじめに出会った時よりもいい表情でした、終わってすっきりし「やり終えた」という風に感じられました。（授業者自評　田中）

・　ごちゃごちゃと余計なものがなくて、シンプルでよかったと思います。最近の傾向として、『たくさんあったほうがいい』『いろいろなものがあったほうがいい』つまり、刺激がたくさんあったほうがいいという、誤解を生むようなところもあって、逆に子どもがその中でおぼれていってしまうような場面、自分を見失ってしまう場面というものがあると、私は思っています。今日は、そのような事はなかったと言えます。（岩﨑）

・　子どもの中で連鎖反応的に起きていることは壮大なドラマで、文章にしたらとんでもない文章の量になるでしょう。条件反射的にただ正答を返していくような学習で起きている脳のドラマと、子どもたちが意味や価値を自分で創り出しているときのドラマとを考えると、比較にならないできごとが起こっているのだろうと、考えてしまいます。意味や価値を創り出している子どもの中では「子どもスイッチ」が連鎖反応を起こしているのでしょう。（岩﨑）

・　子どもは本来すごい力を持っています。人間の本性は創造性にあるとベルグソンも言っていますが、子どものほうがよっぽど人間や宇宙の本質がよく解っているのかもしれません。人間の喜びをよく知っているのかもしれないし、ひょっとしたら、大人の方は合理的に常識化してしまい、わからなくなっています。効率的であるけれども。（岩﨑）

・　１年生の授業を見たときは「こいつら、ほんとうにばかだなあ…」と。「ほんとうにばかなんだなあ…」と思って、嬉しくなってしまいました。「そして天国なんだなあ…」と思っていました。６年生くらいになると、「女子は考えるんだな…」と。女の子は本当に考えるんだな、と思いました。（土佐）

・　１年生はほんとに楽しそうに絵の具をこねくり回してつくっていました。しかし絵を描くときに、ちょっとトーンダウンしたなあと思って。それは多分、絵の具をつくっているときは、「ソース職人」「俺のおいしいソースをつくるぜ。」という風にみんな頑張ってつくっていて、「俺のソースはどうだ？」ってならべていたんですよ。それが、絵を描くときには、いきなり「料理をつくりなさい。」って言われたような感じ。ソース職人が料理をつくるとなると、何をつくっていいか解らない、「うーん。（解らないから）ピカチュウ（を描いちゃえ）。」みたいな。もしかしたら、ソースの段階でストップしたら　どうだったでしょう。ソースが最も美しく見えるドリッピング、ただ、たらすだけでもきれいなものができていたのですから。あのソースをそのまま固定するのは難しいでしょうが、ソースのよさを残すような表現にするのがよかったのでは、と思いました。（土佐）

・　６年生はやっぱり筆。筆を持って絵を描くということは、考えがいろいろ起こるんですね。禅の世界に入ってしまい「描くとは何か」「丸かいて世界」みたいな・・・小学生の時期にそっちの方向に行き始める子どももいるんだなあと、そんなこと思って見ていました。でも、紙に描くことは単純だからいろいろなものが出てくるんだと思います。「出てしまう世界」だなと。今日の授業で体をテーマにしているならば、もしかしたら筆というものが、バリアを張っていた。筆を子どもたちが１本持った時点で、筆がバリアをつくったと思いました。大人だったらそのバリアをチュウハイ一気飲みで壊すことができるのですが、子どもを酔っ払わせることはできないので、あるいは導入部で、そういう盛り上げが必要だったのかもしれません。みんなで仮面をつけて踊ってから描くとか。何かうんと「上げて落とす」みたいなものです。「ここはもう君たちの常識の世界ではないんだよ。」というような導入です。もう、違う名前で呼んじゃって…「君はウンジャブラバーというんだ。」なんて。常識を取っ払ったところからスタートしたら、もっと土俗的なというか、体で描いたのかなって気がしました。ただ、考えて、考えて、描けないというものもすばらしいと考えます。アートの歴史はまさにそれで、２０世紀に行き着いた絵画で「白の上に白」という作品があります。「描かない」っていう絵画がありますから。自分に向かい合っている、その中でいろいろ起こっている、と思うのです。そのようなことを考えていました。（土佐）

分科会５-②　体と心を働かせた造形活動

■実践発表１
提案者　福田 知香子　宇都宮市立戸祭学校　栃木県
　　長峯　貴志　宇都宮市立戸祭学校　栃木県
助言者　大野　薫　宇都宮市立西原小学校　栃木県

■実践発表２
提案者　大竹 裕範　上越市立上雲寺小学校　新潟県
助言者　柴野ひさ子　三条市立荒沢小学校　新潟県

■司　会　遠田　毅　日野市立三沢台小学校　東京都
■記録者　菅原　亮　品川区立城南第二小学校　東京都

１　提案１

～自分の思いを生き生きと表現できる子どもの育成を目指して～

・子どもの実態をもとに、表現意欲を換気する題材を設定し、子どもの主体性を大切にした多様な活動を保証する学習展開を工夫すれば、表現活動に関心を持ち、豊かな思いを持つ子どもが育つであろう。

・子どもが自分の考えを持ち、その思いを表出させる場や、多様な表現方法の良さ・意味を感じとれる場を計画的に設定するならば、自分の思いを工夫して表現し、友だちの作品の良さを認め、自分の活動に生かすことができる子どもが育つであろう。

・子どもと教師が目的を共有化し、教師が個に応じた適切な指導と支援を生かす評価の工夫をすれば、自分の思いを豊かに広げ、生き生きと表現できる子どもが育つであろう。

２　助言１

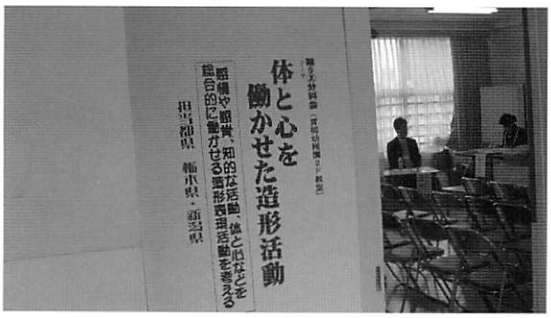
戸祭小は市の図画工作部会、学校全体で取り組んでいる。
研究構想図がしっかりしていて、低中高それぞれに焦点を当てている。
特徴として子供たちが自主的に活動できるような「場」の設定がある。
・材料を自由に取り出せるコーナー。
・鑑賞をできるコーナー。
・材料体験ができるコーナー
つくったもので遊ぶ場、飾っておける場、試行錯誤ができる場が確保されている。
各学年で鑑賞の時間をしっかりとって指導している。
図画工作をもっともっと広めていきたい。

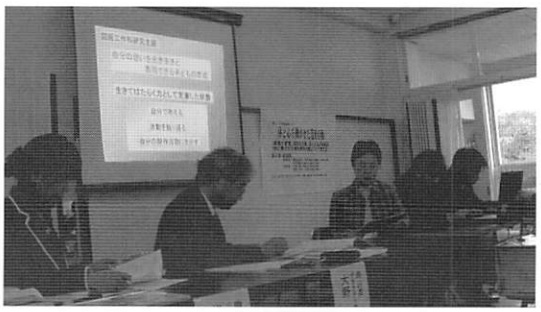
３　提案２

～新しい関わりを次から次へと作り出せるような活動構成の工夫～

・造形教育は、経験に基づく自分のイメージ作りから表現活動へ進んでいくことが大切であると考えている。そしてその表現活動を１つの出発点として次の表現活動への意欲にすることで、子どもは次から次へと自分の表現を作っていく。それは最初、振り返り的なイメージから最後には自分の創造的なものへと発展していくものがよいと考える。そして、自分の表現を第三者に伝える喜びを持つことで、自己表出から自己表現に表現の質が変容していく。

・つくると言う言葉は、様々な対象を持つ。子どもは作る対象に関わり、つくる相手に関わり、つくりながら他者に関わり、何よりもつくりながら自分自身を関わっていく。かかわり合いは、対象と自分を結び、自分で自分らしさを確信し、共につくる喜びを継続的に味わっていくキーワードである。





4　助言２

淡々とおっしゃっていたが、図工の熱い思いが伝わってきた。人間形成における図工の価値、教材研究がしっかりしている。

公園など子どもたちの生活の場にあるところでの活動は、総合と関連付けて年間を通して最初にしっかりと計画を立てていないと活動できない。

実践報告で紹介された「すてきカルタ」「すてきツリー」「すてきワールド」の感想だが、「思い」が「感覚」を暖めているように感じた。

とかく図工の作品は「個人」になりやすい。しかし「地域から始まって地域に戻る」メッセージ性があるのがすばらしい。

人間形成からみた展開がすごい。無理なく探究型の学びをしていける。

手とか体を存分に使って子どもたちが喜びながら学び続けることができる。

子どもたちの気持ちを大切にしてはいるが、評価についてはパフォーマンス評価になっているのが今後の課題である。改善策として、基準表のようなものを作っていけたらいいのではないか。「1 時間 1 時間の評価をできるもの」などの子どもも先生も目指す評価のわかるものがあるとよい。

5　研究協議（三つの提案を交流させた協議）

・「自分の思いを生き生きと表現・・・」とあったが、自分の思いは中学生にはなかなか出てこない。「思い」を持たせにくい。思いをどうやって持たせるのか？

・逆の道筋のつくり方「材料」からはじまる。というのもある。「思い」だけからせまる研究主題は厳しいのでは？

福田

・「思い」だけに限定したものではない。おおまかに表現している。最初から限定しているのではなく、段階段階にあった「思い」「行為」から始まるような活動も行っている。

大竹

・自分が作りたいものを作りたいように作れるようにする。

司会

・２つの提案のキーワードは「思い」ではないか。

「体と心を働かせた造形活動」を具体的な実例のなかで説明して欲しい。

福田

・1 年「動物村のピクニック」では実際に動物園に行って動物に餌をあげている。そのような活動から制作に入っている。2 年「秋の授業」では、実際に遊びに行ってそこから活動している。5ー6 年「運動会」では自分の体験をどう表すか？というところから制作している。行事と結びつけている。

大竹

・「体」とは体験「心」は思い。動かなければ何も考えること、感じることができない。大きく言えばどこを切っても体と心を働かせている。

司会

・東京の場合図工専科のため、子どもと体験を共有をできない。担任の先生の場合、子どもたちと体験を共有して授業ができるところが、うらやましく感じる。

助言者からのまとめ

大野

・「思い」の部分にクローズアップした。しかし本来は題材の与え方の工夫が大切。

・体と心は分けては考えられない。表現欲求を満たすために形や色や場所の刺激を与える。などを繰り返すことによって表現できる。

柴野

・身近な生活の中で感覚を磨く。思いを表現できる体験を存分に味わわせる。

・これからも地域とのかかわり、保護者とのかかわり、子どもたちとのネットワークを図工、美術を通して磨いていって欲しい。

・ただ作るだけでおわって欲しくない。「図工が人間形成に働くこと」を各県に広めてもらいたい。

分科会６　自発的な表現活動の生まれるとき

■実践発表１
提案者　野村　久美　常総市立石下小学校　茨城県
助言者　深谷　治之　桜川市立桜川中学校　茨城県

■実践発表２
提案者　泉　　薫　甲州市立松里小学校　山梨県
　　三枝　清美　甲州市立松里小学校　山梨県
助言者　成澤　宗克　山梨県教育委員会　山梨県

■司　会　鈴木　陽子　目黒区立五本木小学校　東京都
■記録者　上野千絵子　目黒区立向原小学校　東京都

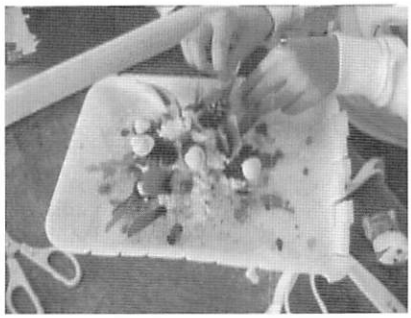
１　提案１　野村　久美　常総市立石下小学校　茨城県

～子どもがもてる力を発揮し、思いの実現に向けて働かせる力を考える～
第３学年「どろどろねん土の夢の島」の授業を通して
一人一人の思いがのびのびと表現できる題材の工夫と支援の在り方

豊かな感性のもとにつくり・つくり変え・つくり続ける活動の中で必要な力として、**主体的に選ぶ〔選択力〕・主体的に判断する〔判断力〕・主体的に描いたりつくったりする〔表現力〕**の３つが考えられる。それらの力は、すでに子どもに備わっているものであり、教師の呼びかけによって、価値ある内容を通して引き出されていくのである。

教師は、子どもの実態をとらえ、子ども達が自ら資質や能力を働かせて主体的に学習活動を進めていくことができるように、題材の工夫をすることが大切である。

第１に「題材に幅を持たせる」ことである。子ども達が表したいことを重視し、材料や用具を自分で選んだり表し方を試したりして、もてる力を働かせる幅のある題材の工夫が求められている。



第２に「材料や用具の適切な扱いに慣れさせる」ことである。日頃から思いのままに体験できる機会を増やすこと。今回の授業では、「材料の宝箱」（自分が集めた材料を入れる箱）を自分の手元に持ち、いつでも使えるようにした。

第３に「鑑賞の機会を工夫する」ことである。常に様々な作品を見ることのできる場…「学校美術館」や子どもたちの作品やアイディアの発表の場…「ひらめきコーナー」の設定。授業の中では、見合いながら高め合っていかれるように相互鑑賞する場の工夫をした。

第３学年題材「どろどろねん土の夢の島」の授業を通して「一人一人の思いがのびのびと表現できる題材の工夫と支援の在り方」を探った。

・題材の選択では、出会い・味わい・期待感を大切にしたかった。市販の紙粘土ではなく、トイレットペーパーで自ら作り出せる「どろどろねん土」にした。
・学習活動に向けて「材料の宝箱」を作った。身の回りにある雑貨、廃材、自然物に目を向け色や形などに関心を持って材料を集めていくことで、活動へ向けて期待感を高めていった。
・導入はシンプルに分かりやすくし、子どもたちのやりたいという期待感を大切にした。
・学習活動では、材料から思いついた形が膨らんでいった。表現活動時においては、自分の中にあるやりたいことを大切に活動できるように子どもの実態に合わせて言葉かけをした。
・鑑賞の時間では、いつもの教室を違う空間にする工夫をした。ブルーシートを敷くことでその場が海に見立てられた。できた島を並べ互いの作品を鑑賞しあうことにより、子どもたちは新たな発想・構想を膨らませていき、更につくり変え、作り続けていく活動へと繋がっていった。

２　助言１　深谷　治之　桜川市立桜川中学校　茨城県

・育てたいことが明確で、場や題材の設定が的確であり一人一人の思いを大切にした題材であった。BGMやブルーシートの海等様々な仕掛けもよかった。
・一番楽しんでいるのは先生であった。その気持ちが子どもたちに伝わり、夢中で取り組む授業になっていった。
・「材料の宝箱」は、材料を自分たちで集めさせる習慣から、身の回りのものに関心が高まっていく。発想力から感性が磨かれていき、授業への意欲へと繋がっていった。
・　素材は、年齢に応じて画一化や選択の幅を持たせること等を考えていくことが大切である。

３　提案２　泉　　薫　甲州市立松里小学校　山梨県
　　三枝　清美　甲州市立松里小学校　山梨県

～主体的な学びを育む授業展開の工夫～
第６学年「えだ　枝　カーニバル」の授業を通して
第１学年「・　から　どんどん！ぐんぐん！」の授業を通して

図画工作科アンケートによる意識調査を基に主体的な学びを育む授業展開の工夫を考えた。そこで、学びの意欲を高める学習指導の工夫として、４つの観点に示された資質や能力を意識させ、めあての共有化を図ることにした。

図画工作科の４観点に示された資質や能力を低・中・高学年用の分かりやすい言葉に置き換え「４つの力」とし、掲示用カードを作った。このカードを授業の始めに黒板に貼って示し、今日頑張ることを明確にすることで、子どもたちは、上手い・下手ではなく今もっている力を働かせるのだという意識をもって学習に取り組むようになった。教師は、４つの力を意識し、子どもが主体的に活動できるような言葉掛けを心掛けていった。

学習活動の中に、作品のよいところや試行錯誤について互い伝え合う場「ピピッとタイム」を設けた。活動の流れを切らないようにどのようにしていくかが課題であり、研究中である。

日常的な鑑賞の場として、「ピピッとギャラリー」を設け、「リレー粘土」「ポーズをまねて」等の展示から「楽しく見る・楽しく活動していい」という意識を子どもや保護者に持たせたい。

第６学年題材「えだ　枝　カーニバル」・第１学年「・　から　どんどん！ぐんぐん！」の授業のおける主体的な学びのための支援については、以下の通りである。

「えだ　枝　カーニバル」前題材で、材料とかかわる活動を経験し、本題材への発展を試みた。

「・　から　どんどん！ぐんぐん！」子どものつぶやきを付箋紙に書きその場に貼ることで、子どもたちの活動を刺激し、新たな発想の広がりをもたらせる工夫をした。

共通の支援

- 材料・用具など表現の幅が広げられるような準備と創造的な技能を働かせられるような場の工夫をする。
- 評価規準を明確にし、Ａの具体的な想定をすることで、適切な支援ができるようにする。
- 振り返りカードによる自己・相互評価をすることで、自分の活動を振り返り、次への意欲につなげる。

４　助言２　成澤　宗克　山梨県教育委員会　　山梨県

- 図画工作科の４観点を授業の前に子どもと共に確認していくことで、どんな力を働かせて活動していけば良いのかということが子どもたちの中に浸透してきている。
- 「ピピッとタイム」－作品をつくっている中で気付きをもつ場は、新たな鑑賞の能力やつくり続ける意欲へ繋がる。
- 子どもの活動の柔軟さがもてる場が設定されている。
- 大人の声は、子どもたちのよさを引き出す配慮がされている→自分の力の発揮→生きる力
- 日常的に、自然に鑑賞できる豊かな環境がつくられている。

５　研究協議

- 材料については、どこまで画一化するかという問題と更に環境のことも考えていく必要がある。
- 校内には子どもの作品を日常的に観る場があるが、更に地域の中に展示する場を広げていきたい。
- 材料を大切にする気持ちについて問題を感じていた。自分で集めることで大切に扱っていた。
- アイディアスケッチは、材料を見て思いを膨らませる為のメモとして考えた。
- アイディアスケッチは、低学年では手を動かすことが大切なので必要ないが、高学年では手が止まってしまうことがある。その場合、スケッチをすることで考えをまとめる手助けになると思う。
- 目の前にいる子どもたちにどのような力を、小中９年間を見据えて、軸足をどこに置いたらいいのかをしっかり考えることが大切だ。図画工作の楽しさを全ての子に浸透させていくこと、更に保護者や地域に伝えていくことが大切だ。

分科会７-①　連携を考える（鑑賞）

■実践発表１
提案者　伊東　由美　府中市立日新小学校　東京都
　　井ノ口和子　武蔵野市立第二小学校　東京都
助言者　武居　利史　府中市美術館学芸員　東京都

■実践発表２
提案者　才津　純子　さいたま市立田島小学校　埼玉県
協力者　田中　晃　埼玉県立近代美術館学芸員　埼玉県
助言者　中川　昇次　さいたま市教育委員会　埼玉県

■司　会　大杉　健　府中市立若松小学校　東京都
■記録者　大森　直子　東村山市立東萩山小学校　東京都

この分科会では、鑑賞の授業に向けて美術館や地域と学校がどう連携していかれるか、取り組みを交流し成果や課題について考えあった。

提案は東京と埼玉の２地区から行われた。参加者は２０人ほど。来年度の関ブロ担当地区の群馬など、東京以外からの参加者が多かった。

１　提案１　～府中市美術館との連携から考える～

（伊東由美教諭・井ノ口和子教諭より）

始めに、昨年（２００６年１２月）の東京都図画工作研究会北多摩大会「美術館で広がる図工」分科会の提案に基づき報告が行われた。

府中市美術館は、開館準備段階から学校側との繋がりを持ち、鑑賞教室、ワークショップ、教員鑑賞研修等で連携を継続している。そこから昨年度の大会へとつながったことが、まず話された。

行われた３つの授業では、どれも学芸員や美術館のボランティアスタッフ、作家、友だち同士と「関わり合いながら見る」ということが子どもたちの創造的な鑑賞活動を引きだしていた。鑑賞の授業を行う際、学芸員との対話の積み重ねとともに、子どもを中心とした人と人との繋がりが大切であると強調された。

続けて、大会以降の府中市美術館と連携した活動について話があった。２００７年夏に行われた教員向けの第４回夏期授業指導研究会では、美術館を会場に①鑑賞を読み解く②鑑賞授業を体験する③作家とであう④鑑賞の授業を計画するという内容で研究をした。④を受け、研究会参加者の中から授業者を募り、実際に子どもたちに向けて授業をするところまで活動を継続した。研究会の内容については、毎回教員側の実行委員が、美術館側のスタッフや作家と話し合いながら組み立て、可能性を広げている。

より鑑賞教育を充実させていくためには、子どもを中心とした学校と美術館との連携・教員の研修の継続が必要である。今後、小学校６年間を見通した鑑賞教育計画について、また中学校「美術」との繋がりについて考えていきたい。学校と美術館と行政、さらに作家や地域、保護者、ＮＰＯ組織などとも共通理解しながら連携を進めたい、と報告があった。

２　助言１　府中市美術館学芸員　武居利史氏

武居利史学芸員からは、次のような助言があった。

「鑑賞」という言葉一つとっても、学校側と美術館側でとらえ方が違う。重要なのは両者が対等な立場で対話を重ねること。今後、美術館が地域の文化の拠点としての役割を持ち、文化を継承するだけでなく文化の創造に関わることが重要になってくるだろう。地域と有機的に結びつくことでそれが可能になってくると考える。さまざまな人が「鑑賞する」ということだけでなく文化の担い手として美術館を活用してほしい。生涯学習としての役割を担う場にしていきたい。

課題としては、①小学校とは進んでいる連携が、中学・高校とはなかなか進まないということ、②府中市美術館の場合、市外の学校との連携が広がりにくいこと、③多面的な教育活動を進めるためのスタッフが不足していること、ボランティアを含め、いかにスタッフを育てるか、といった点が挙げられる。

３　提案２　～埼玉県立近代美術館との連携から考える～（才津純子教諭より）

埼玉県立近代美術館との連携について、資料と映像により報告された。

「敷居が高い」「時間がない」「遠い」などの始めのイメージは連携を進める中で払拭され、子どもにとってのメリットが大きいことを実感している。

出会いは美術館サポートスタッフとしての研修を受け、夏休み子ども相談員などを経験したこと。美術館と関わる中で鑑賞授業について知り、学芸員の田中さんを招いて校内で授業を行った。子どもたちはたくさんのことを見つけ感じ取っていた。参観日に実施することで保護者にも理解が得られるようになった。現在４～６年で年間計画に位置づけて鑑賞の授業を行っているが、そのうち５年生では美術館に出かける授業を設定している。

近代美術館の美術館利用研究会にも参加し、学校と美術館が連携した鑑賞プログラム作成の機会を得た。近代美術館作成の複製画を使っての鑑賞、ペープサートを使って絵の中に出かける、アートカードを使った形容詞ゲームなど数々の魅力的な題材がある。低学年に向けての鑑賞の授業も行い、「見るって楽しい」という経験を高学年につなげている。

４　助言２　埼玉県立近代美術館学芸員　田中晃氏
さいたま市教育委員会　中川昇次氏

協力者の田中晃学芸員からは、学校との連携を広げるシステムをどう作り上げてきたかの話があった。教員美術講座、教員向けの鑑賞会、研究会の開催、学校での鑑賞授業に対する協力など、学校と美術館をつなぐ数々の取り組みが紹介された。

「美術教育を通して豊かな子どもを育てる」という目標に向かい、美術館、学校、大学、他の美術館、教育委員会などがすべて連携できる。何より「主体性」を持った連携であることが、より成長していく条件である。学校側、美術館側とも依存でない利用の仕方、され方を模索し続けたいと話があった。

続いて埼玉県さいたま市教育委員会の中川昇次先生からの助言をいただいた。鑑賞は「受け身でなく創造を広げ、表現に生きるもの」である。感性を磨き情操を養う美術館を活用して欲しい。埼玉県立近代美術館では、休館中の美術館を使っての教員研修から繋がりが始まった。自然発生的に少しずつ広がり、予算も付いて制度化されたという経緯がある。出張についても、美術館に教員出身者を入れる、ということについても行政として動いている。行政の側でできることは影の部分であるが、協力していく。要望をあげていってほしい、と心強い言葉をいただいた。

５　研究協議（２つの提案を交流させた協議）

（大杉）意外に遠い学校と美術館だが、連携の可能性は十分にある。実際に連携し、鑑賞の授業を組み立てて行くのに重要なことや成果、苦労を参加者の皆さんからも出していただきたい。

・　美術館は敷居が高い構造。
・　学芸員と話し合う時間がネック。
→　考えていることを管理職にどんどん伝えていくことが必要だろう。
・　鑑賞に使う時間が少ない。
→　低学年なら切符を自分で買って電車に乗って美術館に行くといったように生活科と連携することも可能。工夫の余地がある。
・　授業をするのに学芸員が子ども慣れしていない。
・　続けていかれるようなマニュアルがあるといい。
→　（武居）府中市美術館が作成した、北多摩大会を含めてまとめた「学校向け美術館利用ガイド」がある。マニュアルというほど詳細ではないが、実際に授業に活用でき、参考になると思う。またこうしたものを相互につくっていけるといい。
・　子どもの受け入れＯＫという美術館ばかりではない。
→「子どもが行く」ということで美術館の内容が変わってきている。積極的に動くことだ。
→「美術館に行く手段がない。だから来てくれ」と働きかけたとき、美術館側が休館のチャンスに本物の作品を貸し出してくれた。熱意と話し合いで物事は変わっていく。
→　（中川）行政側にも要望をまず出して欲しいし、話し合っていきたい。学校と美術館との橋渡しとして働きかけをしていきたい。

（大杉）今後、横の繋がりも大切にして、子どものために進んでいきましょう。

（武居）美術館と学校との連携が進んできて関心も高い。次の発展として、美術・文化の創造ということについて一緒に考えていきたい。

（中川）美術館、地域との連携を考えてきたが、地域にも宝物がいっぱいある。地域、美術館を子どもたちの感性や情操を高めるために使っていって欲しい。

分科会７-②　連携を考える・幼小中　校種間の連携

■実践発表１
提案者　本間基史　新宿区立落合第六小学校　東京都
助言者　大坪圭輔　武蔵野美術大学

■実践発表２
提案者　菜島千愛　川崎市立渡田小学校　神奈川県
助言者　三村修一　川崎市立西野川小学校　神奈川県

■司　会　横内克之　新宿区立花園小学校　東京都

■記録者　麻佐知子　新宿区立四谷第六小学校　東京都

１　提案１　～造形活動を介した出会い・幼小中の連携～

新宿区立落合第四小学校での幼小・小中連携の実践をDVDにまとめたもので紹介。

・【もう一つの乙女山】幼小連携。学校のすぐそばにある乙女山にちなんで、大きな布に５年生が黄ボール紙で木をつくり、幼稚園児がそこに花や動物をつくって貼って仕上げたもの。光をあてて影絵のようにして楽しんだ。

・【こちら落合設計事務所】小中連携。中野区建築家協会を迎えて、中学３年生と小学３年生で行った活動。垂木を太い輪ゴムで留める方法で家づくりをした。中学生が、大人の言葉を小学生に翻訳して伝えたり、子どもの言葉を大人に翻訳してくれたりして、スムーズに活動できた。

・【この木なんの木】幼小連携。ブルーノ・ムナーリの実践を参考に行ったもの。４年生が幼児をサポートする。ハサミを使う幼児を見守る４年生。紙を切っている幼児よりも、それを見守る４年生の方が、切り終えた時の喜びが大きいのが印象的。家の形をつくり、その中に自分たちを描く女の子たちのグループ。大きな木の幹の中で様々な物語が展開された。

・【のびのびパフォーマンス】新宿区立花園小学校と四谷第六小学校との交流活動。新宿御苑を挟んで隣り合う小学校の６年生同士が、初対面のグループで活動する。まとった白い布と背景の公園の景色との関係を感じながら伸び伸びと活動できた。造形的な視点だけでなく、運動会での組体操など共有している経験を生かした活動も見られた。卒業後は地域の中の同じ中学校に進むことを意識した取り組み。

２　助言１

・コンピテンシー（competency）という考え方。スキルやリテラシーのように部分的な小さな能力ではなく、大きな視点で人間の能力をとらえようとするもの。OECDの調査結果から広まった言葉。コンピテンシーを育むために掲げられた３つの要素のうちの第一は「社会的に異質な集団で交流する能力を育む」こと。この能力を伸ばすための時間や空間を保証できるのは学校現場。

・幼の教育要領から小中高までの学習指導要領を一列に並べて関連するところを見つけ出すことが、「連携」ではない。小学校は小学校の中で、中学校は中学校の中で、それぞれ育つ能力がある。異質なそれらを身体的な感覚を使って交流し合う（ぶつけあう）ことが、互いに成長し合うところにつながる。全く異質な背景を持った者が出会って活動することで、子どもが成長し、自分の存在に自信を持つことができる。

・英国のマルチカルチャーリズムでは、国籍も文化も様々に異なる子どもたちが一つの学校にいる中で（出身の国が６０以上という例も）唯一の共通体験がアートであった。「文化の違うコミュニケーション手段」としてだけでなく、その中で子どもを育ててゆくことが必要だ。

３　提案２　～学習内容に視点をあてた小中連携～

神奈川県川崎地区の実践の紹介。川崎市には、１１４校の小学校と５１校の中学校がある。高校も含めて同じ授業観に立った授業を行い、研究会や作品展等の活動をしている。

・【もじ文字デザイン】５年。小学校から高校まで使われている授業構想図（配付資料参照）より。川崎市では、造形表現活動を通して子どもたちに育てたい力を「活動の指針」として示す。学習指導要領に示されている四観点に対応させて，「a 造形表現活動の楽しさ」「b ふくらむ思い」「c つくる喜び」「d よさや美しさを感じる心」の４つのカテゴリーが、「Ｐ計画」「Ｄ実践」「Ｓ評価」「Ａ 改善」という指導と評価の一体化を図る授業構想に絡めた造形体験を考えている。中学校のカリキュラムを見渡して、そこで重視されているデザインを小学校で取り上げることにした。中

学校に進学したときに造形的な広がりが出るように、学習内容を連携させた。この題材では、活動の指針の「b ふくらむ思い」に重点を置き、発想や構想の能力を育む指導を行った。活動を通じて「よく見てかくこと」「奥行きや広がりをもたせることのできる斜めの線に気づかせること」「絵の具の使い方では濃さや使う紙を変えることで表れる色が違うこと」などに子どもから気づくよう指導し、思いをもつ、思いを広げる、思いを深めるための段階を丁寧に指導した。

４　助言２

川崎市には、幼小中高という学校種を越えた連合会があり、今年で５０回目を迎える「創造する子ども展」を毎年一回開催している。そこで中学校の先生から聞く話「最近は確かな技能が身についていない子が中学校に入ってくる。絵を描くときに自信をもてず、美術の時間に表現意欲がない。」確かな表現能力が身についていない実態がある。今日は、あえてやってみた実験的な提案。川崎市の小学校研究会で活動を通して育てていきたい力を、先に挙げた４つの観点（活動の指針）で示した。

５　研究協議

・最近言われる「連携」が、中学校をベースにして小学校を何とかうまく適応させていこうとする考え方なのが気になる。今、教育全体が目指すものの中で、それぞれの教科ができることを考えるべきではないか。小学校と中学校の学習指導要領には隔たりがあり、それへの具体的な対応を考えるときに「中学校をベースにする」という出発点ではなく、教育全体のベースになるものから考えたい。

・東京の実践報告で造形遊びがよくわかっておもしろかったが、それぞれの校種や学校ごとにカリキュラムが違う中で、どのように調整したのか。最初に始めるときは苦労があったのでは？

・四谷地区では統合されて校数が減っていく中で目指す方向を模索して、まずは教師同士の交流から始まった。しやすい教科としにくい教科があることに気づいたが、図工では造形活動がもつ「交流しやすい」というよさを生かしている。

・幼小の交流をみて、人間関係が育成されるというよさはよくわかった。造形的にはどうなのか？下の子どもにとってのよさはわかるが、上の子にはどんなよさがあったか？

・落合第四小との連携からの報告について。中学校の選択美術の子どもたちがかかわった活動だが、比較的まじめに取り組む女子に比べて手のかかる大変な男子たち。いわゆる「中一ショック」で荒れていた子たちを連れて小学校に行ったら、その子たちが別人のように輝いていた。中学校に戻ってから、美術の授業にも落ち着いて取り組めた。中学校の子どもたちには、技術的な成長はあまりなかったかも知れないが、「心の表現をする」という気持ちの面で成長があった。

・上の子は下の子のやりたいことをよく聞いている。大切なのはコミュニケーション能力。

・造形的な成長はあったと考える。算数・数学で習熟度別のクラスを担当する教師から「教え合い」が成立しないことを嘆く声が聞かれる。習熟度別の集団は、学力的にスライスされているが、レベルの違う子ども同士での教え合いは、実は教えられる側よりも教える側がスキルアップできるよさがある。図工・美術では、最終的に「身体性」を核にして活動を考えるとよいのではないか。

・川崎市だけの問題ではないが、中学校の教師が小学校のことを、あるいは、小学校教師が幼稚園のことをわからないことが多いのが現実。川崎市で開かれる年一回の幼小中高連合の展覧会は互いに触発し合える貴重な機会。異学校種間の先生方が、作品交流を介して授業実践を紹介し合う研究の場をもってほしい。

・「授業」は誰のためのものか。学習者である子どものためであることはもちろんだが、行政、親、地域も重要な要素。最も大きな役目を担っているのは教師。教師は、それらの要素を十分に考慮して授業を組み立てるコーディネーターの役割を果たすべきだ。絶えず問題意識を持ち続けることが大切で、そこから交流、連携を考える。小学校から中・高・大学を貫く共通の基礎基本というようなものは無い。その中で、教師が必要と思えば、スキルアップのための題材を組むこともあり得る。まず取り組める身近な連携として、ポートフォリオを提案する。小学校から自分の作品をずっとファイルしておけるならば、個別ではあってもその子にとっての小中連携になる。

・連携や交流については、行政などから下りてくるものについ乗ってしまったり、ただ一緒に活動するだけの安易な方向に流れたりするのではなく、学校現場での実践を通じて、子どもにどのような力をつけさせようとしているのかを見極めて取り組みを続けていきたい。

分科会８　「つくる喜びを味わおう」

■実践発表１
提案者　藤崎敬太郎　館林市立多々良中学校　群馬県
助言者　柏瀬　薫世　桐生市立境野中学校　群馬県

■実践発表２
提案者　山内美和子　上尾市立上尾中学校　埼玉県
助言者　高橋　帛子　上尾市立上尾東中学校　埼玉県

■実践発表３
提案者　小林　栄子　那須塩原市立厚崎中学校　栃木県
助言者　橋本　彰　那須塩原市立三島中学校　栃木県

■司　会　小林　至　豊島区立千川中学校　東京都
■記録者　板橋　尚文　豊島区立明豊中学校　東京都

１　提案１

テーマ　「あなたはデザイナー～販売するデザインを考案しよう～」

身近なデザインのよさや美しさを感じ取ることや、自分の思いや考えに基づいて、発展したこと思い通りに表現することを通して、つくる喜びを味わって欲しいと願い本題材を設定した。

本題材では、生活を美しく豊かにするためのデザイン、空間の中の美への関心を高め、市販のデザインを鑑賞し、発想のきっかけとし、段階的に構想し、制作する。日常生活の中の美しい物を発見し、意欲の喚起をして作品制作につなげる。

１年生では自然物からデザイン、色彩の勉強。基礎的なレタリング（漢字、ひらがな）粘土制作などの自由の少ない教材。２年生では自由度を増し、レタリング（英字）を取り入れる。

本題材（２年）では、まず市販の販売物のデザインを鑑賞し、構成美の要素が入ったデザインを意図的に紹介し、関心を持たせ、自分だったらこんなものをつくりたい作品のイメージをもつ。イラストレーションの構想を練り、アイデアスケッチを行う。配色計画を立て、構想をもとに、作品制作する。仕上がった作品は、ポストカードにし、展示、鑑賞する。

実際に販売されているポストカードや、レターセットは身近であり、構成美の要素を発見する。活動は、日常生活の中の美しい物を発見することになり、意欲の喚起となった。生徒の作品には多種多様な発想の反面、進度にばらつきが出た。テーマなどもっと絞る方法もあるだろう。

２　助言１

・地域とのコミュニケーションが豊かなこの地域で、販売するデザインをテーマに制作した。「展示・売る」に対して、明らかに他との差を感じる生徒、売れ残ってしまった生徒の対策が再考される。楽しく作る、頑張って作る、自分なりのオリジナリティーを感じるような指導が大切である。独創性は、自由にやっていればつくというものではない。多角的な所からの情報の収集や制限の中から発想が出て来る。できない生徒の「できたらいいな」というあこがれを支援していけば美術の授業が発展していく。本課題は、美、感性、遊び心、創造性などを中心に発展させる余地のある題材であり、将来、年賀状、クリスマスカードなどの、実際に使う物を制作する事により、つくる喜びを味わうことになり、この喜びが、生きる力につながるのではないでしょうか。

３　提案２

テーマ　美術って楽しい！仮面で変身！！

「美術って楽しい」このような授業をつくりたいと思い、この題材を設定した。「なりたい自分になる」児童生徒の興味や関心の高まりを資質や能力の向上に生かすような指導の改善を図ることが検討されている。自己表現の方法、面白さ、他者理解により、生徒の生きる力につながる。

伝統文化を仮面から学び、生活に取り入れ、自分の世界を造りあげていく。普段無関心な生徒も積極的に取り組み、パフォーマンスを含めコミュニケーション能力を高める効果もある。

１．つくる喜びは生きる力と実感できた。２．新しい教育課程に対する実践。３．子どもの心の現状から (1) 生涯にわたって主体的に生活の中の造形に関わる力を見につけていくこと。(2) 感情表現が苦手な子ども、喜怒哀楽の感情の認知が不十分な子どもに喜びを与えていくこと。

我々は、この事に気づき、我らの心の現状からスモールステップを踏んで、彼らを認め励ます指導を研究していかなければならないのではないだろうか。

４　助言２

・発表者は、諸事情によりパフォーマンスの本番が出来なかったので、参考までに１１年前に私が授業

で行ったビデオをお見せします。〈ビデオ、仮面作りと、仮面をかぶって踊る集団、女装して踊る男子、踊りながらパンツを何枚も続けて脱いでいく男子等様々なパフォーマンスが、バックミュージックと共に流れていく〉生徒達は、普段無関心だった子どもも含めて、皆楽しく活動していた。心の扉にかかったカサをはずそう。もっと自由にさけんで自由に時間を使ってパフォーマンスを考える。仮面、衣装、ポーズ、自分達で企画演出し、生きる力、生きる喜びとは何か、それは物をただ作るだけでなく、からだを使ってすべてを表現する。わくわく、どきどき感が生きる力につながっていく。即興はパワーだ、ファッションだ。女性への変身願望の男子が増えている。仮面をかぶる事によって普段の自分を離れて、強い自分になれる。また、パフォーマンスによって楽しい人間関係が良くなり、友達、クラスの雰囲気が良くなり、仲良くなり、元気にはじけて飛ぶ。我々は芸術家を育てているわけではない。心の教育をしているかが大事である。作品を作らない、表情がない、閉ざされた生徒に目を向けていくことが大切だ。この子達にも喜びを感じさせることが出来る。

5　提案３

テーマ　実社会で生かせるような指導のあり方（コンピュータによる授業）

「伝えたい内容を、イラストレーション・図、写真・ビデオ・コンピュータ等映像メディアなどを使って、効果的に表現できるようにする」を受けて本題材を設定した。

身近な物、町の中からの発見ということで、普段からデジタルカメラで、マーク、看板、標識などを撮影し保存しておき、授業に備える。それらをコンピュータに取り組み、導入の段階で生徒に示し、身近なものの中からの発見、マークの必要性を感じ、楽しく制作する。

１年では、色彩、レタリング、マーク、アニメーション、２年では、ポスター、パブリックアート、鑑賞、彫刻、３年では、デザイン、トリックアート、鑑賞の授業に利用する。

大切なのは、教師側のメディア技術を向上させ、生徒に美術の楽しさを味わわせるために、導入や、制作途中で活用できるコンピュータ指導資料を研究することである。また、幅広く資料を提示するために、学校施設の充実も必要だ。生徒が楽しいと、つくる喜びを感じるための意欲をかきたてる支援の仕方を工夫することが再考される。

6　助言３

・普段からの実践の中での発表です。自作教材であることがポイント。週一時間を有効に使う。多くの資料を提示することにより、選択の幅を広くし、一人一人の子どもの能力を引き出す。子ども達がパソコンの画面に集中し、説明が充実する。評価は下絵、途中、感性とそれぞれ撮影、保存することにより段階的にできる。これは、次の授業でのアドバイスの資料にもなる。作品そのものをコンピュータで制作しているわけではないが、発展させて行くことでしょう。今日の発表は地道な発表ではあるが、行動的な授業作り、発表者自身が常にデジタルカメラで街中の、マーク、ポスター、標識などを撮影して資料としていること、将来は、コンピュータでの制作を展開させるという希望を残しつつも、充実した授業を展開したと思われる。

7　協議

・閉ざされた子どもに目を向けた所に感心した。普段無関心の子どもの制作中の様子は？
・心の問題が大きい。隣同士仲良くやることで安心感、コミュニケーションが増え、楽しんでやっている。２人の感想は、A，考えが甘かった。B，楽しかった。である。
・助言者のビデオを観て、これが美術の授業なのか、ダンスは体育、衣装は家庭科でよいのでは。いったい中学校の美術の授業とは何か。私は、色、形、などを模索し、自分らしさを表現していくのが美術だと思います。あんな物で感性が育てられるとは思えない。美術の授業は、美術としてしっかりやるべきでは。最後の方の映像で気持ち悪くなりました。
・世界大会に日本代表として発表したとき、同じような質問を受けました。しかし、これは、パフォーマンスであり、総合芸術です。アメリカの芸術高校の校長は『ブラボー』と言い絶賛の拍手をしてくれました。日本はまだ芸術発展途上、あらゆる芸術感を統合させて、美術、総合芸術教育を展開させていく事が、これからの日本の美術教育を発展させていくのです。そして忘れてはいけないのは、最近多くなってきた、自分の心を閉ざした子どもに対し、できた事をほめていく、などスモールステップを踏んで彼らを支援することなのです。

★助言者の打ち合わせでの意見の通り、２時間ではとても語り尽くせないテーマだった。

分科会９　生活にいかそう！

■実践発表１（ユニバーサルデザインプロジェクト）
提案者　河原　茂樹　藤枝市立藤枝中学校 静岡県
助言者　青木　隆宏　藤枝市立青島北中学校 静岡県

■実践発表２（ウィンドウ・ディスプレイの提案）
提案者　藤本　卓　北区紅葉中学校　東京都
助言者　菊田　寛　墨田区吾妻第二中学校 東京都

■実践発表３（川中島白桃ＰＲ大作戦）
提案者　森　崇　長野市立川中島中学校 長野県
助言者　五味　一男　諏訪郡原村立原中学校 長野県

■司　会　小川　永祐　北区立稲付中学校 東京都
■記録者　藤井香恵子　北区立赤羽中学校 東京都

１　提案１（ユニバーサルデザイン　プロジェクト）

テーマ　～人に優しい「もの・まち」づくりを提案しよう！～

全国に先駆けて静岡県ユニバーサルデザイン推進本部が開設にされたことにより、人に優しいデザインを追求するユニバーサルデザイン プロジェクトを企画した。

美術科として教科の本質に迫るため、「他とのかかわりかたの工夫」を考えている。他とのかかわりを十分もたせることで自分の作品をよりよいものにしていくことを期待している。また授業者自身が題材の魅力を理解し、題材導入部分で子どもの関心を引きつけ、意欲的な取り組みにしたい。

学校からさらに社会へ目を向けさせ、自分たちを取り巻く環境に注目するところからユニバーサルデザイン（以下UDと表記）の提案をし、大賞に選ばれることで製品化される企画の取り組みは4回目の実践である。県知事自らが推進本部長となり、UDによる環境づくりを推進している静岡県で、本校でもこの題材を扱うことでUDに対する意識が高まり、新たな視点で社会を見つめ直すことができる。また、行政任せではなく、一県民としてよりよい社会を作り上げていくために、共に考え進める姿勢が生まれるものと期待でき、この企画に参加できることは題材の魅力の一つといえる。はじめはUDという言葉の意味の説明からおこなった。情報収集の調査活動として、インターネットや書物を活用した。ところが雑誌掲載製品を大量に提示したことでかえって、発想の妨げになってしまい、独創性のあるものや、ユニークな発想のものが見られなくなってしまった。そこで次年度からは各自で情報を収集させることで発想の改善ができた。表現はA3ポスター形式で、描画材料は自由選択である。得意、不得意はあるものの、各自内容をわかりやすく表現しようと自分なりの工夫をしている。またバリアフリーとUDの区別がつかない生徒もおり、中間発表会をすることで子供同士による意見交換で内容の吟味をさせることができた。アドバイスカードによる内容も「○○ちゃんらしい」という表現からより具体的な改善案や配色についてのアドバイスになり充実してきた。この会をすることで自分の作品の見返しを図ることができたのが大きな成果といえる。そしてこの題材に取り組むことで自分たちの生活を改めて見つめ直すことができたのではないかと思う。更に美術が普段の生活に密接に結びついていることが理解されたと考える。課題は 10 時間かけているこの題材を少ない授業時数の中で短縮化し、8時間くらいにできればと思っていることである。

作品紹介

・「楽ペン」シャープペンの換え芯をカートリッジ式にしたもので、静岡では一般に販売されている。
通常のものは、入れるときに入れにくい、芯を取り出すときに折ってしまう、手が汚れるなどの不便さがあるが、カートリッジ式なのでシャープペンの蓋を開けて、入れるだけと手軽である。
・「MCD」ケースから手で取り出さなくても機器に挿入できる、CDケース。ケースを盤の上で簡単に操作するだけでスライドした中のCDが出てくる仕組みである。
・「醤油差し」通常のものは、蓋を無くしてしまいがちだったり、袋状のものは開けにくかったりと不便である。弁をスライドさせることで蓋の 開閉ができる仕組みのもの。

その他、ボトルシャンプーの詰め替え用品、牛乳パックの注ぎ口の工夫などの紹介。

２　助言１

・身近な生活の不便さを家の人から聞くことで、アイデアが出るばかりでなく、会話のきっかけとなる効果もある。8年も続くのは発想の面白さが魅力だからである。
・「もっと楽に」「もっと自由に」という限定された条件が、より発想をしやすくしている。最終的に、人の為にもなるところが良い。

３　提案２（ウィンドウ・ディスプレイの提案）

テーマ　～地域環境に発信するデザイン～

ウィンドウ・ディスプレイを通して社会とデザインの関わりを考えさせ、身近である店舗のディスプレイを自由に制作させる。造形諸要素の応用がきく総合的題材としての取り組みである。

地域環境に働きかけ、私たちの生活を豊かで潤いあるものにすることもデザインの大切な機能の一つである。目的や条件、機能と美しさの調和、使う人や見る人の立場を配慮し、地域環境に広く発信できるデザインについて、その本質性、社会との関わりが深いものとしてウィンドウ・ディスプレイが挙げられる。地域から商業施設（池袋）が近く、ウィンドウ・ディスプレイが身近であることも題材設定の理由である。2年生までに学んだ色彩・構成等、造形上の諸要素を応用範囲の広いものとして3年生で自由に制作できる、総合的な題材である。まず、鑑賞においてデザインの良さやねらいをワークシートやアンケートを活用して考えさせている。そして実際のディスプレイの取材・レポートのまとめを踏まえ、制作に取りかかっている。多くは自分の興味ある身近な店舗の設定をしている。完成した作品のプレゼンテーション会を行い、自分の作品の振り返りをさせて

いる。また、友人の作品の良い点を出させている。普段何気なく接している街頭のウィンドウ・ディスプレイも、様々な造形上の工夫やユニークな発想がいかされていることは生徒にとって新鮮な発見であったようである。更に、美術の造形性が日常の消費活動と社会（生活）の密接な結びつきを持っていることを実感し、改めて生活の中に生きる美術の大切さを理解させることが出来たのが成果である。「コンセプト」の概念の理解と長期制作のモチベーションを維持させるのが課題であった。

作品紹介
・「ベビー用品店」家族に赤ん坊がおり、興味があったらしい。ベビーカートなど丁寧に作られている。
・「きもの店」針仕事など苦手そうな男子生徒が一生懸命に布を縫っていた。きものを吊してディスプレイしてある のが工夫点だそうである。
・「靴店」あまりにも小さくて、制作している時は良くわからなかったが、棚に一気にディスプレイしたその細かく丁寧な一足一足の仕事ぶりに感心した。
・「めがね店」ディスプレイの台はフィルムケースを活用している。できるだけお金を掛けないような工夫も促している。
・「時計店」商品そのものより、時計のメカニックな部分を表現したかった作品。時間に余裕のある生徒が外壁まで制作しているがその背景画にたくさんの歯車が描かれている。
・「スポーツ用品店」造形的な力に乏しくてもアートボックスに付属しているスチレンボードに描くだけで、ボールなどの商品を表現できる。
・「きもの店」の材料も模型用を購入するなど工夫している。
・「サーフィン用品店」チレンボードを差し込むことで波など奥行きの表現が容易である。

・ 鑑賞から表現への繋がりのある複合的題材である。
・ 美術が生活にどのようにいかされているのか、という確認をしないと美術の授業としての意義がない。
・ ディスプレイは芸術的なものと単に商品を売る為だけのものと区別して教えることは必要である。
・ 立体構成の要素・素材・照明と、それぞれの効果的な扱い方に発展性が見出せる題材である。

4　助言２

テーマ　～地域の方や企業、異年齢との共同学習を通して～

地元特産品の川中島白桃のPRを題材として、企業・大学生・地域の人とのタイアップを図りながら、有効な造形活動の実践をした。

5　提案３

美術の授業そのものに意味を見出せず、制作に取り組めない生徒がいる。それで、身近な生活をより豊かにすることに繋がっている造形活動を感得させる考えからこの題材設定をした。「桃農家」が多い保護者、「JAグリーン長野川中島共選所」とのタイアップにより、地域や保護者も美術教育に関心を持ち、学校の学習だけではなく、美術は生活に密接に関係し、豊かにするものだと気づかせることで学習の意義を理解させたい。また、外部の異年齢（信州大学教育学部芸術教育専攻4年生）の人との交流で、ものの見方を広げたり、発想などのつまずきを解消したりできる。大学生のほうも教える視点だけでなく、「学ぶ視点」を関わることで、互いに学びあう良さを感得できた。PR方法はパッケージデザイン・マスコットキャラクター・ポスターなどから自分で選択し、全国に白桃をPRする構想を練る。学習カードを活用することで発想・構想をより深められた。友人や大学生からの具体的なアドバイスが記入された付箋をカードに貼り、自分なりのPR構想を整理したり、練り直したりすることができた。更にそれが実際にポスターや携帯ストラップとして企業に採用されることで自己肯定感が高まったといえる。そしてPRの役に立ったという思いと、美術が生活に結びつき、大切なものであるという気づきに繋がったこと、地域の良さを見直すきっかけとなり、生徒自身が自分の住む地域に誇りを持てるようになったことが成果である。課題は他教科、総合的な学習との関連の中でより充実した学習展開を構築していくことである。

また、美術科として「考える」「クリエィテブな力」「コミュニケーション能力を高める」教科として生涯美術を愛好してほしいと願っている。

6　助言３

・1年生のオリエンテーションは基礎的な力としての美術を取り上げている。
・地域性をいかした身近なものからの発想が良い題材だが、それが他の地域でもいかせると良い。
・大学生との交流を通して多くのものの見方ができるもの興味深い。
・自己を見つめながら、他者も考える、コミュニケーション能力を高める教科としても美術は今、必要とされる教科なのではないのか。
・地域の良さを見つめ、そこから何を発想するかが大切なことだが、これからこの題材をどのように発展させていくか課題である。

7　三つの提案を交流させた協議

・ 地域との結びつきのの大切さを感じた。地域から何が出来るのか考えることは面白く、様々気づきから地域の構成員としての自覚が生まれる。
・ 職業体験、総合の学習などと美術を結びつけて教科を考えていかないとこれからの美術を教として学校の中だけで実践していくのは難しいと考える。
・ 総合の学習と美術との兼ね合いとしてアイデア、プレゼンテーションの方法に差が出てきそである。
・ 作品は採用されるからいいのではなく、デザインとしての目標が達成できているかで評価しいる。鑑賞出来る内容でも総合との差があるのではないかと思う。
・ 住む環境による題材の違いは参考になった。発想というのがポイントである。
・ アイデアを引き出す工夫として、言葉の連想からのアプローチ、参考作品の厳選、導入部での思い、見方の切り替えなど様々な意見が出された。

分科会 10　地域とつながろう！

■実践発表 1
提案者　平根聡子　日立市立河原子中学校 茨城県
助言者　鈴木利昭　日立市立大久保中学校 茨城県

■実践発表 2
提案者　山本　実　相模原市立大沢中学校 神奈川県
助言者　下薗克秀　相模原市立藤野中学校 神奈川県

■実践発表 3
提案者　小俣博昭　大月市立猿橋中学校 山梨県
佐藤政道　大月市立鳥沢中学校 山梨県
助言者　條々篤美　大月市立大月東中学校 山梨県

■司　会　児玉由美子　文京区立第九中学校　東京都
■記録者　中村　知子　文京区立第五中学校　東京都

1　提案 1

テーマ　～日本の美術、再発見～

・美術館との連携での鑑賞学習

茨城県天心記念五浦美術館の「日本画トランク」貸し出しを活用し、作品の扱い方や模写などにも取り組んだ。「日本画を知らない」、「美術館に行ったことがない」という生徒が、半数から 3 分の 2 位いた。その生徒たちが、額をかけたりして実際に触わり、緊張して正座し、身近なところで鑑賞したことで、「本物はすごい迫力だ。」「もっとたくさん見てみたい。」など、驚き、感動した。学芸員の方に資料や助言をもらい、また、掛け軸や絵巻の扱いの研修をさせてもらって、授業内容を検討して行った。

・地域との連携での表現・発表活動

市の百年塾から市民教授を招き、「絵手紙制作」を行った。その作品を地域の交流センターに展示したり、お年寄りに送り交流した。作品を通して話題作りし、コミュニケーションの場が広がった。実生活で学びを生かし、学校の中では得られない成果と喜びを得た。

2　助言 1

アンケート調査を分析しての実態把握は、大事な出発点である。日立市の百年塾や美術館の活用で、本物への驚きを引き出し、生徒の感動を間近に捉えている。日本の伝統文化での授業の組立を自分で検証して行ったのが良かった。時間外に美術館に出かけて相談したり、緻密に準備を進めて、成果のある取り組みを行っている。

課題は日常の多忙の中で外部へ出ることを、効率よくできる工夫が必要である。

このような活動を重ねていくことで真の教育が高まっていく。また、学校の押しつけでは地域との連携は難しい。

3　提案 2

テーマ　◇造形さがみ風っ子展の可能性　◇小学校・中学校連携共同作品作り

今年 29 回目の野外造形展を開催した。これは小学校とのコラボレーションから始まった。たくさんの問題を乗り越えながら継続してきた。中学校から小学校に出向き、素材や技術の提供、小学校での授業、小中合同の活動などで発展させてきた。やんちゃな小学生が真剣になり、中学生が小学生に学ぶねじれ現象もあった。「親父の会」など保護者との関係もでき、地域との関わりも広まっていった。小学校との時間調整なども大変だったが、中学校側は成績処理などで大変な時が多く、やめようという意見もあった。が、野外美術館として美術の取り組みを市民にアピールするには良い機会であり、光や風を捉えた展示の工夫をし、見せる工夫をした。台風の中の風っ子展に傘をさして見に来た親子があり、その次の日には多数の参観者がきた。

作品の点数は 1 万 5 千点、選抜した作品ではなく学級、学年全員の作品を展示する。屋内展示とは異なり、雨風、光、虫や雑草も作品と関わりを持ってくる。迷路作りのプロジェクトでは、数学科や用務員さん、学校中を巻き込んで共同作業で完成した。造形の楽しさ、一緒に作る喜びを体験した。

4　助言２

地域で生きると言うことは、頼る、やってもらうなどの関わりもあり、関わりを広げていくには時間がかかり、手間暇をかけることが必要である。教員はその繋がりを付けていくことであり、教員どうしは、来年に目を向けて行くことである。

取り組みに完成とはないのではないか。また評価にはコメントを付けさせるのがよいと思う。子供たちの感覚の鋭さを、緊張を持って拾っていくことが大切である。

5　提案３

テーマ　　～いいとこ　見～っけ！！　おおつき再発見散策マップ～

昭和 39 年、北都留地区美術部会の有志で、「イーゼル・アクション」と命名して活動を始めた。週 5 日制で美術の時間の削減で、土曜日を使い、地域への開かれた授業実践を目指した。2001 年 11 月、「飛び出す造形教室」を提案し、小中学生とその保護者と共に活動を始めた。

第 1 回目は土笛制作から始めた。ペットボトルの輪切りや陶芸は人気があった。植木鉢など焼き物を行い、時間的に授業ではできないことを行った。動物発見隊と称して虫などを粘土で制作して木や竹に付け、展示方法を工夫して昆虫館として発表した。段ボールでのランチョマットなども制作した。七宝焼きなど色のきれい物の制作には感動していた。

商店街の活性化事業として商店の方から話があり、シャッターを大きなキャンバスに見立てた単色の取り組みをした。これを希望する子は多数あり、2 回で 110 名くらいいた。地元の高校の、美術部の生徒も参加した。完成したとき地元の方が祝ってくれて、全ての写真を撮ってスライドにし、上映会も行った。残念なのはシャッターが開くと見られないことである。

また、地区の部会の全教員が普段の授業の作品を、市民会館を借りて展示した。4 回目になる。500 点くらいの作品である。

学校から飛び出すことで、教材開発や授業の実験ができた。地域をフィールドにした教育活動でこれからも学んでいきたい。

6　助言３

イーゼル・アクションと言う教員の任意の実験的活動が、多様な活動に発展し、市民権を得てきたのは粘りによるものである。問題は今後、地域にどれだけ定着できるかである。経済的問題がある。場所の提供はあっても、資金力のないことは、私たちの地域の大きな課題である。また地域に産業がなく、若い人材がいない。子供が 1 年で 100 人減ってしまった地域もある。昼と夜の人口差も大きい。地域の文化をどのように残していくか、それを子どもたちにどのように見せていくか、大きな課題だと思う。

7　三つの提案を交流させた協議

・今日の発表はそれぞれ、長きに渡ってじっくり取り組み、成果を上げた実践である。
・信頼関係を築いて地域との連携を広め、「心の命」を育てることを目指していくことが大切なのではないか。
・大月市の土曜日の活動は実際に学校の教材として使えるものが多い。
・風っ子のような、屋外展示の持つ可能性に触発された。
・絵手紙やイーゼル・アクションなどの取り組みは少ない時間ではやりにくく、忙しさの中で封じ込　めてしまいがちなことである。
・発表を聞いて、地域とのつながりや野外展示への意欲がわいてきた。

分科会 11　見つめよう、感じ取ろう！

■実践発表１
提案者　町田　廣泉　板橋区立志村第一中学校　東京都
助言者　篠原やよい　町田市立薬師中学校　東京都

■実践発表２
提案者　北根　晃一　千葉市立幕張中学校　千葉県
助言者　白濱　正人　千葉市立磯部第一学校　千葉県

■実践発表３
発表者　佐藤　隆幸　十日町立十日町中学校　新潟県
助言者　鈴木　　明　新潟市立横越小学校　新潟県

■司　会　石川　達也　板橋区立桜川中学校　東京都
■記録者　石井　和子　板橋区立板橋第二中学校　東京都

１　提案１

テーマ　～見つめよう、感じ取ろう！～

中学校では、「つくる喜び・みる喜び」を子どもの主体的な活動を支える実践から分析し育まれる力を検証したいと考えた。創造的に自分自身を表現する行為は、他者や社会、文化とつながることで実社会に生かすことのできる力になると考えた。心と体を存分に働かせ、自分にとっての意味を自ら作り上げていく表現と鑑賞の活動のうち、特に鑑賞の領域にスポットをあて授業研究を行った。

具体的には、提案発表内容の要旨で述べたとおり鑑賞教育においては「感じる心」と作品の背景を理解する能力の２つの力の育成が重要であるとの視点に立って実践を行った。

また、授業以外の夏休みの自由課題などを通して、東京という地の利を生かした美術館巡りなどを推奨し、美術作品をより身近なものと感じられるように配慮した。

実践を通して、出来るだけ多くの作品に触れさせることにより、自己の感性に合う作品を選択するという能動的な態度を育成することができたと考える。感想をまとめるにあたり、文字だけではなく、スケッチや模写表現手段も用いたことにより自分が感じたことをより具体的にまとめることができたと考える。

最終的には本物の作品に触れさせたいので、これをきっかけに自主的に美術館へ足を運んでもらいたい。また、自分とは違う見方についても、より深い気づきができたと考える。教育機器の活用や外部機関との連携など、更に研究を深めていく必要がある。

２　助言１

子どもたちに鑑賞させる力をつけることは、生涯学習としても重要である。鑑賞は感じる心と背景を理解することが重要。背景を理解する上では、子どもたちが今まで積み上げてきたものが大切で、他教科との連携をはかることがより重要となる。人は、感じることを明確にするために、自分の言葉を獲得するために他人の言葉を聴く。子どもたちに安直に感想を言わせてはいけない。子どもは少しずつ感じる心が蓄積していく。成長とともに感じる言葉の幅を増やしている。そのプロセスの一端を我々美術教師は担っている。

また、身近な所に多くの美術館があるので、家族で行くように促すことは大切である。これも地域と美術教師との連携である。鑑賞の対象をどこから持ってくるか、これからは、データベースとして蓄積していくことも必要であろう。

３　提案２

テーマ～鑑賞から制作へ　　アンディ・ウォ―ホルの作品から～

表現と鑑賞は同時に扱われなくて　　はならないが、実際は、表現に重きを置くことが多く、また、鑑賞の授業も美術史的に扱われることが多いのも現実である。自分を含め、学生時代に身につけた美術史的知識、理解を鑑賞と考え、その体験による知識を教えることで鑑賞の授業を行っていると考えることが多いのではないか。

知識理解に偏った美術史的な扱いが多く見られたが、鑑賞教育とは、鑑賞を通した人間形成、生涯にわたって造形し、物を見ることを楽しむということを重視したその基礎を養うことが大切であると考える。とりわけ、生涯教育が叫ばれ、多くの美術館ができ、毎月展覧会が催され、来館者であふれていることからも、生涯にわたって美術鑑賞を楽しむ基礎的な能力を育てていかなければならない。

鑑賞を単発授業として実施するのではなく、年間のスケジュールの中で互いに連携しあうこと、授業時数削減という点から鑑賞授業を用いた作品制作への発展も重要であると考えた。そこで本題材では、見ることから得た力を制作に応用しようというものである。アンディー・ウォーホルの「ＦＬＯＷＥＲＳ」を鑑賞することで、日常の生活の中で深く考えることもなく見ていたりするものや、先入観の強いものが、

表現の仕方を少し変えるだけで印象が大きく変わり、そこに造形的な面白さがあることを事前に鑑賞授業で学習する。その際に色ということに視点を置いて鑑賞させる。色の使い方で見方が大きく変わるということを鑑賞させ意識させる。それを受けて生徒自身がアンディー・ウォーホルになったつもりで作品を制作するという授業を構成した。

4　助言２

鑑賞はヨーロッパの印象派や古典的なものを使うことが多い。しかし、今回のウォーホルは浮世絵を連想させ、Ｔシャツの模様感覚で、子どもたちにとっても生活の中に取り入れた美術ということで身近である。表現と鑑賞は一対のものである。子どもたちにはウォーホルの作品はひとつのきっかけであり、いろいろな多様なものを見せることは価値がある。指導者が間口を広くして、子どもの美術の感性を育むことに注意しなければならない。

残念ながら、美術の授業はだんだん時間が減少してきているが、美術で取り扱わなくても学校の環境の中に鑑賞を取り入れることはできる。複製画でもいいし、子どもの作品を廊下に掲示すれば、鑑賞教育といえる。子どもは作品を見て、心地よさ、存在の圧迫感を我々よりも感じることができるはずだ。子どもの感性をいかにして引っ張り出すかが大事だ。鑑賞の基本は、心地よさである。

5　提案３

テーマ　～作品制作時にこそ有効な鑑賞ができる～

私は生徒の作品制作時にこそ自分の作品や他の生徒の作品を「見つめ」「感じ取る」鑑賞をするべきだと考える。そのための実践の一つにパソコンの作品画像データベースを用いた鑑賞がある。これは美術室においたパソコンに過去の生徒の作品画像を保存し、生徒が作品制作時にその作品画像をデータベースとして随時鑑賞して制作の参考にし、制作していくというものである。実際に自分が制作し、自分の制作したい作品について考える時にこそ、その参考となる作品画像の独創性や表現力が生徒自身に迫り、感じることができる。

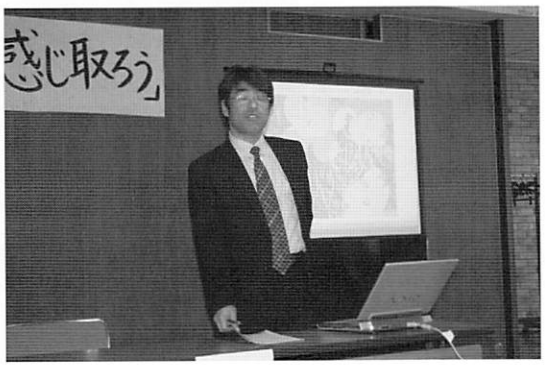
実践を通して、生徒たちは参考作品を見ることができる校内のパソコン環境において、授業時はもちろん昼休み等にも意欲的に参考作品を鑑賞するようになった。このためにも、校内のネットワーク環境をより充実させることが大切である。また、このデータベースをＷＥＢ上に制作し、どの学校からも接続し、活用できるようになることが理想である。その場合には生徒から著作権の許諾を得ておく必要がある。また、たくさんの学校から作品が集まれば、作品が増えて様々な視点の参考となるものが集まり、より意義深いものとなる。

6　助言３

環境が人を育てる。お互いの生活の中で価値を認め合うことが、鑑賞教育の原点である。鑑賞には名画を通しての鑑賞と制作を通しての鑑賞がある。両方に共通しているのは、何かしらの根拠があることである。思いをどのレベルでもいいから共有することが、鑑賞力を高めていく。鑑賞力とは、感じる力である。根拠のやりとりの中で、鑑賞の視点が増えていく。自分の鑑賞する力を増やしていくことが、鑑賞教育である。

子どもは地域の生活の中で、感じることに価値を見出し、自分の言葉で想いを伝えていくという積み重ねの中で追求していく。

今回の提案のように、制作活動の中に鑑賞を取り入れ、必要感を持たせることも大切である。また、環境整備も大事な鑑賞制作活動を支えている。これまでの提案者の研究に敬意を表したい。



役員一覧

第４７回関ブロ東京大会・運営組織表

役職		氏名	所属	Tel	Fax
関ブロ理事長		辻 政博	文京区立誠之小学校	3811-7171	5689-4551
大会会長		正留久巳	日野市立平山中学校	042-593-3015	042-593-3014
大会副会長		牧井直文	中野区立富士見中学校	3381-7270	3381-7279
都中美大会実行委員長		新保邦明	板橋区立上板橋第一中学校	3956-8126	5995-8352
都図研大会実行委員長		沼野章彦	文京区立小日向台町小学校	3947-2371	3947-3038
都中美大会会場校校長		後藤一男	文京区立茗台中学校	3811-2969	5689-4559
都図研大会会場校校長		鴇田光俊	文京区立青柳小学校	3947-2471	3947-2045
実行委員	関ブロ事務局長	本間基史	新宿区立落合第六小学校	3565-0943	3565-0985
	都図研理事長	時任 勝	調布市立布田小学校	042-480-8821	042-480-8821
	中央ブロック長	榎本 稔	文京区立青柳小学校	3947-2471	3947-2045
	中央ブロック各区図工部長及び担当	山本秀夫	千代田区立昌平小学校	3251-0448	5256-6708
		榎本 稔	文京区立青柳小学校	3947-2471	3947-2045
		岩寄長玉	中央区立有馬小学校	3666-5702	3668-2364
		安倍啓斎	台東区立平成小学校	3831-1530	3839-5154
		古川邦明	文京区立篭籠町小学校	3944-1471	3944-6148
大会顧問	各区小中学校顧問校長	馬場俊一	台東区立浅草小学校	3841-1575	3847-0162
		渡邊尚美	文京区立文林中学校	3827-7671	5685-4960
		山口 勉	北区立赤羽中学校	3901-4291	3901-4456
		瀬川博明	豊島区立西巣鴨中学校	3986-0661	5950-4679
研究局長		南 育子	墨田区立堤小学校	3614-6921	3614-6850
副研究局長		松永かおり	目黒区立第八中学校	3714-4594	3714-4751
事務局長		大道博敏	文京区立駒本小学校	3827-5451	5685-4928
副事務局長		安田宣幸	江戸川区立松江第四中学校	3652-7591	3652-7592
会計部長		飯塚雅子	文京区立本郷小学校	3813-7551	5689-4552
庶務部長		児玉由美子	文京区立第九中学校	3821-7178	5685-4955
渉外部長		平野康夫	文京区立第十中学校	3944-0371	3944-5914
事業局長		眞城勝彦	品川区立鈴ヶ森中学校	3765-2849	3765-2751
副事業局長		濱脇みどり	豊島区立千登世橋中学校	3987-6285	5950-4680
会場部長		近藤幸司	渋谷区立代々木中学校	3466-0181	3466-9331
庶務部長		須藤千絵	豊島区立池袋中学校	3986-5435	5951-3906
厚生部長		松本澄代	八王子市立石川中学校	042-691-6881	042-691-9143
編集局長		庖刀由利子	豊島区立巣鴨小学校	3946-9551	3946-3690
記録部	小	高波亜矢子	文京区立千駄木小学校	3821-7168	5685-4926
	中	藤本 卓	北区立紅葉中学校	3915-8225	5567-4529
紀要部	小	奥 真智子	文京区立金富小学校	3811-0066	5689-4549
	中	瀬田宜正	北区立明桜中学校	3913-8336	3913-8363

<一次案内>

第48回　関東甲信越静地区造形教育研究大会　群馬大会
第45回　群馬県造形美術教育研究大会　高崎大会

群馬大会実行委員会　委員長　尾内　理樹

大会テーマ

自分らしさ　つくりだす力　いきいき造形

昨今、子供達を取り巻く学びや生活の場において、「自分らしさ」、「自分探し」、「自己発見」などの言葉を頻繁に耳にするようになりました。造形教育においても、子供達が本来もっている個性や柔らかい感性、持ち味などの「よさ」が存分に発揮できるような実践に出会う場面が増えました。そこでは、子供達の創造的な表現欲求や、豊かな感性を、改めて感じることができます。

そこで、私達は、「自分らしさ　つくりだす力　いきいき造形」をテーマに、純粋な心の子供達が、より人間らしく生きるために、自分らしい柔らかな感性を培い、ものを創り出す活動を通じて喜々とした自分を確立し、自分と異なった価値観をも理解しながら、他と共生して心豊かに生きる力を育む造形教育を実現したいと考えています。

そして、発展し続け、物が豊かな社会の中にあって、つくりだすことの意味や、つくりだしたものに秘められた心やぬくもりなど、心の豊かさを忘れかけている子供達。そんな子供達に、自分らしさを存分に発揮し、つくりだす力を身に付け、いきいきと造形し、表現の喜びを十分に味わわせてあげたいと思います。

大会テーマの**「自分らしさ」**とは、現在、待ち合わせている自分の「個性、柔らかな感性・持ち味など」であり、自分のよさがたくさん集まって自分らしさになると考えます。また、自分らしさは、挑戦し、試行しながら思いもよらない効果や新しい表現を体験していく中で更に高まっていくなど、固定化した見方ではなく、絶えず変化していくものととらえています。

「つくりだす力」とは、発想する力・構想する力・表現する力や感覚などを含めた、ものをつくるときにはたらく総合的な力ととらえています。また、この総合的な力を発揮するためには、造形的な基礎基本の力や創造力などの力が不可欠です。

「いきいき造形」とは、一人ひとりの思いの自己実現にかかわりのある全てのものを包含した言葉ととらえています。それは自分なりに感じ取ることをはじめ、思いを生む・育てる・表す・味わうなどの過程やその後の生活に生かすことにかかわる造形活動の「意欲や喜び・共生など」を内包しています。

子供達は、自分の思いや願いを絵や形にしていくという根源的な表現欲求をもっています。それを思う存分発揮することによって自信と自立への実感を味わい、更に互いを磨き合いながら人間力を高めることができると期待しつつ、本テーマを設定しました。

1　期　　日　平成２０年１１月１３日（木），１４日（金）

2　会　　場
○群馬音楽センター（全体会，講演会会場）
○高崎商科大学佐藤幼稚園（公開保育）
○高崎市立南小学校・高崎市美術館（公開授業）
○高崎市立城東小学校・高崎市タワー美術館（公開授業）
○高崎市立高松中学校（公開授業）
○高崎市立並榎中学校（公開授業）
○高崎経済大学附属高等学校（公開授業）
○高崎市中央公民館（分科会会場）
○高崎シティギャラリー（作品等展示会場）
○もてなし広場（駐車場）

3　講演会講師（予定）　山口　哲郎先生（画家　山口　薫氏の甥）

4　開催組織　主催　関東甲信越静地区造形教育連合、群馬県小学校・中学校教育研究会小学校図画工作部会、群馬県小学校・中学校教育研究会中学校美術部会、群馬県造形美術教育研究会、高等学校教育研究会美術工芸部会、群馬県国公立幼稚園教育研究会、群馬県私立幼稚園協会

後援予定　文部科学省、群馬県教育委員会、高崎市、高崎市教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国公立学校教頭会、群馬県小学校長会、群馬県中学校長会、群馬県高等学校長協会、群馬県国公立幼稚園長会、高崎市小学校長会、高崎市中学校長会、群馬県小中学校 PTA 連合会

お　わ　り　に

平成19年11月8日、9日の両日にわたって行われました、“第47回関東甲信越静地区造形教育大会　東京大会”が遠い過去の出来事のように感じられます。参加された方々も、この三ヶ月間お忙しい日々をお送りのことでしょう。

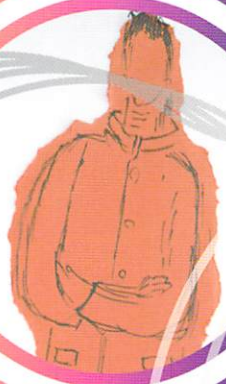
振り返ってみますと、47回大会は非常にコンパクトにまとめられた大会になりました。会期が2日間で、会場も1日目が文京学院大学・短期大学ホールの1会場、2日目が小学校・中学校各1会場となりました。しかし、参加者は800名を超え、遠く北海道や中国地方からの参加など、関心の高さの一端が伺えました。実際、大会前には多くのお問い合わせが有り、電話やメールの向こうから、本大会への期待の大きさを感じました。

しかしながら今は、運営に携わり、大会を終えたことの充実感や達成感などより、むしろ多くの方々への感謝の気持ちが日に日に増すばかりです。計画段階では想像すらできなかった、多方面の方々のご支援、ご協力無しでは成り立たなかったという事実の重みを、大会を終え、日を重ねるごとに改めて感じるからです。ここに、感謝の気持ちをこめて、お忙しい中御快諾いただいた講師及び助言者の先生方、本大会にご来場頂いた皆様、多方面でご支援くださった、東京都並びに文京区教育委員会をはじめといたします、行政関係の方々、そして、運営に携わったすべての方々と、ご協力頂いた皆様に、心より御礼申し上げると共に、次期群馬大会の成功を心よりお祈り申し上げ、本大会の最後のご報告とさせて頂きます。

第47回関東甲信越造形教育大会　東京大会
大会事務局長　大道博敏

２００７第４７回関東甲信越静地区造形教育研究会　東京大会
第４６回東京都図画工作研究大会　中央大会
第２５回東京都中学校美術教育研究会　第４ブロック大会

発行日　平成２０年３月
発行者　関東甲信越静地区造形教育連合理事長　辻　政博
関東甲信越静地区造形教育研究大会会長　正留　久巳
事務局　大道 博敏　東京都文京区立駒本小学校
〒113-0023　東京都文京区向丘２－３７－５
Tel：03-3827-5451　Fax：03-5685-4928
印　刷　(株) 椎名印刷所　東京都文京区白山１－２６－１８
Tel：03-3811-1391



TOKYO 2007